

ロングウキ
ロンギイマン
マルザイル、
ガエルトン等
何れも佛獨
境にあり。

をミユルハウゼンに壓迫せり、次いで佛軍は、更にミユルハウゼンに迫り、同日夜を以て之を陥る、之れ實に獨佛第一會戰なり。ミユルハウゼンは、アルトキルヒと共に、アルサス州にあり、獨逸帝國の最南端に當れる都市なり、佛蘭西及び瑞西の國境を去ること共に數十哩を隔つ。ミユルハウゼンは、獨軍師團司令部の所在地にして、之が守備稍堅きものありしを知る可く、而して西電の報ずる所によれば、此の役佛軍の死傷一萬五千、獨逸の損害三萬に上れりと云ふ。

爾來此の方面にありては、特に戰鬪の著るしきものなかりしも、ロングウキ、ロンギイマン、マルザイル、ヴェルトン地方に於て小戰鬪の繼續せるものあり、八月十二日獨軍は、ミユルハウゼンの恢復を計らんとし、その一軍は遂に佛軍を追ふて之を奪ひ、次いで又ヴェルトンに戦ひて、大に佛軍を破り、將校十名、下士卒五百名を捕虜とし、大砲四門を鹵獲せり。

一面佛軍は、佛獨國境モンメデイーの南方、オセーン河畔に於て佛領に侵入せんとせる獨軍を邀撃し、二日に亘る激戰の後、之を驅逐し、北ぐるを逐ふて龍騎兵聯隊を全滅せしめ、將校以下一千名の捕虜を得たり、次いで比較的優勢なる佛軍の一部隊は、ヴェルジュ後方より進みて、セル、ベサヌに入り、同地にありたる獨軍を潰走せしめたるが、時恰

も獨の白國侵入軍が、リエーデ其他に於て白軍の阻止する所となり、増援急を要するものあり、獨逸は、アルサス州方面に於ける攻勢を漸念するに至れり。

第二節 佛軍退却す

佛軍已にアルサスに入り、一びその要地アルトキルヒ及びミユルハウゼンに佛國旗を揚げ、洲民亦單食壺裝して之を迎へしが、久しからずして獨軍の擊攘する所となり、徒らに洲民の悲嘆を買ひしが、八月十五日に至り、全線活動を起して、再び二州を蕪捲せんとせり、時にナンシーより突出せる佛軍のローレンに侵入せるものあり、即ち兩者相呼應して進み、ミユルハウゼンは再び已の手に歸し、更に堅固なる陣地をアルサス州に占むるを得たり、同時にヴェルトン山脈の隘路亦その確保する所となりて、勢威大に振ふものあり、タン亦その手に歸して、將にストラスブルグの要塞に向はんとす。

佛軍のミユルハウゼンを占領するや、獨軍附近の村落に據りて、隙を窺はんとす、佛軍即ち進んで之を伐ち、壯烈なる白兵戰を交へて之を擊攘し、大砲二十門、彈藥車六輛を鹵獲して、獨軍は見苦しき敗退を遂げぬ、其他タン之の戰鬪にありても、佛軍の兵威最も振へるものあり、獨のフォンテルムリング將軍は負傷し、歩兵第三十二聯隊の軍旗は、佛軍の得る所となれり、蓋しその損害亦頗る大なるものありしならん、此の間戰地方面に於ける

空中戦亦最も激しきものあり、一獨逸飛行機は、その偵察に従事中佛砲兵の狙撃する所となりて墜落し、二名の將校は捕虜となれり、又ナンシー方面にありては、勇敢なる佛軍飛行家は、獨のツエツペリン飛行船に爆弾を投じて之を破壊し、二十餘名の乗組員をして全滅せしむ。

之れ寧ろ豫定の退却なりしか。

ナンシー方面よりローレン州に入る佛軍の一隊は、ルネブイユよりアブレクールに入り、シレー及び前方の高地を確實に占領し、更に進んでメツトーストラスブルグ中間の要地たるザールブルグを占領せり、而もアルサス、ローレンに在る獨軍は、勢威全く揚らず、佛軍をして無人の地を行くの概あらしめ、佛軍をして最も得意の色あらしめしが、八月二十三日より二十四日に亘り、獨軍は、大軍と部署して佛軍に當るや、元來多く優勢ならざりし佛軍は、全くその撃攘する所となりて、二州の地亦佛軍の片影を見ざるに至り、國境を越えて退却し終れり。

佛軍の兩州侵入は、斯くして退却に終りたりと雖も、之によりて多年の宿怨を晴らし、士氣を鼓舞せるの效果大なるものありしのみならず、よつて獨軍の白國侵入を牽制せるの效果甚だ少しとせず、而して此等の地は、軍略上特に重要ならざるを以て、侵入軍の總數亦僅に五軍團に過ぎざりき。假令獨軍の逆撃なしとするも、更に深く敵地に入らんか、

獨逸軍の爲に退路を絶たるゝの憂少からず、況んや兩軍將に大決戦に出でんとする佛白國境方面の兵力を割くの不利亦大なるものあるをや、彼等が獨軍の一撃に遭ひて退却せるもの、決してその怯懦を云爲す可からざるなり。

第三章 東方戦局

西方に於て、獨軍が聯合軍に對しつゝある間に、露西亞の動員は着々として進み、その大軍は猛烈として東普に殺倒せり、其他ガリシア方面亦漸く戦局の展開するあり、舊波蘭土の地、砲煙の濛々たるを見る。

第一節 露・獨境攻防概観

ボ、ヘ二州の併合に際し、カイセルの取りし威壓策は露を以て道般の計畫に出でしめたり。

ボ、ヘ二州併合の事ありて以來、露西亞は到底獨逸と事を讓すの止むを得ざるものあるを思へり、即ち之が爲に備へんとし、慘憺たる苦心を以て、西方國境方面に於ける準備に怠らざりき、從來露國が獨逸の國境上に執れるところは、主として防禦にありき、而も今や自ら進んで攻勢に出でんとす、之れ豈その結果にあらざるなきを得んや、而して露西亞が獨逸に對する配備を見るに、ワルシヤウの五個軍團、ウイエルナの四個軍團、ペートルスブルグの三乃至四個軍團、キユフの二個軍團を以て、その豫備兵の動員を待たずして敵國に

侵入せんとするにあるが如し、開戦當初に於て、ワルシヨウよりグロゾノ北部にある兵、已に百萬を下らざる可しと報ぜられたるもの、之を證するものにあらずや、然りと雖も、露西亞の動員は、地勢及び交通機關の關係上、到底獨逸の夫れの如くなる能はず、遂に長き時日を動員の完成に致すは止むを得ざる所にして、一朝敵國に侵入せんとするに當りても、亦最も敏速なるを得ざるものあり。

獨逸は露の此の計畫に對し、如何なる措置に出でんとするか、彼はケーニヒスベルヒの大要塞を中心とし、東部普魯西の防備を全うせんとせり、ケーニヒスベルヒは、最新式の築城に成れる堅塞にして、氣球大隊を之に附設し、旁ら國境上の展望に當らしめ、常に大なる警戒を露西亞に加へつゝあるなり、之を獨逸東方國境防備の最左翼とし、最右翼に當りてトルレの大要塞あり、之よりワイグガル河に沿ひ、幾多の要塞を備へて、有事の日に備へんとす。

一面又埃が露に備ふる所や如何、先にも説ける如く、埃の全軍團は十六個軍團にして、中塞爾比亞方面に對し八軍團及び獨立三師團、騎兵三師團を配備したるを以て、剩す所は八軍團を算するのみ、然れども、戰團の主線が已に露埃國境に移りたるを以て、その塞爾比亞に向へるものは割きて、此の方面に轉廻せしむ可きや勿論にして、之等の大軍は、主

ケーニヒスベルヒは普魯西の地に於てその防備最も固なり。

力をレンブルグ及びクラカウの要塞に托し、その間の地區にありて露軍を待たんとするならんか。

第二節 露軍東普に入る

普埃戰役や、普佛戰役や、共に普魯西參謀部が多年の計畫によりて豫定せられたるところに屬し、その干才を交ふるや、一朝にして普軍は勝利を擧み終れり、カイゼル今次の大亂を作す、豈始めより之が策なからんや、その周密なる鐵道網は、一に軍略上の見地より張られ、一呼して全國兵員を召集し得可く、一令の下西向東面せしむ可し、露や佛や即ち然らず、その豫め計つて備ふるあるや勿論なるも、設備意の如くならずして、この動員の如き、獨逸の如く爾く迅速なる能はず、佛にして尙十餘日を遅ると云はれ、露の如き、少くも開戦後一ヶ月ならずば、到到大兵を國境に送る能はざる可しとせらる、之れやがて獨の乗せんとする所にして、佛の動員完成せざるに乘じて一舉國境を超え、急馳巴里を屠ると共に、直ちに軍を旋して東方露に向はんことを期せり。此を以て開戦の初め、その精兵は擧げて白佛國境方面に向ひ、東の方露に對するの防備頗る薄弱なるを免らず、而も白耳義の善戰は獨の作戰を齟齬せしめ、白民義の突破に時日を要すること多からしめたるを以て、獨軍が聯合軍と白佛國境に争ふの際、早くも露の大軍は東普の國境に臨めり。

露の動員意外に早く完成せるもの、亦獨の作戰に多くの齟齬を生ぜしめたり。

グムビネン露
國境アイト
クーンネンより
インステルブ
ルクに至る中
間の要地。

露西亞已にその動員の着々進捗するあり、大兵は陸續として國境に進發す、そのキエフ軍管區に屬する二個軍團は、先づ南の方塊のガリシヤに入り、レムベルグ、クラカウの要塞線に迫らんとし、レネカンブ將軍の率ゐる四個軍團は、北の方東普の地を侵し、南北二方面より突出して獨軍を牽制しつゝ、ワルシヤウ方面より進出する中央主力の運動を容易ならしめんとせり。レネカンブ將軍は、日露の役バイカル騎兵團を提げて縱横馳突せるの老将、今やウイルナ軍管區に屬する第二、第三、第四、第二十の四個軍團を率ゐ、コサツクを先頭として露地國境を越えぬ。當時獨軍の此の方面に在るもの、第一、第二十及び豫備一個軍團の三個軍團に過ぎず、リツク、アイトリーネン間の國境第一線に沿ふて守備しありし獨軍は、露軍の一蹴に遭ひて空しく潰散し去れり、露軍即ち敵の右翼に於て廣大なる陣地を確實に占領すると共に、急追インステルブルグに迫らんとし、八月二十日グムビネン附近に獨の大部隊と激戦を交へ、之を撃退するや、二十一日その中央部隊は、猛烈なる攻勢に轉じて、獨軍をアンデラツプ河の右岸に壓迫し、之に大損害を與へ、砲三十門を鹵獲し、インステルブルグの要地亦その手に歸す。インステルブルグは、東普魯西に於ける獨逸鐵道の交叉點にして、露獨國境を距ること六十キロ、ケーニヒスベルグの要塞を距る九十キロの地にあり、露軍は此の要地の占領によりて、敵の交通に多大の支障を與へ、自

トルン要塞と
ダンチツヒ要
塞の間に更に
クラウデンツ
要塞あり、共
に無双の堅塞
たり。

軍の活動に至大の利便を得たり。斯くて露軍は、更にその戰線を擴大し、一部は北の方チルジツトを奪ひ、一部はフリーランドを占領して、次てケーニヒスベルグに迫るの素地となすと共に、他の一軍は、南方國境を踰えてソルダンを経、アイロウの線に進出するに至り、トルン、ダンチツヒ兩要塞間の防禦線を脅かさんとす、此に於てか東普の地、早く已に露軍の蹂躪に委せんとす。

第三節 露軍の蹂躪

コサツクの鐵蹄憂々として東普の地その蹂躪に委せんとす、レネカンブ將軍の軍は、南方ワルシヤウの方面より進出せるヂリンスキー將軍の一軍と聯絡を取り、チルジツト、イレステルブルグ、フリーランド、アイロウ等の外、更にラステンベルグ、アレスタイン、オステロド等の要地を奪ひ、一部はケーニヒスベルグの大要塞を包圍し、獨の第二十軍團は、到る處コサツクの鋭鋒に挫かれ、トルン、クラウデンツの大關門も、已に突破せらるゝに至らんとせり。由來東普の地、露獨の交戦に際し、軍路上敢て重きを爲すに足らず、大局に關する所少しと雖も、トルン、クラウデンツの線にして一び露軍の手に委せんか、ワルシヤウ方面よりする露軍主力の伯林進撃は、側面の脅威を去るを得て、非常の便宜を得可し、之れ獨の最も不利とする所、露軍が數百萬の大軍をワルシヤウに擁して、敢

露兵は最も野戦に長じ、特にコサツクの驍勇は、今も共に異ならざるものあり。

て進撃の態度に出てざるものや、實に之を慮ればなり。時に西方に於ける獨國侵入軍は將に聯合軍主力と對戦せんとするの時にして、獨の戰略が效を奏するや否や、機は繋つて一髪の間にあるなり。兵を西に割かんか、内線作戦の破滅之に兆さんとす、東の方露の蹂躪に委せんか、獨軍巴里に入るに先ちて、伯林は早くも露軍の脚下にあらんとす、カイゼルの焦燥夫れ如何。彼は西方の大本營に在りて、大宰相に親電を發して曰く、「朕の歸東するに至る迄、卿等は全力を盡して露軍を阻止し、朕が最愛なる東普魯西の人民を救ふ可し」と、而も獨の野戰三個軍團は、何等露軍に加ふる能はず、徒らに巧妙なる退却を續行するのみ、レッツエンの要地亦露軍の手に落つるに至り、北方ケーニヒスベルグの要塞のみ、僅に獨逸陸軍の威力を示すに過ぎず。

此の時に當り、獨がその一臂の力と頼める埃軍は、又數次露軍の破る所となり、到底獨逸の危機を救ふに足らず、南北共に捷利を博せる露軍は、今やその中央軍の主力を掲げ、猛然として國境を越え、一舉伯林に迫らんとす、獨逸總司令部即ち止を得ずして大軍を東方に送遣するに決し、アントワープの白國野戰軍に對する一部隊を割き、百六十個の列車に滿載して、東北方面に輸送すると共に、リエトデ攻陥に際し、大威力を發揮せる四十二個の巨砲を携へしめぬ。

四十二個砲彈の破裂せるときは、八町以内の人馬を悉く押し終ると云はる。

之等の援軍と巨砲とは、オステロッドに配置せられ、獨軍漸く優勢を占むると共に、彼等は猛烈として攻勢に出でぬ。九月一日、獨軍は、オステロッド、アレスタインの線に在りて、猛烈なる襲撃を試み、サゾフ將軍の指揮下にある、露の二個軍團に對し、重砲々火の掩護の下に、潮の如くに殺到せり、露軍亦防戦最も努めたるも、四十二個砲の威力は到底抗す可からざるものあり、特にその一彈は、露軍司令部に命中して、主將サゾフ將軍を始め、幕僚たる二將軍を押し終れり。露軍遂に支へず、多大なる損害を被りて退却するの止むなきに至りしが、當時獨の戰報は、露軍の三軍團は全滅し、捕虜七萬を得たりと報じ、勿論多大の誇稱ある可きも、露軍の損害亦決して尠少なざりしは察するに餘りあり、次いで獨軍は、更に前進を繼續して東普魯西アルレ河の線に集中し、露軍漸く總退却に出づるの止なきに至れり。

オステロッドの一戦は、サゾフ軍を粉砕し終りて、南方より東魯に侵入せるチリンスキー軍をして、國境内に退くの止むなきに至らしめぬ、斯くの如くにして獨軍は、ウイレンベルグ、ナイデンベルグ、ゾルダウの線に有力なる部隊を配備し、チリンスキー軍に備ふると共に、一部はマルレ河の線に集中し、九月十三日の頃、ノルデンベルグ、ゴルダツプ、スワルキーの線に達し、チルジツト、ピリカーレン、カルワリー附近の線に據れる

露國の鐵道網はその兵員輸送を極めて敏活ならしむるに反し、露國にありては、殆んど交通機關の作る可きものなし、之れその進退に非常の不便を與へるものなり。

レネカンブ軍を包圍せんと圖れり、此の間露軍の運動が、最も鈍重なるものあるに反し、獨軍の行動は敏速を極むるを以て、レネカンブ麾下の四軍團は、大にその運命を危ぶまれたるも、幸に節度を全うして、國境を越ゆるを得たり、獨軍即ちその左翼をケーニヒスベルグの大要塞及び附近湖沼澤の相錯綜せる地點に委ね、右翼をトルン要塞に延伸して、一面レネカンブ軍に對して攻勢に出づると共に、露軍の主力たるワルンシャウ軍に對し、その右側面を脅威せんとせり。

第四節 レムベルグ陥る

露國已に獨塊を敵として戦ふ、その兩者を討たんとする素よりその所なり、此を以て開戦以來、北の方東普を侵すと共に、南の方塊のガリシヤに大軍を送り、之を蹂躪せんとせり、而して露國がガリシヤを席捲せんとする、獨り之によりて塊領を侵すのみならず、道を茲に藉りて、伯林進撃を容易ならしめんとするもの、その最も重大なる目的たり、露西亞にして、東普方面より進んで伯林に入らんとせば、途上幾多の要塞線を突破せざる可からざるのみならず、河川湖沼多くして大兵を行るに適せざるなり、且つその距離亦頗る大なるものあり、之に反し、ワルンシャウ若くはガリシヤ方面よりシレジアに入らんか、沃野千里、大軍の行進頗る便なるのみならず、距離亦大に短縮するを得可し。此を以て露軍は



レムベルグ、
クラカウ共に
無双の堅要に
して、クラカ
ウはシレジャ
三國國境に近
き所あり。

一面獨軍を東普方面に牽制すると共に、他面大軍をしてガリシヤを衝かしめ、中央主力はワルシヤウの堅塞に據りて進出の機を待てるなりき。

若し露軍にして、周圍の事情に何等の顧慮なく、單に伯林を衝かんとせば、ワルシヤウ軍をしてガリシヤ方面より進出せしむる最も可ならん、彼等の進路を妨ぐるものは一のポ一ゼンのみ、而も斯の如きは無謀の舉、その背後は忽ちにして獨境兩方面より脅威せらるるを免れず、ワルシヤウ軍をシレジャの地に入らしむる、必ず先づ之等の脅威を除かざる可からず、而して之を爲す、ガリシヤよりするを以て最も便なりとするなり。獨境亦素より之を知る、即ち獨軍が西の方英佛聯合軍を破砕するに至る迄、露軍の前進をガリシヤに阻止せざる可からず、而して此の任務は、當然獨境の負擔す可き所にして、内線作戰の成否は繫つて獨境の双肩にあり、獨境即ち先づ開戦の始に當りて大兵をクラカウ、レムベルグの線に集中し、その大要塞と相待つて、露の大軍を防がんとし、露の動員完成せざるを利して、一部隊をして北方國境を越え、露領ポーランドのルブリン、コルムの線を侵し、一部はレムベルグを中心とし、ターノポール方面よりする露軍に備ふ、その配備を見るに、北方軍に將たるものはアウフエンベルグ將軍にして、その麾下四個軍團の兵力を有し、其他ダンクル將軍の三個軍團、ボーム將軍の三個軍團亦此方面の防備に當れり。又そのレムベ

ザリンスキー
軍はルブリ
ンマルムに向
びイワノフ軍
はレムベルグ
に向へり。

ルグ方面に在るものは、ブルデルニン將軍の率ゐる三個軍團、及び騎兵五個師團を以て之に當らんとす。露軍亦之に對し、モスクワ軍管區よりせるヂリンスキー軍の主力と、キエフ軍管區よりせるイワノフ軍とを進め、總數百萬と稱せらる。

斯くの如くにしてイワノフ軍は、八月二十日早くも露境國境を越え、直ちにタノーポールを占領し、二十一日より二十四日迄の間に、その全軍はセルブ河を渡り、行々獨軍を驅逐して三十一日及び九月一日を以てグニラリバ河を渡り終れり、此の地之等の河川相錯雜し、軍の進行には多大の困難を感じ、且つ所在半永久的築城陣地に據れる獨軍のその前進を阻まんとするありて、爲に露軍の苦戦甚だしきものあり、特にカミオレカ、ヘリチの如き、獨軍はその主力を此におき、堅固なる堡壘によりて頑強なる抵抗を試みたるも、露軍は猛烈なる強襲を加へて之を撃破し、死傷二萬を算せしむ。

次いで露軍のレムベルグに迫るや、その守兵は野戰軍と策應して、抵抗最も努め、激戦の後、野戰軍は遂に急遽退却するに至れり、當時露軍の攻撃最も猛烈にして、獨軍は、その退却に當り、幾多の軍需品を遺棄し、大砲二百門、輜重全部及び一萬有餘の將卒は露軍に降る所となり、獨境の殘軍は一時全く戰鬥力を失ふに至れり。露軍は勢に乗じて要塞に迫り、四面を包圍して猛烈なる砲火を集注したるを以て、北境第一の重鎮と誇れるレムベル

此の方面に於て露軍の手に歸したるもの大砲のみを以てするも四百門を超ゆると云ふ。

グの要塞も、三日夜十一時を以て全く露軍の手に落ちぬ。此の地ガリシアの政治的中心にして、又鐵道八線の湊合點なるを以て、その陥落は塊の一大打撃たらずんばならず、之に反し、露軍は重大なる便宜を得、爾後の策戦に利する所甚だ多かりしが、露帝は、此の地方一帯の占領地區をその一州とし、ポプリンスキー伯を之が總督たらしめ、レムベルグの名亦波蘭士の舊名ルゾフと改めらる。

此の役換軍の失ふ所頗る大なるものあり、その第三、第十一、第十二の三個軍團は、殆んど全滅に等しき大損害を受け、軍器、將卒の露軍の手に落つるもの少からず、露の軍容大に振へるものあり、ニコライエフ、ストレー、ラワルスカの各要地相繼いで露軍の手に落ち、露軍は更にその主力を以て西方ブルゼミスルの要塞に向へり、時にデリンスキ一軍の主力亦九月一日を以てルプリン、コルムの線に據れる塊軍を撃攘し、四日クラスエツクを占領し、九日イワノフ軍に合して共にブルゼミスルの包圍に當り、一部騎兵は、カルバーテン山の一角を占め、塊の大軍將にカルバーテン山中に壓せられんとし、クラカウ亦全く聯絡を絶たれて、孤立の状態にあり。斯くの如くにして露國は、ガリシヤの半部を席捲したるも、クラカウの要塞にしてその生命を保たんか、シレジア侵入は未だ望む可からず。吾人は茲に筆端を改めて西方佛獨の對抗について見んか。

第四章 白佛國境戰

獨逸が一蹴して過ぐ可しとせるリエーヂ要塞は、意外にも頑強無比、その大軍をして此に十餘日を費さざるを得ざらしめ、急遽佛國境を衝かんとしたる獨軍の作戦は、大に齟齬を來さざる可からざるに至り、之を恢復せんが爲に、獨逸は最も迅速なる行進を以て佛境に臨めり、時に東普の地早くも露軍の侵入するあり、ガリシヤ亦その蹂躪に委して、塊軍は殆んど風前の塵の如く、到る處露軍の撃攘し終る所となれり、獨逸が佛國に對する戰況にして意の如くなるを得ざらんか、大事茲に去らんとするなり、獨軍即ち連日連夜の急進にも屈せず、更に勇氣を鼓舞して聯合軍を粉砕せんとし、白佛國境一帯を擧げて、腥風血雨に充つ。

第一節 獨軍の急進

リエーヂ要塞に十餘日を阻められ、作戰に大齟齬を致したる獨軍も、よく白國野戰軍をしてアントワープの一角に蟄息せしめ、行々幾多の都市を劫掠しつゝ、占領地の守備は之を後續せる豫備軍團に譲り、常備軍の精銳二十五軍團は、急馳電奔、驀然として佛國境に臨むなりき、當時獨軍の編制は、之を知悉す可からずと雖も、之を七軍に分てるが如く、

獨逸は今腹背敵を受け、東んせか聯合軍は如何、西せんか露軍を如何、カイセルの苦心や蓋し思ふ可きなり

最も信ず可き情報は、その配備を報じて左の如くに語れり。

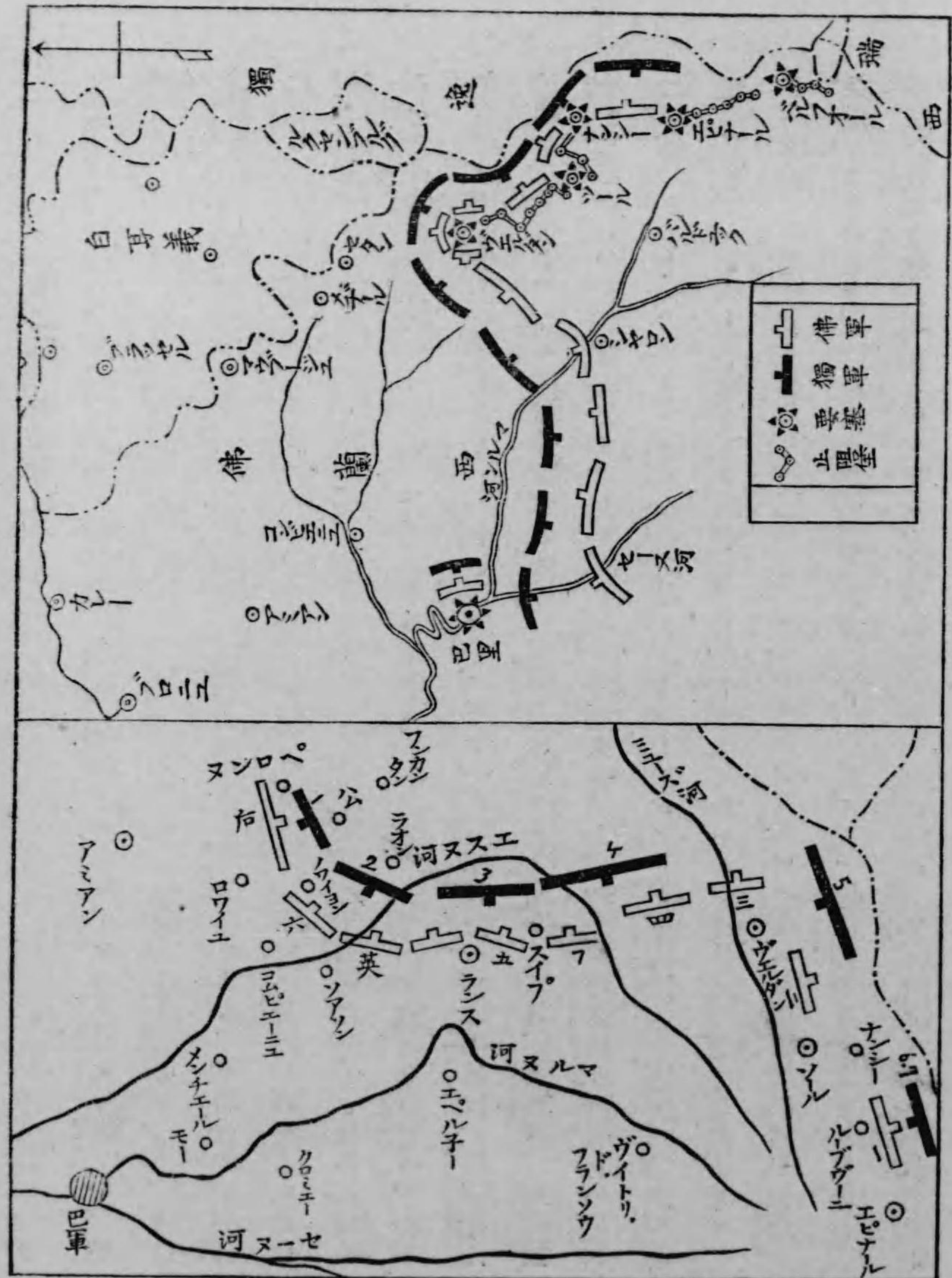
- 第一軍(最右翼) 司令官 クルツク將軍
- 第二軍 同 ビュロー將軍
- 第三軍 同 ハウゼン將軍
- 第四軍 同 アルプレヒト將軍
- 第五軍 同 獨逸皇太子
- 第六軍 同 バイエレン皇太子
- 第七軍(最左翼) 同 ヘーリンゲル將軍

以上の上の七軍中、第一以下第五軍迄は佛白國境に向ひ、第六、第七の二軍は、ナンシー方面にありて佛の第一軍と對峙せり、その戦線は、最右翼は佛の第一線リユ方面よりモンシャルロー・デーナンの南方よりヴェルタンの北方を經、遠くルネヴェエの方面にまで達し、ヴェルタン北方を中心とし、聯合軍の兩翼を壓せんとするの形にあり、聯合軍の最左翼モン附近の英軍及びシャルロア附近の佛白軍は、八月二十四日以来、獨第一軍の猛撃を受け、惡戦苦闘の後多大の損害を受けて、ヴァラレシヤヌ、モーブーヂユ等の第一線に退却せざるを得ざるに至れり。

獨軍が果して幾日の進撃に堪ふ可きかは當時各國軍事の間に多大の興味を以て迎へられたる問題なりき。

斯くして國境を突破し終れる獨軍は、佛軍をして第一線の防禦陣地に據るの止むなきに至らしめしが彼等は急進一步を假さず、爲に佛軍をして此に守勢を執るを得せしめず、更に潰亂の止むなきに至らしめり。此の次獨軍の追撃急なりしは、史上嘗て例を見ざる所に於て、只ナポレオン一世が、伯林南方より二十日に亘る追撃を敢てし、普軍をダンテツヒ、トルンの線に壓して降服を餘儀なくせしめたるもの、たゞその例とすべきのみ、而も當時の兵勢も今日と、大に異なるものあり、三十五軍團の大兵を掲げて此の急追撃に成功せるもの、實に獨軍の強猛を證するものたり。彼等は實に連續二週日、晝夜兼行の勢ひを以て追撃し來れるなり。

獨軍は急追又急追、一舉にして佛軍を國防第一線に壓迫せしが、彼等は尙その追撃を止めずして、更に猛襲を聯合軍に加へ、之を粉砕して一舉巴里に迫らんとせり、即ち八月二十五日以後、その右翼の精銳は、ブラツセルスより巴里に向ふ一直線上の要地に主力を集出し、巴里を攻撃するの擬勢を示せり、クルツク軍は、二十六日モーブーヂユ方面に運動を起して英軍を撃破し、ビュロー軍及びハウゼン軍は、ナミエール西南地區に在りし佛白聯合軍約八個軍團を撃破し、逃ぐるを追うてモーブーヂユ東方地域に迫り、第四、第五の兩軍亦その左方に聯繫して運動を開始せり、次いで二十八日、獨軍は尙その追撃を續行



佛軍の退却は
豫定の退却と
認めらる。

し、クルック軍は、佛國地方軍三師團と聯合せる英軍をサンカンタンの北方に包圍し、捕虜數千、重野砲八中隊を鹵獲し、ビエロー軍及びハウセン軍は、ヒルソン附近に進出せり、アルブレヒト軍亦廣正面を以て、メヂール東南よりマース河を過ぎ、獨太子軍は、ヴェルダン方面より進出せる佛軍を撃破しつゝ、ヴェルダンの東方に向ひ、宛がも破竹の威あらしむ。聯合軍亦連日の退却に困憊せるも、士氣毫も衰へず、アミアン、ラフェールの第二線より、メヂールの南方地區に止まりて、此に獨の追撃を阻止せんとす、然れども、連捷の勢ひに乗じたる獨軍は、何物をも推かずしては止まざるの概あり、猛襲亦猛襲、佛軍をして遂に防ぐ能はざらしめ、三十日佛の全線は、總退却の止むなきに至り、左翼は巴里の北方オアーズ河左岸よりソアン南方、ランスの北方を經、アルゴンヌ森林の北方陣地及びヴェルダンの方面に據り、エヌヌ河を前にして漸く對敵の姿勢を取らんとす。

斯くの如くにして獨軍の急追は着々偉功を奏し、聯合軍は今や全くその壓迫する所たらんとし、四十年前の巴里籠城を繰返さんとするやを疑はしむるものあり、佛國政府即ち政府をポルドーに移し、ガリエコ將軍は巴里防禦軍總督に任ぜられ、防禦線内居住の市民に對しては、九月四日を以て、即時家屋を破壊するの準備を爲して退去すべきの命を發し、若干の城門は交通を遮斷し、花の都として知られたる巴里は全く大要塞と化し終れり。

第二節 獨軍阻む

ボー將軍は、
斐院將軍とし
て最も傑出した
名あり。

聯合軍今やその最左翼を巴里の要塞に托し、右翼はヴェルダンの大險要を包んで、蛇
蜒長蛇の陣を張り、以て獨軍を迎へんとす、而して之れ果して豫定の退却なりしか、或は
時利あらずして止むなく退却に出でたりしか、之を知るに由なしと雖も、その退却の巧妙
にして、這個大軍をして比較的輕微の損傷を以てして堅固なる陣地に着かしめたるものや
誠に感嘆に値す可し、況んや之によりて、敵をして大迂回運動を餘儀なくせしむるものあ
るをや、時に八月三十日なりき。獨軍亦連續十餘日の急追に著るしく疲勞を來せり、のみ
ならず隊伍亦整頓を要するものありしを以て、三十一日及び九月一日の兩日は、兩軍殆ん
ど戦ひを交へず、交々部隊の整理と疲勞の回復とに費せり。斯くて二日、獨軍は、更に猛
然として立ち、その右翼をオアーズ河の北方ロワイエ、リベクルの間に進出せしめ、第
二軍は、オアーズ、エヌヌ兩河の中間なるクーシールシアトーを占領し、第三、第四、第
五の三軍は、メヂール南方より進みて、リテールよりアルゴンヌ森林の北方を占領せり、
その騎兵の一部亦遠く進んで、巴里の北方十七里なるカムビエーニユに現はれ、形勢頗る
危険なるものあり、概軍の馬蹄再び巴里城外に印せんかと思はしめき。之より先聯合軍
の左翼數次危険に瀕するや、ナンシー方面の守備に當れる獨將軍ボーはその一部隊を提げ

て之に加はり、改めて中央軍及び左翼軍に司令官たるの任に就き、佛軍の士氣爲に大に振
ふものありき。

九月三日、獨軍は突如としてその方向を轉じ、第一軍は、カムビエーニユより巴里の東
北に向ひ、ナンチエール北方に進出すると同時に、第二軍亦その左翼に聯繫してエヌヌ河
を渡り、ソアンソンより疾驅してシャトー、チエリー、シャチロン、スル、マルタの地點に
達し、佛軍を擊攘して捕虜一萬二千、大砲二百六十門を鹵獲し、第三、第四の兩軍は、ラ
ンスの東南方に現はれ、スウベ、ヴィエシユール、トラウスを占領し、第五軍はアルゴン
ヌ森林の西側より進出し、佛の中堅たる第三、第四の兩軍を突破せんとせり、蓋し獨軍の
目的たる、巴里の攻陥にあらずして、之が擬勢を示して佛軍の勢力を茲に集中せしむると
共に、その中央を突破して、佛軍を兩斷し粉砕せんと期せるものならんか。

獨軍已に聯合軍の中央を突破せんことを期す、彼等はその勢力を佛の中央軍に集中した
り、即ち四日を以て獨軍右翼の一部隊は、巴里の東方約十里のモーに向ひ、他の優勢なる
部隊は、更に東南に進みてラフェルト、スー、ジュアールに向ひ、五日右翼は更に進みて
クローミエーの東方地區を占領し、第二軍はマルヌ河を過ぎてモンミライユよりシャロン
の西方に至る他區を占領し、第三、第四軍はシャロンの東南方地區を、第五軍はアルゴン

巴里の攻陥に
は多大の損害
と多くの時日
とを要す、東
に露の大敵を
有する獨軍は
決して此の迂
策を取らざる
可きなり。

佛軍は内地に
退却せるも、
その國境要塞
は依然として
守を失はず。

ス森林の南方地區を占領せり、聯合軍即ち敢て之に抗せず、専らその衝突を避けつゝ、ツ
ールナン、エステネー、スザンヌ、フェールシヤムペノアズ、ヴァイトリールフランソアの
南方地區に退却せり、此の退却は最も巧妙に行はれ、獨軍は遂に中堅突破の目的を達し能
はざりしのみならず、却つて深く南方に誘はれたるの結果となり、白軍の左翼をして危険
に瀕せしむるに至れり。

之より先東普の形勢頗る憂慮すべきもあり、獨逸は、八個軍團の大兵を西方佛國侵入
軍より割かざる可からざるに至り、その勢力に缺陷を認めざるを得ざりき、即ちアントワ
ーン監守軍より一軍團、モーブーヂエ包圍軍及びツール、エピナール間に在る第六、第七
軍より若干部隊を割き、以てその缺を補ふと共に、第五軍の方面に大兵を集中して、飽く
迄中堅突破の目的を達せんとせり、而もヴェルダンとシヤロンの間には、アルゴンヌ森林
の在るありて、一兵の通過をも許さずと稱せられ、加ふるに地形亦河川沼澤に富み、大兵
を行るに適せず、佛の第二、第三軍亦力を極めて防戦するあり、且つ深く佛地に入るに從
ひ、佛の増援漸く容易なるに反して、獨軍は輻重に送兵に、漸く困難ならんとするありて、
五日以後に於ける形勢は、主客轉倒の觀あらしめ、英軍の左右翼亦ナンシー方面よりせる
精兵の増援により、勢力漸く優大に、機を見て逆撃を加へんとすも此に於てか獨軍漸く阻

まんとするあり、聯合軍總帥ジョツフル將軍は、此の機に乗じて計を定め、猛然として攻
勢に出でぬ。

第三節 聯合軍の反噬

獨逸は軍資、
糧食二つなが
ら缺乏の恐あ
るなり。

吾人が繰返し説けるが如く、獨軍が佛軍を粉砕する最も速きを要し、若し之が爲に時日
を要すること多きか、或は遂に之を粉砕して後顧の患を絶つ能はずんば、東の方露に專
らなるを得ずして、腹背敵を受くるの苦境に至らざる可からざるのみならず、戦役をして
長きに亘らしめ、四圍皆敵なるの獨逸は、全國を擧げて慘憺たる運命に遭遇せざる可から
ず、此を以て獨帝は、激勵最も努め、佛軍を敗るの一日も早からんことを命ぜり、獨軍即
ち九月五日夕刻を以て運動を起し、聯合軍中堅突破に成功せんとし、第三、第四、第五の
各軍は、相連繫してマルヌ河谷に沿ひ、スザレヌ、フェール、シヤムペノアズ、ヴァイトリ
ールフランソアに在る佛第三、第四兩軍の主力を襲はんとし、その右翼第一軍亦之に策應
せんとして東方に向つて運動を起せり、聯合軍左翼に位置せる第五軍が之に隣れる英軍及
び第六軍は、機逸す可からずとなして、直ちに攻勢に出で、巴里防禦部隊たる五個師團亦
之に聯合し、獨軍の左翼に殺到せり、當時の戦線は、ナンチエール、モー、スザレヌ、ヴ
イトリールフランソアより、東方遙にセダンに亘り、延長實に百三十哩に上れり。

當時獨軍の總司令部は何れにありしか不明なるも、獨帝自ら戦線に立てるの報ありたり。

此の戦ひや、獨軍にありては、中堅突破を全うして、阻まんとする兵勢を恢復し、その活路を開くと共に、聯合軍を粉砕せんとするにあり、一方聯合軍にありては、過去十餘日の失敗を此の一舉に回復し、獨軍を潰亂せしめんとするにあり、相互に危機一髪の感あるを以て、兩軍の意氣自から凄壯を極む、六日聯合軍の左翼は、先づ獨の右翼たるクルツク軍を衝かんとし、巴里より進出して、クロシエー、ラフェルテ、スール、ジュアルに在りしその主力を撃つ、クルツク軍敵せずして東北方面に退却せり。之を端緒として、聯合軍は到る處に獨軍を撃破し、よく曩日の失敗を回復するを得たり。

當時聯合軍の總司令部はグイトリールフランスアの南方約二十哩を隔つるシヤチロンに在り、獨の攻撃第三、第四軍に對して最も猛烈なるものなるを見るや、之と連繋せる第六軍及び英國軍、フオツク枝隊をしてスザレヌ以西の右岸及びマルヌより猛烈なる攻勢に轉ぜしめ、敵をして遠くマルヌ以北の地に走らしめんとせり。八日フオツク枝隊は、フェール、シヤムベノアズに於て、三軍團より成る優勢の獨軍に攻撃せられたるも、よく之を防ぎ、佛の第六軍は、モー東北方ウルク右岸にて獨軍の攻撃を受けたるも、力戦して之を退け、九日之を潰亂せしめて軍旗二流を鹵獲するの大捷を博し、英軍亦マルヌを越えて之を迫撃せり、其他グイトリールフランスア附近の戦闘は最も猛烈なるものあり、佛軍は、

獨右翼軍の損害大なるは、佛左翼を輕視せる爲めにし、特に此の際に巴里守備隊も戦闘に加はり爲にその兵力頗る優勢なりき。

意氣衝天の概を以て猛烈果敢なる攻撃を續行し、獨軍をして北方シヤロンの線に退かしめ、十日に至りては、獨の右翼は全くマルヌ河以北に退却するを見たり、聯合軍は更に急迫を續け、シヤトーチエリーよりシヤチロンの線に達して、獨軍をグイレー、コットレー及びソアソンの間に窘窮せしむ、十一日更にカムピエニユの線に出で、獨軍を迫撃し、獨軍は狼狽して遁れ、多量の彈藥、軍需品及び死傷者を戰場に遺棄せるのみならず、軍旗一流亦聯合軍の得る所となれり、斯くて百三十餘哩に亘れず戰線は、凡て佛軍の勝利に歸し、獨軍は全線退却の止むなきに至りしが、就中その右翼の損害最も甚だしく、開戦以來猛威を逞しらせる獨皇太子軍亦佛第三軍の頑強なる抵抗に遭ひて多大の損害を被り、アルゴンヌ森林西方地區に退却せざる可からざるに至れり。佛人此の役ルマルヌの役なる名を附し、此の一勝ジョツフル將軍の名聲をして一層高さを致さしめぬ。

始め白國侵入軍の佛境に殺倒せんとするや、カイゼルは之に告げて曰く、「帝國の運命は此の一戦に決す可き、汝等一身を犠牲として力のあらん限り呼吸の續かん限り國家の爲めに奮闘せよ」と、彼等は此の一語に激勵せられ、殆んど無謀に近き十餘日の急迫撃を敢てし、聯合軍をヴェルタン以南の線に壓迫し、更に中堅突破を策して、皇帝の希望に副はんとせしが、時利あらず、聯合軍の反噬に會して遂て大敗を取るの止むなきに到れり、而し

エヌヌの戦闘
はマルヌ戦の
戦果を完うす
るもの、佛人
は多大の期待
を此の戦闘に
かけたなり。

てその主因としては、東普に八軍團を割きたる、實に獨の作戰に破綻を來さしめたるものにして、其他無謀なる連日の追撃により、過度に兵士を疲勞せしめたる、後方聯絡の不十分なる等、相待つて之を然らしめたるものならずんばならず、然れどもその退却や、又頗る巧妙なるものありて、流石に用兵の妙を思はしめき。

第四節 エヌヌの激戦

由來獨逸は、自ら世界無双の精兵を以て任じ、佛軍の如きその勢力到底彼に若かざるを思へり、況んや英兵をや、驕る者必ず破るゝは古兵法の金言、今次の敗の如き亦之に因するものなからざらんや、彼は茲に猛省一番、最も慎重なる計畫の下に、佛軍撃破の目的を達せんとせり、即ち九月十三日アミアンに在りし獨軍の一隊は、同地を去りて東方に移ると共に、第一、第二、第三の各軍亦漸く退きてソアソン、ランスの線に據れり、然れども第四、第五の兩軍は、依然シャロン及び其の東方地區に止まり、激戦を交へつゝあり、蓋し獨軍は、ヴェルダン北方の陣地を固守し、之を樞軸として西方一部の撤退を企て、最も安全なる陣地につきて、各方面よりの援軍及び補充兵の到着を待ち、捲土重來、再び猛烈なる攻撃に出でんとせるなりき。之に對する聯合軍の作戰や如何、彼等は、ヴェルダンよりコンピエニユに亘る線に於て敵と接觸を保ち、エヌヌ河を渡りて退却しつゝある獨軍を

攻撃せんとせり、此に再び壯烈なる激戦は續行せられ、爾後塹壕戦に入る迄殆んど寧日なかりき。

マルヌの激戦は遂に佛軍の勝利に歸し、獨の中堅突破の目的は阻止せられたりと雖も、佛亦獨の主力に大打撃を加ふるを得ず、遂に決戦の性質を帯ぶるに至らざりしも、佛軍が試みたる追撃は頗る猛烈なるものあり、爲に部分的激戦を見たるもの少からず、當時佛國公報の示す所によれば、九月十八日に至る迄大局の變化は見ることもなかりしも、部分的の戦闘は各所に行はれ、就中獨軍がシャロン附近に於て試みたる抵抗は最も激しきものありて、彼等が此に築ける塹壕の如き、深さ一米突に餘り、二十米突毎に障壁を築造して彈丸を防ぐに便し、其他各所に地窖を穿ちて、軍需品の貯藏に充て、而してその背後には、更に堅固なる防禦工事を施して多數の榴彈砲を隠蔽し、且つその塹壕には、附近の家屋を破壊して得たる器材を用ひて之を蔽ひ、之に土壤を蔽へるを語れり。獨軍は又、英佛軍に對して數次夜襲を企て、或は猛烈なる逆襲を試み、一舉に陣地の恢復を圖らんとせる等、その意氣最も盛なるものあるを見るに足る。

英國官設通信局は、又此の戦闘に關し、九月二十三日その経過を發表して左の如くに云へり。

急遽退却する
に當り、斯く
の如き餘裕あ
りしは寧ろ驚
くに堪へたる
ものあり。

此の間獨の死傷は五萬、行方不明者亦一萬五千と註せらる。

過去數日間の戦闘は、兩軍共に殆んど砲撃のみを以て終始し、英軍は徐々前進陣地を占領すると同時に、敵軍をして退却を餘儀なくせしめたるが、敵は時々逆襲を行ひ、爲に血雨の慘狀を呈しつゝあり、英軍も、容易ならざる損害を被りたれども、獨軍の損害に至りては、更に之より甚だしきものある可し、佛軍も亦其の左右兩翼に於て次第にその地歩を占めたり、一村落の如きは、聯合軍一び之を占領し、後獨軍に奪取せられ、更に再び我が軍の手中に奪還せり、彼我共に奮闘最も努め、交戦真に慘澹を極めて死屍街上に丘を爲せり、敵の捕虜となれるもの多くは、後備役に屬するものにして、之れ獨軍が兵員の補充に窮し、餘儀なく老兵を召集して出征せしむるの已むなきに至れるを表示するものならむ、敵の塹壕は、蒼鬱たる森林の背面に沿うて築かれ、その結構巧妙にして、巧みに外部よりの看破を避け、且つ到る處に鐵條網、鹿柴の類を以て細心なる防備を施せり、敵の小銃及び機關銃は、大にその威力を發揮したるも、我軍の重砲及び榴弾砲は、その着弾距離極めて廣汎にして、遂に前方なる溪谷に布ける敵の全軍を掃蕩したる。

斯くの如くにして兩軍各々稍鞏固なる陣地を占領せり、爲に戦闘は漸く陣地戦の性質を帯び來りて、壯烈なる野戦亦見るを得ざるに至り、此の間九月二十日、聯合軍は、約五軍團に達する大兵を以て、コンピエニエニエニエ西北方の敵に對し包圍運動を起せるも、獨軍亦之に備ふる所あり、遂に目的を達せずして止みぬ。

第五節 エヌヌ戦後の状況

エヌヌ戦は、斯くの如くにして終り、佛人が多大の望を屬したる獨軍の粉塵は遂に之を見るを得ずして、敗餘の獨軍は尙悠々として陣地を構成するの餘裕を存したり、由來此の地方は、野戦には稀に見るの好陣地にして、天與の地勢に些少の人工を加ふれば、優に堅固なる陣地を構成するを得可く、獨軍即ち此の地に據りて捲土重來大に策せんとするに似たり、而して當時獨軍の配備は左の如くなりき。

- 一、獨の第一軍はコムピエーニエ、ソアソン間に在りて、エヌヌ河の北岸に於て聯合軍と對峙す。
- 二、獨の第二軍はソアソン、ランスの間にあり、エヌヌ河の北岸に於て堅固の陣地を築きつゝあり。
- 三、獨の第三、第四の兩軍は、ペーン、スートワンとアルゴンヌ森林間に在りて陣地を占む。
- 四、獨の第五軍は、アルゴンヌ森林南方地區ツリオクトールを退き、ヴェルダンとアルゴ

獨軍はアルサ
ス方面の兵を
割きて此の方
面に増援した
る爲、聯合軍
の目的は阻止
せられたるな
り。

ンヌ森林の中間に陣地を構成しつゝあり。

五、獨軍の最左翼たるアルサス、ローレン方面にありては、ザールブルグ上部アスベレの東方及びヴォージュ山地のドーン、ラオン等の地に陣地を布けり。

此の時に當り、戰場附近は連日豪雨ありて、泥濘脛を没し、兩軍共に非常の困難を嘗めつゝ、尙激戦を繼續し、特に従來佛軍の壓迫を被ること最も多かりシクルツク軍は、巧妙なる佛軍の旋回運動の爲め、危地に陥ること少からず、隣軍たるビュロー軍亦之を救はんとして危地に陥りしが、漸くにして之を脱するを得たり、爾來兩軍は、エヌヌ河を狭んで相對峙し、遂に冬季に入りて尙戰機の發展を見ず、恰も日露戰役に於ける沙河の滯陣の感あらしむ。佛國側の報道は、「エヌヌ河の戰闘は未だ決戦を見るに至らず、兩軍堅固なる陣地に據りて對峙し居る爲、殆んど要塞戰の觀あり」と云ひ、約半歲の間數米突の塹壕奪取を繰返しつゝ、徒らに戰機の發展を待つのみなりき。

遮莫、曠日彌久は獨軍の忍ぶ能はざる所、彼等はその兵力に増援を受くると共に、一舉逆襲に轉じて、再び佛軍を突破せんことを思はせて止まず、而して此の當時に於ける獨の兵數は、漸く増加して三十三個軍團以上に達せるも、聯合軍亦補充増援を怠らずして、常に兩者相若くの狀態にあり、獨軍が再三計畫せる逆襲も、遂にその効を奏せず、一進一退、

塹壕奪取戰を繰返すに過ぎず。而も之れ聯合軍の望む所なると同時に、獨軍の最も忘む所なるを知らざる可からず、東普侵入の露軍は、一度獨軍の擊退する所となりたるも、機を見て再び進攻に出でんとし、ガリシヤ方面亦露の蹂躪に委せざる可からずして、クラカウにして陥落せんか、ワルシヤウに在りて、虎視眈々たるその主力軍は、潮の如くシレジャに入らんとするなり、獨帝たるもの、豈焦燥せざるを得んや、彼はエヌヌ戰の陣地戰に變せんとするを見るや、出征諸軍を督勵するところあり、即ち三段の作戰となりて現はれ來れり。

獨軍の作戰果して如何、聯合軍右翼作戰の樞軸たるヴェルダンの包圍運動その一なり、兩軍對峙戰の中央彎曲の起點に在るラツシニーの突破その二なり、聯合軍最左翼アラー附近の攻勢運動その三なり、而もその一だも成功せざりき。此の間獨軍側面の脅威たるアントワープの白國野戰軍は、機を見て突出を試み、獨軍は爲に一部の兵力を割くを餘儀なくせられ、兵力鈍盡の際にありて、苦痛とする所少からず、加ふるに聯合軍はその左翼を延伸し、之と連繫を取らんとするもの、如くなりしを以て、獨軍は、九月末以來此の大要塞の攻略に従事するに至れり、而も白軍よく戰ひ、敢て屈するなかりしが、獨の誇とせる四十二瓏巨砲の威力は、遂に之を陥落せしめ終んぬ。

此の時に當り
獨軍の最も望
む所は兵力の
餘裕なりき。

第六節 アントワープの攻陥

第三、第九兩軍團は恐らくは豫備軍團ならん、佛境方面に於ける獨軍増援として派遣の途中にありしなり。

白國が據つて以て獨軍を阻まんとせるリエーヂ、ナミエールの堅塞も、遂に獨軍の奪ふ所となり、聯合軍との聯絡を絶たれたる白國野戰軍は、その最後の復廓たるアントワープに據るを餘儀なくせられ、優勢なる獨軍は、之が監視に任じつゝありしが、九月初旬、遂に聯合軍に策應せんとし、ルーザン、マリッ、ブラッセルスの三角地帯に在りし獨軍を攻撃せり、獨軍即ちその包圍部隊たる豫備國民兵に加ふるに、時にブラッセルスに到着しありし海兵一萬五千を以て之に向ひ、偶々南下の途にありし第三、第九兩軍團亦之を救けて、白軍遂に撃退せられ終れり。

獨軍北ぐるを追うて要塞に迫り、附近の白軍悉く要塞内に封ぜらるゝに至る、獨軍即ち包圍を嚴にし、警戒最も努むる所ありしも、白軍亦數次詭計を以て之を苦しめ、獨軍の困憊云ふ可からざるものありし、然り而して此の要塞の儼存は、獨軍不斷の脅威たるのみならず、全く英白の聯絡を断たんとせば、必ずやアントワープをその手裡に握り、白耳義の占領を確實にするの要あり、此の時に當り、佛國侵入軍は、中堅突破に失敗して却つて退却を餘儀なくせられ、エヌヌ河畔に之と對峙するあり、佛軍は盛んにその左翼に増援して獨の右翼を脅かすと共に、一部は白耳義に入りて、茲に確實なる根據地を得んとするもの

り如し、斯くして再びアントワープ軍と聯絡を取るが如き事あらんか、獨軍の危険云ふ可からざるものあらんとす、即ち獨軍は、断然アントワープを攻略せんとし、九月二十九日以來、その豫後備三軍團の兵力を以て要塞の攻撃を開始せり。

九月三十日夜獨軍は、要塞の全面に猛烈なる砲火を集注すると共に、その歩兵は全線突撃に移り、ワープル、サン、カテリーヌの堡壘に迫り、時に夜黒うして風寒く、行進頗る困難なるものあり、城兵亦善く戦ひ、獨兵遂に多大の損害を被りて退却するの止むなきに至りしも、彼我の砲戦は夜を徹せり、此に於てか勇敢なる獨砲兵隊の一部は、白晝砲火に暴露して要塞直下に肉薄するの大膽を敢てし、遂に全く殲滅せらるゝに至りしも、全線に於ける砲撃は益々猛烈を極め、要塞南正面の外堡二、支點堡壘一及び中間堡若干は遂に逸軍の奪ふ所となれり。獨軍大に勢ひを得、更にリール、コニングンヨイツク、ワープル、サンカテリーヌ、ワールヘムの諸堡壘に對し、猛撃を加へ、次いで勇敢なる歩歩の突撃を試みたるも、悉く大損害を受けて撃退せらる。其他南方に向へる獨軍は、數次ネットの強行渡過を試みたるも、之れ亦遂に目的を達せず、三日午後の如き、彼等はヴェルダン附近の架橋に成功し、今や將に密集縱隊を以て通過せんとせり、機を待てる白軍、その橋上に群れるを見て、一齊に砲門を開き、橋も人も共に粉碎し終れり。

白晝敵の砲火に暴露して突進するが如きは寧ろ狂なり。

アントワープの陥落は此の四十二砲にあらざりて、英國より送れる重砲なりとも傳ふ。

斯くの如くにして獨軍は最も猛烈果敢なる攻撃を續行せしも、城塞の堅と白兵の勇とはよく之を防ぎ、四日より六日に亘る砲撃を以てして、東南に位置する前面警戒線を奪取せるに過ぎず、更に第二防禦線の攻撃に力を盡しつゝありしが、白國政府は、防禦軍の活動を自由ならしめんが爲、政府機關をオステンドに移せり。

七日午前七時三十分、白旗を携へたる獨の一將校はアントワープ市に入り、同九時三十分より獨軍はアントワープ市を攻撃すべきを告げぬ、かの恐る可き四十二砲、リエーヂ要塞を破壊せし、その巨弾は、何等の防備をも有せざる市街に落下し、恐る可き破壊力を市民の眼前に實檢せしむるなりき、加ふるにツエツペリン飛行船は、その巨大なる姿を空中に現はし、其他輕快なる飛行機群亦去來して、爆弾を雨降せしむ、その危険、その慘狀到底筆舌の盡す所にあらざるなり。嗚呼、獨軍の前に人道なし、彼等は白國の各都市に對し、凡ゆる亂暴を働きて尙未だ足れりとせず、今や此の武裝なき平和の市街に對し、近世科學の粹を盡したる武器を試み、市民を塵殺せんとするなり。間斷なき巨弾の唸り、大地を劈く異様の響き、四邊は濛々たる砲煙と砂塵に包まれ、凡そ戰爭の書き出す一切悲惨の光景は、今茲に現出せられたるなり、此の間にありて、一死殉國の赤誠を盡さんとせる白軍は、從容としてその一彈づゝを蠻敵に送り。

白國の名譽は永く史上に赫灼たらん。

吾より毫も挑むところなきに拘はらず、其の兵力の強大に誇れる我が隣人は、自己の保障し、而も調印せる條約を放棄し、濫りに我が祖先の地を其の馬蹄に蹂躪せんとす、隣人は吾人が自己の名譽を傷けらるゝを肯んぜざるの故を以て、恣に我を攻撃せんとす、世界は吾人の正義ある態度に驚嘆すべし、勇敢なる軍人よ、吾人の脅威せらる可き國境に向つて勇戦奮戦せよ、汝等の勝利は疑ひなし、正義の爲に戦ふものなればなり。嗚呼、之れ白耳義國王アルバートが、獨逸の狂暴なる要求を斥け、兵力によりてその中立を守らんと決心するに當りて、その軍人に示せる所にあらずや。然り、噫然り、渺たる小國を以てして、その國家の名譽の爲に、敢て強敵に抗せんとす、世界はその正義ある態度に驚嘆し、不幸なる白國に同情して措かざるなり。然れども蠻賊獨逸は、正義も人道も凡て眼中にあらず、その野望を逞しうせんが爲に、今や憐れなるアントワープ市を焦土たしらめんとせり、勇敢なる白軍の抵抗も、徒らに獨軍の攻撃を猛烈ならしむるのみ、最後の運命は彼等の上に降れり。ツエツペリン飛行船より投下する爆弾は、一時に十名二十名の市民を仆すのみならず、急霰の如き彈丸は、石灰、油槽に落ちて火を發せしめ、火災は市街の到る處に起りて、五十哩の遠きよりその火光を望み得たりと云ふ。斯くて恐る可く悲しむ可く將た悼む可き日は、一日二日と過ぎ、九日朝に至りては、白兵遂に守る可から

ざるを知り、自ら堡壘、砲臺を破壊するあり、煙硝濛々として中空を鎖し、天日爲に光を失して皆既蝕の如くなりしと。而も獨軍尙その攻撃を緩めず、砲彈暗を貫いて炸裂する間にありて、残れる白軍八千は、英國軍と共に、ガン及びオステンドの方面に退却せり、此の時英兵の一旅團は、サンジレスより汽車に搭し、無事オステンドに達するを得たるも、ローケレンに向へる二千名は、その北方に於て退路を遮断せられ、止むなく和蘭に通れて此に武装を解けりと。斯くしてアントワープは遂に獨軍の手に落ちたるなり。

第五章 露獨戦況

西方白佛國境に於ける獨軍と聯合軍との戦況は、前章之を述ぶるが如くにして、獨軍の計畫は凡て阻止せられ、宜しくエヌム河畔の陣地に在りて、塹壕奪取戦を繰返すのみ、兩軍その何れか、更に大に増援を得るにあらざれば、到底戦機の發展を望む可からざるものあり。然も之れやがて聯合軍の戦略にして、聯合軍は斯くの如くにして獨の大兵をその前面に糊着せしめ、その間露の大軍がシレジアに進出し、伯林に向ふを容易ならしめんとするなり、獨亦之を知ると雖も、這般の形勢之を如何ともす可からず、徒らにカイゼルをして焦躁せしむるに止まる。然り而して東方に於ける露獨の戦況や如何。

一九一五年の春季には、多數の英兵更に戦線に立つ可し。

第一節 露軍益々振ふ

カイゼルは以て自軍が西聯合軍を破り東向するに至る迄露軍を支ふ可しと思惟せりし地利軍の、意外に羸弱にして、露兵の一撃早くも之を潰散せしめ、ガリシヤの要地多くその手に歸するあり、一面東普に進出せる露軍亦勢ひ頗る猛にして、トルン、ダンチツヒの線危からんとするに當り、急遽西方の軍を割いて東普に進め、漸く露軍を撃退したりと雖も、ガリシヤ方面に於ける露軍は、勢ひ益々旺盛にして、ブルゼミズル、クラカウの要塞亦危からんとし、露軍のシレジア進出は、或は近きにあらんとす。獨何ぞ之に備へざるを得んや。

吾人が先に説けるが如く、露のイワノフ軍は、九月三日を以て早くもレムベルグの要塞を屠り、爾來盛んに四方を経略せり、即ち埃軍の戦はその中央レムベルグの線に於て露軍の突破する所となり、ガリシヤ軍は二分せられ終れり、此に於てか露軍は、敵を追尾しつゝ、トゥロピン、フランポールに突進し、同時に南東方面より敵の右翼に迫りて、トマシヨウ附近の埃軍を三面より挾撃し、之を潰亂せしめ、更にクラスニツク附近に於ても、埃軍左翼部隊を包圍し終れり。埃軍即ち決死の勇を振ひ、一方の活路を開かんとして、レムベルグ方面に向つて逆襲を試みたるも、優勢なる露軍の逆襲に會して却つて潰敗の止な

ブルゼミズルが重圍に落ちたることは先に之を説きたり。

きに至り、その全軍はサン河を背にして三面より合撃せられ、殆んど死地に陥りて大々的損害を受け殆んど戦闘力を失はしめらるゝに至る。此の戦實に前後十日間、連續果敢の攻撃によりて、始め歩兵四十個師團、騎兵十一個師團、外に獨立若干師團を加へ、總員約百萬、砲二千門を算せりし埃軍は、死傷二十五萬、捕虜十萬を出だし、砲四百門及び多量の軍需品亦露軍の手に委するに至れり。

爾來露軍は、益々その急追の歩を進め、ヤロスラウの要塞亦十二日午後四時を以て陥落し終り、ヤロスラウ要塞は、最新の築造に成るものにして、複橋頭堡を爲せり、故を以て、露軍亦之が攻陥は決して容易ならざる可きを思へりしが、事實は最も容易に攻陥せしむるを得たり、其他ブルガミズル附近に在る埃軍は、第二、第十二、第十四軍團の外、更に一軍團を有するに過ぎざれば、之れ將た多くの抵抗を爲し得可からず、従つて露軍の攻撃は、着々として進捗し、獨埃軍は勢ひ日に窮まりて、ズロホビツ、ブルゼミスルメルノウ、クラカウ等を経、漸次露獨國境に壓迫せらるゝに至る。斯くてブルゼウオルスク、ランキユット亦露軍の占領する所となり、ヤロスラウ、クラカウの鐵道聯絡は絶たれ、ヤロスラウに於ては、歩兵第十五聯隊、義勇兵二個聯隊及び砲二十門凡て露軍の鹵獲する所となれり、次いで露軍は、スタレメスト、スタラソールを占領し、敗殘の埃軍は、潰亂し

て退却するの止むなきに至りぬ。二十三日ドプロミルチーロフ亦露軍の手に落ち、ブルゼミズルは全く孤立して露の大兵團の包圍する所となれり。

第二節 獨帝東向す

ガリシヤに於ける埃軍は、斯くの如くにして大打撃を受け、全く中斷せられ終りて、その左翼はカルバーテン山脈に、右翼はクラカウ要塞にその餘命を托し、又進撃に出づるの勇なからんとす、加ふるにその一部カルバーテン山脈を越えたるものは、オンダ、ウングの兩河谷より進入せる露軍の追撃を受け、遠く洪牙利方面に退却し、露軍は更にナジヤギの首地に進出して埃軍の一部をシクルラス附近に撃退せり、一方ブルゼミズル包圍に従事せる露軍は、間斷なく重砲火を送りて、埃の來援軍を撃退すると共に、その外堡の一個を確實に占領し終る、此の間埃軍は、伊太利國境に配備せる軍隊並にトリエストの守備兵をクラカウに送り、その備を堅うすると共に、此に最後の一戦を期せるものゝ如し。

此の時に當り、先に優勢なる獨軍の爲に包圍せられんとし、辛くも免れて國境内に入りし露のレネカンブ軍は、九月末日來大に軍容を改め來りて、再び猛烈なる攻勢に出でんとせり、即ち九月二十七日、飛行機を飛ばして、ニーマン河の線に展開せる獨軍の主力が、今やウエルジポリ、マリアンポール、コブノの線に在りて、梯隊を爲せるを偵知するや、

マリアンボール、アウグストは共に露軍を追撃して之を占領せるなり。

捲土重來の意氣最も鋭く、鐵蹄砂を捲いて殺倒し、北ぐるを追うてマリアンボール、アウグストの地を復し、獨軍をして多大の損害を受けしめ、多數の捕虜及び軍需品を鹵獲したり。十月三日獨軍は、漸くその國境の陣地に停止するを得たるが、當時二百五十人の中隊中僅に二十人を殘せるに過ぎざるものありしを見るも、此の戦闘が如何に激戦にして、露軍の追撃が如何に猛烈なりしものありしかを知るに足らん。

爾來獨軍は、國境の線にありて、ケーニヒスベルグより援兵を得、露軍を撃退せんと計りつゝありしが、露軍頗る優勢にして、獨軍はたゞ之が阻止に全力を注がんとするのみ、ヴェルジボロウ、バカルヂエオ附近に於てのみ、僅に攻勢に出づるを得たり、斯くて十月六日、獨軍はコウノ西方ウラヂスラヴオフ附近よりスワルキ西南ニツチャカに亘るの線にありしが、七日朝露軍は、獨軍の兩翼を包圍し、猛烈なる攻勢に出でぬ、獨軍その後方の掩護により、戦闘を避けんと試みたるも、露軍は突撃に次ぐに突撃を以てし、數次敵の陣地を奪取して猛烈なる追撃を續行し、リツク、ビアラを占領して東普の地再びその蹂躪に委せんとするの概ありき。

之より先、埃軍のガリシヤに大敗するや、その武力の到底露軍に敵す可からざること明かなるに至り、加ふるに東普方面亦漸く急ならんとするを見るや、獨帝大に憂ふるところ

ガリシヤ軍は已に露の大打撃を受けたるを以て、此の中多くの缺陷を生ぜるものと見る可きなり。

あり、西方白佛方面の少しく緩なるに乗じて、大議をブンスラウに進め、自ら露國に當らんとし、先づ埃帝に説いて、その軍隊指揮權を獨の手に收め、ヒンデンブルグ將軍をして露軍の司令官に任じ、少壯參謀官レツツ少將を抽んで、之が參謀長たらしめ、ジーベルト大將は東普軍の司令官に任ぜられぬ。時に獨埃軍の露に對するもの、獨の常備約九個師團、豫備十四個師團、其他約四個師團、後備第四、第九、第十八軍團にして、之に埃のガリシヤ軍を加へ、總數約七十八個師團と算せらる。之に對する露軍の兵力は、精確に之を知るを得ずと雖も、その百個師團に近きものあるは疑ふ可からず。

獨帝已に大議を東方に進め、大に諸軍を督して露の大軍に當らしめんとす、露帝亦大議をワルシヤウに進め、その第一線たるオソウエツ附近に進出して、軍旅を熾らふ、此に於てか兩軍の士氣大に揚り、正に決戦を見んとするかの概あり。二十九日露の西方國境ウキスツラ河左岸の地區に於て、ラスクブルジュスクの正面二百露里に亘り、獨の旅團及び師團より成る六縱列の前進を見、露軍の前衛及び騎兵の威力法案によれば、此の前進は最も眞面目なる計畫になれるもの、如く、又キールス正面に於ても、獨の大部隊がサンドミル、ワルシヤウ方面に進出せんとし、諸兵種より成れる大兵團は、ペトロコフ、ネエエフ、シエルフオフ附近に屯在し、機を見て立たんとするもの、如く、而して獨の大集團は二個

獨軍の運動を
開始せるは十
月十二日頃
なりき。
ソスウキツ
ツは露獨國境
附近にあり。

に分れ、その一はガリシヤ方面よりワルシヤウに向はんとし、他の部隊は埃軍と聯絡して南方地區に策動せんとするものに似たり。

第三節 ウイスツラ河岸の大戦

露獨兩帝共に戰地に臨み、世界最大の陸軍國は、今やその精銳を提げて輪贏を決せんとす、時に獨埃はその大軍を部署して四軍に分ち、第一軍は大將リッデルブルヒの指揮下にありて、ソスウキツツ、キエルス街道に沿うてイワソゴロツドに向ひ、第二軍はチエルストホフ、ペトロコフ街道よりワルシヨウに迫らんとし、第三軍はガリシヤ方面よりワルシヤウ街道に進み、第四軍はトルン、ノウオーゲルギエフスク街道を前進しつゝありき。次いでその前衛部隊は早くも露軍の斥候隊と衝突し、茲にウイスツラ左岸地區に於ける一戦の序幕は切りて落されぬ。獨の新銳は、到る處優勢にして、露の大軍も爲に退却を餘儀なくせられ、ウイスツラ河岸に至りて停止したるが、當時獨軍の前進は、最も快速なるものあり、數日ならずして波蘭土の殆んど全部はその掌中に歸するに至り、獨逸公報は、「我軍はワルシヤウを除くの外波蘭土の全土を占領せり」と報じ、獨逸國民をして欣喜に堪へざるものあらしめき。該公報は又曰く、南波蘭土に於て獨軍の前衛はワルシヤウの南方僅に三十哩のグルエツ附近に於てウイスツラ河に達せり、獨軍は、第二西伯利亞軍團の

兵二千を俘虜とせり」と、斯くてし獨軍は、決河の勢ひを以て露軍に迫り、ガリシヤ方面にありては、ブルゼミズルの攻圍を解ける露軍をシエニヤワレザイスク、サン河に壓迫し、ワルシヤウ以南の地區にありては、ウイスツク、サン河の線に達したり。

敵を深く手許に引付け、回復す可からざる損害を與へんとするは、露軍の常套手段なり。

然り而して露軍の退却は、要するに豫定の退却にして、獨埃の總兵力二百萬に對し、二百六十萬の多數を擁せる露軍が、敢て頑強なる抵抗に出でず、敵の進撃に任じて、累次の退却を爲せるものや、實に之によりて敵を死地に誘ひ、然して後捲土重來、一舉之を殲滅せしめんとせるものにして、戰略上自己に有利なるの地に達するや、猛然として逆襲に轉じぬ。十月十五日以後、獨埃軍の主力は、イワソゴロツド、サンドミールの間にありて、露軍の中堅を突破せんとし、猛烈なる砲撃を加ふると共に、その一部は、十七日を以てウイスツラの強行渡河を企て、同時に露軍の左翼を包圍せんと試みたるも、既に豫定の地區に退却を全うせる露軍は、之に猛烈なる逆撃を加へ、獨埃軍は、各方面共に非常の大損害を以て撃退せられ、ウイスツラの水は血河と變じ、河谷悉く獨埃軍の死屍を以て埋めらるるの慘狀を呈せり。一面ワルシヤウ西方正面に於ける主力の衝突にありても、獨埃軍不利にして、露軍は常に優勢を占め、ガリシヤ方面に於ける埃軍の攻撃亦大損害を被りて撃退せられ、反つて猛烈なる急追撃を受くるに至りぬ。

露軍總司令官
ニコライウイ
ツチ太公は此
の戦捷の満足
に堪へず、遂
に西方佛總師
ジョツフル將
軍に吉報を傳
へたり。

露軍已に獨軍の銳鋒を挫くや、その大兵團は猛烈なる運動を起して、十月二十一日に至りては、ピリツア河北方地區に於けるワルシヤウに通ずる諸道路上又獨軍の一兵をも止めざるに至り、獨軍は全線總退却を開始せり、而も露軍の追撃頗る急にして、獨軍は、豫じめ築造せる陣地に止まる能はず、國境内に遁避せざるを得ざるに至れり。ピリツア河以南にありては、ウイスツラ左岸サンドミールに到る間にありて、獨軍は最も頑強なる抵抗を試み、漸くその位置を保ちつゝありしが、二十日露軍は、地形の不利と重砲の猛火を冒して、猛烈なる襲撃を試み、獨軍遂に支へずして、敗退の止むなきに至れり、其地各方面の戦況凡て露軍に有利にして、獨塊兩軍は共に多大の損傷を被り、ワルシヤウ進撃は全く失敗に終りぬ。

カイゼル自ら東部戦地に臨みて、督勵最も努めたるにも拘はらず、そのワルシヤウ進撃は、斯くして失敗に終りたるのみならず、露軍の猛烈なる追撃に會して、大損害を被むるに至り、露軍は、イワンゴロツド、クラカウの中間なるキエルスに於て、二萬の捕虜と、四十餘門との大砲を鹵獲し、東普國境附近に於ても、更にゴルダツプを占領して、獨領に侵入すること約十哩に及び、十一月十一日、スタルツベン、グルグリヤンケン及びソルダウ方面に於ける激戦亦露軍の捷利に歸して、ヨハネスブルグはその手中に落ちぬ、一方

トルンは獨の
大要塞ある地
にして、國境
の防備上最も
主要の地區た
り。

ガリシヤ方面に於ても、着々として埃軍を壓迫し、ブルゼミズル要塞は、再び露軍の包圍する所となり、東普に於けるレネンカムプ軍の活動亦著るしきものありて、ソルダウ南方に於ては、トルンへの通路なるストリピンを占領するに至り、露軍のシレジア侵入將に近きにあらんとするを思はしめき。

露軍の勝利は爾く赫々たるものありしと雖も、獨軍亦決して輕んず可からず、今次その退却に當りて、素より敗退なりしを免れずと雖も、而も亦決して潰亂の悲運に陥りたるにあらず、彼等は正々堂々隊伍を全うして退却の途に就けるは疑ふ可からずして、特にその退却に際し、露國の追撃を阻まんが爲に、鐵道及び道路に對して根本的破壊を試み、停車場及び建造物は、之を爆發若くは燒燬し、揚水タンク、轉轍器の如きは、殆んど痕跡を止めざる迄に破壊せるのみならず、軌條の如きも、連接部毎に之を爆破せしめありて、露軍にして新に軌條を處設するにあらざれば、到底之が修復の途なからしめき。其他電柱の如きも、その道路に在ると鐵道線路にあるとを問はず、悉く之を切倒し、碍子は粉碎し、線條の如き亦各柱間に於て切斷せられたりと云ふ、以て彼等が秩序あり餘裕ある退却を遂げたるを見る可きと共に、その用意の周到なるに驚嘆せずんばあらず。而して爲に露軍の追撃をして非常の困難に陥らしめ、長蛇を逸せしめ終り。

第四節 獨軍の再舉

トルンは獨軍が東普に於ける策源地となせる所なり。

獨軍退却に際し行へる道路、鐵道乃至電信の破壊は、露軍をして著るしくその追撃に困難を感ぜしめたるのみならず、爾後の行動に就ても、多大の不便を感ずるや必せり、況んや此の一事獨軍が潰敗して退却せるものに非るを示して餘りあるをや、露軍たるものその追撃に當りて細心の用意を拂ふの要ありしなり。而も露軍は、勝に乘じて急進又急進、四百五十哩の全戦線を擧げて、悉く獨塊軍に肉薄するの觀を呈せり、蓋し一舉國境を越えて敵地を蹂躙せんとせるものならんも、爲に軍の一部は、トルンの大要塞を側面に受くるの位地に立ち、獨軍をして乗す可きの間隙を得しむるに至れり。

果然獨軍は猛然として立てり、始め獨軍のワルシヤウ進撃に失敗して國境内に退却するや、此に隊伍を整頓して英氣を養ふと共に、その多數の鐵道網を利用して、急速に軍隊を北方に集中し、露軍の右翼に對して優勢を占むると共に、一面西部戰場より招致せる騎兵と、多數の埃國騎兵をして、獨軍の新天地に於ける集中を援護せしめつゝあり、斯くて機漸く熟するや、十一月中旬約六個師團の兵力を有する獨軍及び騎兵の大集團は、ウイスツラ、ワルテ兩河間の地區に殺到し、疾風枯葉を捲くの勢ひを以て、早くもワルシヤウ南方四十哩の點に侵入し、此にび再大激戦の開始を見るに至れり。

獨帝は必ず此の一戦を以て露軍と雌雄を決す可きを命じたりと傳へらる。

今次獨軍の侵入せるウイスツラ、ワルテ兩河間の地區は、此の地方に於て最も用兵に適するの地たり、即ち沃野廣く開けて、比較的大兵を行るに宜しく、湖沼水流の行軍を阻むもの少きを以て、ワルシヤウ進撃の不利なるを見るや、獨軍は先づ此の方面の軍を退かしめ、此に露軍を誘出して、一大鐵槌を加へんことを期したりしなり、而して今や機を見て再びワルシヤウに向ふや、例によりて急馳電奔、猪突猛進を續けつゝありしが、その一部隊はロツヅに於て露軍と遭遇し、チエンストホフ、クラカウの正面亦激戦の開始を見るに至る。時に獨軍に將たるもの、猛將ヒンデルブルグにして、行く／＼露軍を突破して、早く已に一百哩を前進し、ロウイツよりスピエルニーウイスに亘る地區をその手に收め、ワルシヤウを去る二十哩の近きに達せり。

獨逸が多大の期待を以て決行せるワルシヤウ第二次進撃は、斯くして着々進捗を見るに至れるも、露軍亦何ぞ容易にその目的を爲さしむるものならんや、例によりて例の如く、敵をして十分進撃せしめたる後、巨拳はその頭上下れり。獨軍の一部隊がワルシヤウより指呼の間に現はれ来るや、泰然として機を待ちつゝありし新銳の大部隊は、一令の下に運動を起し、右翼方面の豫備隊の協力を相待つて、獨軍を包圍し、甚大なる打撃を加ふるに至れり、當時露國大本營は、飽く迄沈着なる態度を取り、誇大の捷報に眩惑せらるゝ勿ら

キツチナー元
師は英國陸軍
大臣なり。

んことを要求しつゝありしが、信ず可き情報によれば、十一月二十日より二十四日に亘る間に於て、露軍は空前の大捷を博し、四十萬の獨軍は四分五裂して潰亂せるのみならず、露軍は之等潰裂せる獨軍の背後に出づるを得たるを以て、獨軍の損害は頗る巨大なるものありたりと報ぜられ、沈着にして冷靜なるキツチナー元帥が、露軍の大捷に驚喜して祝電を寄せたりと云へば、その勝利の程度大なるものありしは窺ふに足る。其他獨捕虜の談なりとして傳へらるゝ所によるも、獨軍の損害は甚大にして、大隊の多くはその將校を失ひ中隊人員は六十人乃至八十人に減少したりと云ふ。

露軍は獨り侵入獨軍に大打撃を加へたるのみならず、ガリシヤ南半の攻略亦成功して、ブルゼミズルは完全にその包圍する所となり、クカカウ方面にも大壓迫を加へ、騎兵の集團は、カルバシアン山脈を横斷して、洪牙利のウングに達せるの報ありき、而して露軍の洪牙利侵入は、ガリシヤ地方に在る埃軍將士の心膽を寒からしめ、彼等をして故國の急に赴かんとするの念を抱かしむるや必せり、これやがて獨埃聯合軍の分裂にして、爾後の作戰上露軍の利する所蓋し鮮少ならざる可し、況んや、先に埃軍の指揮權を獨逸司令官に委任せるより以來、獨埃軍隊間の反目最も甚だしきものありて存し、埃軍は常に獨軍を怨めるものあるをや。

ロツツはアル
シチリよりベ
トココフに逼
ずる復讐鐵道
の致命を刺す
の地點にして
露軍はシレシ
ア侵入の據點
として之を固
守しつゝあり
たり。

ウイストラ、ワルテ兩河間の地區に猛進せる獨軍は、斯の如くにして大損害を被り、已に全滅の悲運に陥らんとするに至るや、ブレスラウの大本營に在りしカイセルは、豫て西方戰場より招致し、トルン及びカリツシユ、シーラツ等の地に集結しありし五個軍團、及び騎兵五個師團に命じて、急に赴き援けしむ、即ち十二月三四日に亘り、激戦はロツツ、ロウイツ及びベトロコフの線に開始せられ、特にロツツは、兩軍爭奪の目標たるを以て、激戦最も甚だしく、白兵戦は到る處に行はれたりき。斯くて獨軍は、十五哩の戦線に亘りて、露軍を突破せんとし、銃槍突撃を試みることに頗る繁に、一聯隊中僅に百人を剩すに過ぎざるの悪戦に屈せず、遂に一部を突破するを得るや、機を見て猛然露軍の中堅に殺到せんとせり。

之より先露軍は、飛行機其他の偵察機關によりて獨の大兵團カリツシユ方面に集結を了り、ロツツの急を援はんとして出動しつゝあるを知るや、自ら又東普正面に在るレネカンブ軍を招致し、之に常らんとし、その急派を電命する所あり、而も獨軍の交通機關備はれに反し、露軍は多く徒步行軍に依らざる可からずして、その未だ到着せざるに先ち、兵力に比して戦線の長きに失し、特にロツツ方面の突角に頗る危険を感ずるに至りたるを以て、十二月五日、止むなく之を撃退するに至れり。十二月六日の伯林公報は、ロツツの占

此頃外電は頗々としてレネカンプ將軍の革職を傳へしが眞偽未だ明かならず、若し眞なりとせば、ロツツ救援不能の責にふるものと云ふを妨げず。

領に關し、露軍は多大の死傷を出して退却中なりと報せるも、露國公報並に他の信用すべき情報によれば、露軍の撤退は五日夜半にして、伯林公報の云ふが如く六日午後にあらず又撤退に當り何等戰鬪を交へざりしは明かなり。

斯くの如くにしてロツツは遂に獨軍の手に歸し、主將ヒンデンベルグは、その部下を靱して、ロウイツ、ロツツ、ペトロコフ正面より進撃を繼續し、その中堅はチエンストコフ附近に鞏固なる陣地を構築して、多數の重砲を備へ、一面持久的戰勢に應ずるの策を取ると共に、一面露軍の左右兩翼を包圍せんことを企て、此にムラワ地方の戰鬪となり、將たクラカウ南方に於ける獨軍の頑強なる抵抗となりしが、中部方面なるペトロコフ方面にありては、戰勢頗る揚らず、即ち十二月八日ウイスツラ左岸の獨軍は、イラウ、チエンストコフ、ブローの線に亘り、日没を待ちて猛烈なる夜襲を試みたるも、常に露軍の探照燈下に照らされ、猛烈なる銃砲火を被りて、多大の死傷を出だすに止まり、一も成功するものなく、遂に月明に至りて中止するの止むなきに至れり。クラカウ南方の戰勢亦逐日猛烈となり來り、獨軍は、露軍の戰線を突破せんことを企つること二回に及びたるも、常に多大の損害を受けて撃退せられ、反つて大砲四門、捕虜四千人を失ひ、其他イラウ、ロウイツ間に於ても、數次決戦たる攻撃を試みたるも、常に露軍の頑強なる抵抗に會して撃退

せられ終れり。露軍亦一意クラカウの陥落に努めたるも、遂に成功を得るに至らずして止み、東方面戰局は北より南にその中心を移すに至りぬ。

第五節 戰局中心の移動

開戦以來已に五閱月、而も西方白佛國境方面は地陣戦に入りて恰も要塞戦の如き觀を呈し、戰局の進展見るに足るなく東方露獨境方面亦一勝一敗、遂に大なる發展を見るを得ず、而して獨の國情は、爾く曠日彌久を許さざるものあらんこと、カイセルの焦躁殆んど言語を絶せんとす、その巧妙なる用兵法は、鐵道網と相待つて、東奔西走、よく戰局の急に應ずると雖も、補充の兵員早く盡きんとし、危機目睫に迫らんとす、カイガル即ち先づワルシャウを陥れて以て露をしてシレビアを伺ふ能はざらしめ、精兵を西方戰場に集中して聯合軍を屠らんことを期せり。此に於てか對露軍指揮官に命令して、如何なる犠牲を拂ふもワルシャウを攻略すべきを命じ、西方戰傷より多數の兵員を移送し、國境近く迫れる露軍を反撃すると共に、ロウイツ、ロツツ、ペトロコフの線に退かしめ、更にロツツを奪ひ、急にワルシャウに迫らんとせり。

十二月六日獨軍は、ワルシャウ西方三十哩のソハチエフに迫りて、此に壯烈慘絶なる白兵戦となり、露軍はワルシャウより、獨軍はロツツより交て援兵を派するに至りて、戰線

獨軍已に補充兵員に盡きんとせるは、東方戰場に活潑なるときは西方衰へ、西方盛んなれば、東方徐かなるに見て知るを得可し。

ワルシヤウ頑
守は、露軍傳
來の作戰にし
て、獨軍已に
三回まで此に
苦き經驗を嘗
めたり。

漸く擴張して、ウイストラ左岸、ブツツ左岸、ロウイツ間の戦闘最も激甚を極め、一時は殆んど混戦状態に陥りたるも、獨軍遂にロウイツを占領し、ワルシヤウを距る二十五哩の地に達したり、時に十二月十八日、同時に獨軍の大部隊は、ブツツ河を渡過せんとし、非常の努力を繼續せるも、露軍亦善く戦ひ、遂に撃退し終れり、ムラフ方面亦之に策應して北方よりワルシヤウを脅威せんとしたるも、之れ亦露軍の破る所となして、ラステンブルグ、ナイデンブルグの線に退却を餘儀なくせられ、東普方面よりする獨軍の側面運動は全く不可能なるに至れり。此の時に當り、露軍亦ロツツ、ロウイツの要地を失へるのみならず、ガリシヤに於ける新作戰に應ずるが爲、戦線を短縮するの必要に迫られ、十二月二十日頃より全線退却を開始したるを以て、露獨兩軍の形勢は、ワルシヤウ西方二十五哩のウイストラ左岸よりオボチノ、トマシヨウ東方地區、ニイダ河に沿ひ、ガリシヤサン河に亘る線に於て對峙するに至れり。而して獨軍は、終始活潑なる攻勢を取ると雖も、數百哩に互れる戦線中、一も露軍を突破する能はず、徒らに撃退せらるゝのみ、然れども、獨軍亦頑としてその攻勢を捨てず、特にワルシヤウ附近の如きは、攻撃頗る猛烈にして、晝夜間斷なく激戦を交へつゝありしが、露軍亦之に應じ、最も頑強なる抵抗を試み、三十萬の守兵は、死を以て之を支へんとし、獨軍の精悍も遂に加ふる能はざるなり。

當時露軍は全
力をクラカウ
の攻略に注ぎ
つゝありき。

ガリシヤに於ける新作戰とは何ぞや、獨塊軍のガリシヤ恢復運動に對する作戰之なり。東普方面並に波蘭士方面に於ける露軍の戦勢は、聯合諸國及び友國の豫想に反して大に發展せざるのみならず、反つて獨軍に一籌を輸するの状あること前章説く所の如し、然るにガリシヤ方面に於ては、露軍は初よりその優勢を維持し、ブルゼミズルは全くその包圍の下にあり、クラカウ亦露軍の重圍に落ちんとして、形勢頗る切迫せるものあり、又露軍騎兵の一部は、早くもカアバシアン山脈に進出し、その隘路を占守して、一鞭直ちに洪牙利に入らんとす、此に於てか、獨塊共に危懼を禁ぜざるなり、クラカウにして露軍の手に落ちんか、その大軍は一舉してシレジアに侵入し、獨の工業的策源地はコザツクの鐵蹄に蹂躪せられざる可からず、之れ實に獨軍の最も恐るゝ所たり、一面露軍の洪牙利侵入は、獨軍をして祖國の急を思はしむる、亦必然の勢ひたらずんばあらざるなり。獨軍已に祖國の急を思ふや切なり、退いて之が安全を守らんとする、素よりその所ならずんばならず、況んや獨塊連盟して露軍に當ると雖も、獨軍狼に已れに厚うして、獨軍を見ること傭兵の如く、常に之をして危険の地に立たしめ、獨軍爲に數十萬の生靈を犠牲に供せるにも拘はらず、ガリシヤの急に對しては、獨軍最も冷淡なるものあり、一意自國の安全をのみ計らんとするに於てをや。獨塊兩軍を疎隔せる溝渠は愈々深く、獨軍は、徒ら

ブルゼミズル
は十一月以來
再び露軍の嚴
重なる包圍の
下にあり。

カイゼルが粗上の肉となりて、彼の爲に、無縁河邊の鬼たらんよりは、寧ろ一死以て祖國の急を救はんことを思つて止まず、加ふるに、連日の敗戦は、士氣の沮喪を來たすこと甚だしく、出征軍に對する國民の不平亦益々旺んならんとするあり、此に彼等は、掉尾の活躍を試みて、沮喪せる士氣を恢復すると共に、内は國民の不平を抑へ、外は敵をして祖國の地を窺ふを得ざらしめんとし、波蘭士方面の兵をガリシヤに集結して、露軍の左側背を衝き、ガリシヤの恢復を希圖せんとせり。

斯くて埃軍は、塞爾比亞方面に配置せる部隊中より、更に數軍團をガリシヤ方面に向はしめ、カルパシアン山脈の隘路より突進せしむると同時に、獨軍亦之に策動せんとし、波蘭士方面特にチエルストコフ、クラカウ間の守備を薄うし、その若干部隊を抜きてガリシヤに向はしめ、クラカウ、ブルゼミズル間の南方地區より露軍の左側を衝かんとせり、時に埃軍の總兵力は二十萬と稱せられ、決死の勇を揮ひて露軍を突破せんとし、此に猛烈なる戦闘は開始せられ、ブルゼミズル要塞の守備兵亦此の野戦軍に合せんとして、數回西北方に向ひて脱出を該みたるも、常に露軍監視兵の頑強なる反撃に遭ひて目的を達するを得ざりき。

之より先き獨軍の急擧グルシヤウに迫るや、露軍はその急に應ずるが爲、ガリシヤ方面

の兵力を割きたるを以て、今や獨埃の此の新作戦に對し、少しく危険を感じざるを得ざりき、即ちクラカウの圍を解いて、その兵力を移して之に當らしむると共に、別に波蘭士方面より大兵團を招致し、十二月下旬以來ガリシヤは再び兩軍の激戦地となりて、露埃獨の大軍氷雪裡に奮闘を續けたるが、結果は露軍の捷利に歸し、埃軍が最後の勇を揮ひたるガリシヤ恢復運動も、遂に全く效なくして止みぬ。

第六節 ワルシヤウ正面の激戦

獨軍如何に勇なりと雖も、深く露西亞の地に入り、その死命を制するは素より不可能事に屬す、而も露軍をして自國を窺はざらしめんが爲には、常に多大の兵力を備へざる可からざるのみならず、露軍にしてその大兵をワルシヤウに擁せんか、東方國境は常に之が脅威せらるゝを免れざるなり、即ちカイゼルは、必ず之を得て、以て露軍の作戦に阻碍を生ぜしめ、比較的寡兵を以てその侵入を防ぐと共に、よつて剩せる所を移して西方國境に用ゐんことを期せり、此の故に數次命を對露軍司令官に下して、ワルシヤウの攻略を急ぐと雖も、露軍亦此の要地を守ること頗る嚴に、獨軍は數次その附近に迫ると雖も、常に露軍の撃攘するところとなり、多大の損傷を受けて退却するを例とせり、而もカイゼルは飽迄もその企圖を捨てず、ロツツの占領後多數の重砲を此に集め、又ムラフ附近の地に騎

大奈翁にして
尙露西亞を屈
する能はず、
遂に自ら憊憊
たる敗戦に終
りたりき。

二哩半に七個師團を配置するが如きは、古今の戦史に類例なき密集隊形なり。

兵の大集中を行ひ、機に乗じてワルシャウ進撃を試みんとす。此に於てか、此の方面にありては、猛烈なる戦闘間断なく行はれ、ウイスマラ左岸の地區に於て、獨軍は、四十八時間内に四回の逆襲を試み、多大の犠牲を生じたりと云ふに見るも、如何に頑強に陣地を維持せんとするかを知るに足る可し。

斯くして兩軍は、互に最も頑強なる態度を以て陣地の維持に努めつゝありしが、漸くにして動員全部を完了したりし露軍は、陸續として新鋭を戦場に送り、東普より波蘭土を経てガリシヤに至る一帯、その優勢なる兵力を以て獨軍を壓迫するに至れり、獨軍即ち一舉して頽勢を挽回せんとし、驍將ヒンデンブルグ指揮の下に、三びワルシャウ進撃を開始せり、時に一月下旬、寒威正に酷なるの頃なりき。

此の次獨軍のワルシャウに向ふや、その歩兵七個師團は、百個中隊の砲兵に掩護せられて、僅に二哩半の正面を以てする密集部隊をなし、ワルシャウ西方に驀進し、ウイスマラプツラ兩河の流域を挟んで猛烈なる突撃を試みんとせり、此に於てか露軍亦その一部隊をしてプツラを渡河せしめ、ソカゼフの對岸なる獨軍の一陣地を奪取し、此に獨軍を激撃せんとして、ボルチモフ、グミン、ポリモフの線に於て猛烈なる大戦闘は開始せらるゝに至れり。

露軍は此の獨軍の行動を評して無謀の突撃と云へり、實際その無謀なる、寧ろ驚くに堪へたるものあり。

獨軍七百の砲煙は、一齋にその砲門を開きて、猛火を急注せり、爲に露軍の塹壕、堡壘は、刻々に破壊せられ、露軍漸く逡巡の色あるや、機逸す可からずとなし、驚く可き獨軍の大密集部隊は、露軍の砲火に暴露しつゝ、喊聲天地を轟かして、轟然肉薄し來れり。敵砲火に暴露せる密集部隊の突進、噫何ぞ壯烈なる、一彈落つる所、數十の獨兵は屍塵と共に粉塵せらるゝなり、當時露軍の精報は傳へて曰く、「敵の集團は、猛烈なる霰彈若くは速射砲の砲火の下に算を亂して斃れ、之に續く歩兵の一隊は、味方の死屍を踏み越えつゝ、突撃し來る、之等の所屬部隊は決死師團の名を博せりと云ふ」と。而も露軍亦勇戦して、激戦凡そ七晝夜に亘り、慘憺たる白兵戦は到る處に演ぜられしが、獨軍遂に利あらずして退却するに至れり、時に二月六日なりし。此の役獨軍の損害頗る多大なるものありしは、容易に想像し得可き所にして、巴里の公報は、獨軍の損害四萬以上を報ぜり、之れ將た多少の誇張を免れざる可きも、少くも獨軍の死傷二萬以上に達せるは明かなり。

第七節 東普の激戦

之より先獨軍の波蘭土に於ける活動は、着々として有利に進捗し、ウイスマラ左岸の地區に於て、ロツツ、ロウイツの要地已にその手に歸し、一意ワルシャウ進撃を企てつゝありしが、同河下流にありては、露軍大に優勢にして、獨軍常にその壓迫を受け、連日退却

交通機關の不備、之れ實に露軍の最も不利とする所に於て、露軍が猛烈敵地を席捲し能はざる實に之に因するなり。

を餘儀なくせられ、露軍之を追撃して、トルン方面に壓迫するに至れり、一方東普方面にありても、露軍大に優勢にして、アンデラツプ河及びマウエル湖の線より東部國境に對して攻勢を取り、ヨハネスブルグその手に落つるに至り、更にチルジツトの北方よりピルカレン、グムピンネンに亘りて戦闘を繼續し、メメルよりチルジツトに到る間の鐵道をその手に收め、チルジツト、インステルベルグの線を壓迫するに至れり、時に一月中旬、當時露軍の戦勢は、最も有利なるものありて、全線に亘りて獨逸軍を壓迫するの地であり、獨逸軍即ち頽勢を挽回せんとしてワルシャウ正面に決死的攻勢を取りしが、遂に露軍の撃退する所となるや、一轉して東普方面に向ひ、此に再び壯烈なる激戦を見るに至れり。

二月四五日頃、ワルシャウ方面の戦勢意の如くなるを得ざるや、獨逸軍はその方針を一轉して、東普方面に侵入せる露軍を撃攘せんとし、五日早くも運動を開始すると共に、カイゼルは大露を東普魯西に進め、ワルシャウ方面に在りし一部隊並に西方國境より招致せる五軍團を東普魯西に加へ、十數軍團の大兵を以て露軍陣地に殺到せり、露軍高等司令部は早くも獨逸軍の企圖を偵知したるも、交通機關の不備は、急遽大軍を増援する能はず、止むなく東普魯西に退却を命ずるに至れり、當時露軍の公報は曰く、「我軍は、東普魯西前面に於て十分なる鐵道線を有せず、必要なる急速度を以て兵力を集中するの不可能なるを思ひ、我

軍司令部は東普魯西内より第十軍を撤し、國境線及びニーメン河並にホーグル河に向はしむるに決したり」と、而も急速活潑なる獨逸軍の運動は、露軍をして安全に退却するを得ざらしめ、その一部は獨逸軍の包圍に落ちて、慘憺たる運命に遭遇するの止むなきに至らしめき。

二月七日、獨逸軍は、北はニーメン河より、南西リツク、ムラワ方面の全線に亘り、總攻撃を開始し、雪霞の如き大軍は東普魯西の露軍の上に殺到せり、露軍到底その抗す可からざるを知りて、漸次國境方面に退却しつゝありしが、獨逸軍之を急追し、露第十軍の右翼は、非常に優勢なる獨逸軍の壓迫する所となり、獨逸軍の迂回運動の爲に、將に包圍せられんとするに至るや、急に方向を轉換し、コブノ方面に退却せんとせり、而も活潑なる獨逸軍の運動は、早くも敵を包圍し、露の各軍團は、何れも非常の窮境に陥れるのみならず、特にその退路は、到る所積雪深くして運動の自由を缺き、道路亦破壊せるもの少からずして、自動車は、運轉、鐵道列車の運行共に遲滞し、退却開始以來九日間は、斯る状況の下にありて、非常の困難に遭遇しつゝ、歩々敵の追撃に對する抗戦を餘儀なくせられ、殆んど困憊の極に達せり、特に第二十九師團長ブルダーコフ中將の率ゐる第二十軍團の一部は、惡戦苦闘最も甚だしきものあり、軍は、ゴルダツプ、スワルキー間に在りて、常に數軍團の大敵に攻撃

各國公報も情報も、悉く自己に有利なる如く誇張せらるゝを以て、容易に信を措く可からず。

せられ、四面應酬に違なく、兵士はその彈丸の全部を發射し盡せりと云ふ。然れども遂によく圍を破り、アウガストフの森林地帯に入るを得、第十軍は、辛うじて戦闘より脱し、所定の位地に就くを得たり。

斯くの如くにして露軍は、ニーメン及びビナレウ河に沿ふ防備堅固の要塞戦に入るを得、獨軍をして長蛇を逸するの概あらしめたるも、而もその損害亦決して輕からず、獨軍側の情報によれば、露軍の捕虜六萬、死傷三萬、鹵獲軍需品砲七十一門、機關銃一千挺を算し、カイゼルは東普戰場より伯林に歸還し、得意満面にて戦功を語れり」と云へるも、之れ亦多大の誇張あるを免れず。

露軍は、その國民性の遲鈍なるが如く又遲鈍なるを免れず、此を以て敏捷なる行動を之に望み得可からざるも、その忍耐力に於て、不屈不撓なるに於て、又國民性の如く然り、従つて一敗直ちに挫折するが如きならず、飽迄も最初の一念に執着して、目的を達せざれば止まざるの概あり、今次東普の敗衄の如き、その打撃決して尠少ならざるも、その一旦退きて國境要塞の線に據るや、更に猛然として大勢力を發揮し、勝に乗せる獨軍をして顔色なきに至らしめぬ。二月二十七日發表せられたる露國の公報によれば、波蘭土ポブル及びビナレウの右岸即ちリツクの東南、グラエツオ方面よりプロレスク方面に亘る戦線に於て

激戦行はれ、獨軍はオンウエツツ砲臺に猛火を注ぎたるも、要塞砲の爲に撃退せられ、エドウアヅナ及びブラスニツクに對する數次の攻撃も結局無効に歸し、プロレスクに到る間の若干村落は、數次兩軍爭奪の目標となり、慘憺たる白兵戦を見ること數回なりしも、二月二十四日より六日に亘る露軍の努力は、最も重要な効果を擧げ、銃劔突撃によりて獨軍を潰散せしめ、ブラスニツクは確實に露軍の有たると共に、捕虜三千、砲多數、其他莫大の軍需品を得、獨軍をして全く守勢に轉ぜしむるに至れりと傳ふ。

第八節 カ山經の激戦

ガリシヤ方面に於て、埃軍が試みたる最後の一撃も遂に効なくして終り、露軍は依然として優勢を保ち、カアバシアン山の隘路上に確實に陣地を據守しつゝあるのみならず、動員完了と相待ちて、その新銳は此の方面にも増派せられ、更に埃軍の一大脅威たるに至れり、即ちトランシルヴァニア方面に於ける露軍の活動にして、此の方面は、天候道路共に露軍の運動に適するのみならず、埃軍の防備亦頗る薄弱なるを以て、露軍は恰も無人の境を行くが如く、キルクバハ山路は一舉にしてその手中に落ち、ドルナワトル附近に於ける埃軍必死の抵抗も、忽ちにして露軍の撃破する所となり、左なきだに本土の急を憂ひつゝあるガリシヤの埃軍をして一層憂慮せしむるに至れり。

伊太利が已に
立つ可くして
立たざるもの
實に獨塊の中
立強請による
ものなり。

前已に述ぶるが如く、東普の地は、本戦役に於て軍略上敢て重きを爲すものにあらず、従つて露獨共に之を争ふの要大ならずと雖も、一面國內人心を收攬する必要上、カイゼルは數次此の地に大軍を送りて露兵の撃攘に努めつゝあるなり。然り而して、露軍のトランシルヴァニア侵入、洪牙利の蹂躪は、又敢て大局の戦勢に關するものにあらずと雖も、事此に至らば、現に波蘭土にありて、獨軍と共に露軍に當りつゝある獨軍は、勢ひ後顧の念に驅られ、長く現地位に在る可からずして、クラカウの如きも容易に露軍の手に落ち、露軍の爲にシレジア侵入の門戸を開く可きのみならず、現に兵備を修めて、起つ可きの機を窺へる羅馬尼をして、決然として協商國側に投じ、一鞭直ちに洪牙利を指さしむるの恐れあり、延いて伊太利亦戰渦に投じ來り、獨塊は遂に粉塵せられ終らざる可からず、之れカイセルの最も憂ふる所なり。而も獨塊兵の羸弱なる、到底露軍の敵にあらずして、戦へば則ち敗れ、開戦以來露軍の跳梁に任じて、毫も之を阻止する能はず、之を自然にあらしめんか、此の憂は目前に事實となりて現はれ來らざる可からず、即ちその最も切要なる兵を割きて、獨軍を助けて露軍を撃退せんとし、バイエルン軍團以下の數軍團をしてガリシヤ方面に進ましむると共に、羅馬尼國境方面に出動せしめたる獨塊軍の全部をも招致し、二月六日以來、ブコウイナ及びカアバシアン山徑の露軍に對し、猛烈なる攻勢に出でしめぬ。

ザウルカ隘路
は、露軍の洪
牙利に入る通
路なり。

當時その勢ひの如何に猛烈なるものありしかは、露軍の情報に明かなり、曰く、「獨塊軍がカアバシアン隘路を占領せんとせる企圖は、恰も獨軍がワルシヤウ前線の露軍陣地を突破せんとせるに等しく、その拂へる犠牲の多大にして、而も不成功に終れることを證明しつゝあり」と。

實にカイセルは、一舉してカアバシアン方面並にブコウイナ侵入の露軍を撃攘し、以て前記の危険を免かれんと欲せるものにして、當時此の方面に向へる獨塊軍は、その兵數に於ても遙に露軍を凌駕するの優勢にあり、加ふるに、損害如何を顧みずして一舉に目的を達せんとせる勇猛果敢なる攻撃は、露軍をして大に困厄の他に立たしめ、一時退却を餘儀なくせらるゝに至り、特にザウルカ隘路及びその東方の露軍陣地に對する攻撃は、最も猛烈なるものあり、前後二十二回に亘る強襲によりて目的を達せんとしたるも、露軍亦よく防ぎ、最後の白兵戦に於て、全く之を撃退し終れり。其他全線に亘り、獨軍は常に先頭に立ち、新鋭部隊を率ゐて露軍に迫り、露軍最も苦戦したるも、漸く二三陣地を喪失せるのみ、遂に之を阻止するを得、ドリナ及びスタニスラウ南方に在る獨塊の大軍に備へつゝあり、而して此の間獨塊軍の損傷は最も多大なるものあり、一月二十一日より二月二十日に至る一ヶ月間に於て露軍の手に歸したるもの、捕虜四萬八千三百三十一名、砲十七門、機

關銃百十八挺、飛行機二臺を算すと云ふ、以て埃軍全損害の如何に多大なりしかを知る可く、獨軍の損害亦決して尠少ならざる可きなり。

第六章 土耳其の妄動

獨逸及び墳地利が常に恩を土耳其に售りて之が懐柔に努めつゝありしは、吾人已に説きたる所に屬す、況んや頑冥自ら揣らざる土耳其政治家等が、本戰役に際し果してよく中立を守り、その國家を全うし得可きや否やは、開戰當初に於て早くも識者の顧慮を惹く問題なりしが、獨艦ゲーベン、ブレスラウの英佛艦隊の壓迫に堪へずして地中海を通れ、ダアダネルス海峡に入るや、土耳其は中立國の義務を盡さず、名を二艦買収に藉りて、僅に聯合國に謝する所ありき。而もその到底獨塊に與して立つ可きは、世人の等しく信ずる所に於て、聯合各國亦各々之に備ふる所あり、勿論土耳其の参加は、大なる影響を戰局の上に與ふるものにあらずと雖も、爲に巴爾幹の風雲を紛糾せしむること大なるものある可く、而して戰局の結末に一層紛亂を來さしむ可きものあらんとするを以て、困難なる媾和談判は、一層の困難を加ふるに至る可きを恐れしめぬ。而して土耳其は、カイゼルの煽動する所となりて、遂に自ら好んで戰渦の中に投げ終れり。

ダアダネルス
は他國の軍艦
に通航を許さ
ず、之れ已に
中立違反の一
にして、武裝
解除を行はざ
る亦中立義務
の違反なり。

第一節 土艦の暴行と各國の宣戰

十月二十九日黒海遊弋中なりし土耳其艦隊の一部、ゲーベン、ブレスラウ及びハミヂエの三隻は、相率のて露國の海岸に迫り、トランスカウカサスのノヴォロシイスク及びクリミア半島東側のフェオドシアを砲撃し、多少の損害を與ふ、之より先露土の國交は、カイゼルの辣手によりて攪亂せられ、已に危殆に瀕せるものありしが、此に於てか兩國々交は事實上全く斷絶を告ぐるに至り、露國政府は、そのコンスタンチノール駐劄大使及び大使館員に任地撤退を命じぬ。

此の以前土耳
古は獨逸より
軍資として多
額の金貨を受
取りたり。

土耳其政府は、土艦の露都市砲撃を以て單に乘組員の妄動に出で、政府の與り知らざる所なりとなして、その駐外大使を通じ、聯合各國に謝罪の意を表したるも、露西亞は敢て耳を假さず、十一月二日を以て先づ宣戰を布告し、次いで英佛亦之に倣へり、土耳其即ち立つて協商三國を敵とし、その最後の運命に急がざる可からざるに至りぬ。勿論土耳其の眞意が、露西亞に對する開戰にありしは、前後の事情明かに之を證せり、即ち土耳其は、豫かじめその大兵をカウカサス國境に集中し、露軍の侵入に備ふると共に、その艦隊をして露國黒海岸の都市及び船舶に威嚇を加へつゝありしなり、同時に又埃及國境方面に於ても種々の示威運動を試み、英國をして危険を感ぜしむる所あり、遂に英國は、土國政府に

ゲーベン、ブ
レスラウを加
へたる土艦隊
は露の黒海艦
隊を脅威する
に足る。

土耳其の皇帝は回教の教主にして、印度埃及等には多数の回教人民を含めり、之等回教徒が宗教上の關係より土耳其に同情することは英國の最も恐れたる所なりき。

對して、若し土耳其軍隊にして埃及國境を超ゆるあらば、之れ土耳其が協商三國に對して開戦するものなりとの意を通牒するに至れり。然り而して今や土耳其の妄動は、協商三國をして之に宣戦するの止むなきに至らしむ、英國即ち二日を以て埃及に戒嚴令を敷き、又在埃及官憲は、各部の會長をカイロに召致し、土耳其が獨逸の教唆によりて開戦せる理由を説明して萬一に備ふる所あり、會長等其の意を體して、悉く英政府に忠實なる可き旨を誓言せり。

英國は又一面印度の動搖に至大の憂慮を拂へり、即ち三日を以て、全印度に布告を下して曰く、英國が土耳其に對して開戦せるものは、決して宗教問題に關係を有するに非ず、アラビアの聖地は、印度巡禮者にして、該地に於て不穩の行動に出でざる限り、英佛露の三國は決して之を侵害すること無かる可しと。同時に全印度の回教徒總裁アガカンは、印度及び他の英領に在る回教徒に通牒を發し、土國の開戦は決してスルタンの本意にあらざして、獨逸將校及び教唆されたる非回教徒の行爲なる旨を明かにする所あり、爲に英國が最も憂ひたる回教徒の動搖は、毫も之を認むることなかりし。而してカイゼルが土耳其を教唆煽動して戦渦に投ぜしめたる目的は、全く達せらるゝを得ざりき、蓋しカイゼルは、土耳其を己の與黨とし、スルタンをして宗教戦争を宣せしめ、依つて以て回教徒の多數を

その領民に包擁さる英國以下協商國側をして、内紛に忙殺せしめんことを期したるや明かなり。

第二節 土軍一蹴せらる

露土開戦の報至るや、露國カウカサス總督は、直ちに土境通過の軍令を發し、露軍の一部隊は、四日を以てアルメニア國境カルス西南十六哩のアルドスト附近の土軍を襲撃し、コロサン、ロルカラ、デルグルンを占領せり、此の戦鬪に於て四百のゴサツク騎兵は、土軍の塹壕を攻撃して土軍歩兵隊に大損害を與へ、且つクルド軍を一蹴して多數の捕虜及び軍需品を獲たり、次いで八日エルゼルーム地方に集中しつゝありし土軍は、露軍陣地に襲撃し來りしが、激戦の後土軍は撃退せられ、露軍は更にケプリコイに於ける土耳其の堅固なる陣地を占領し、アラシケルト地方の平原亦その有に歸す。

斯くて露軍は恰も無人の地を行くが如く、所在土耳其軍を撃破して、敵の據りて策源地とせるエルゼルームに進みつゝありしが、十二月土軍の三個軍團とサリカミシユに戦ひ、激戦の後その一個軍團全部を捕獲し、他の二軍團亦殆んど統制を失ひて潰散するに至らしめぬ、次いでカラウルガン附近の戦鬪に於ては、大吹雪中に土耳其の第十一軍團と激戦を交へ、又大捷を博せり、即ち一月十日露軍は、山砲二門並に多數の彈藥を鹵獲せるを初と

クルド軍は悍なるクルド族より成る土耳其の一軍なり。

とし、土軍二個聯隊はその將校と共に捕獲せられ、十一日更にオルチス河西方及びカラカルガン方面に面烈なる戦闘は行はれ、土の九十二聯隊全部は露軍の捕獲する所となり、五十二聯隊中の一個大隊は殆んど全滅せられ、残存せる下士卒二百五十名は將校一名と共に捕虜となり、敗餘の軍はエルゼルム方面に潰走せりと、而も露軍の追撃最も急にして、爲に目的地たるケブリケエに退却する能はず、止むなくケニケニに據守して一戦を試み、露軍のエルゼルム進撃を阻止せんとせり。

第三節 埃及方面戦況

カウカサス方面に於ては、土耳其軍は脆くも露軍の一蹴する所となり、エルゼルムの要地も亦將に露軍の手中に落ちんとしつゝあり、一面その英軍に對する、亦頗る振はざるものありて、半月旗今や全く光を失ふものあるを思はしむ、開戦劈頭英國印度兵及び海軍旅團は、十一月八日波斯灣頭のフアオ港に上陸し、バグダット鐵道に沿うて北上しつゝあり、十二月五日に至りて、チフリス河の左岸、クルナの對岸、ユーフレチス河との交叉點に出で、土軍を撃攘して、クルナの對岸マセラ及びクルナを占領し、土軍を指揮しつゝありしバストラ知事は、その軍隊と共に無條件の降服を申し出て、三角洲中最も肥沃なる部分は全然英軍の手中に落ちたり。

英土今や干戈の中に相見ゆ、而して埃及は、事實上英國の支配する所なるも、土耳其の宗主權を握れり、此に於てか英國は、その埃及に對する關係を一層明確ならしめんとし、十二月二十日を以て、埃及をその保護國と爲す可きを公式に發表し、中佐アーサー、ヘンリー、マクホマンを以て之が行政長官たらしめ、爾今英國政府は、埃及の防禦及び人民の保護に必要なる一切の措置を執ることとする旨を布告す、同時にヒュセインは埃及の王として冊立せられ、同日を以て、諸兵參列の上カイロ入城式を行ひ、人民は熱誠なる歡叫を以て之を迎へたり。而して當時土耳其は、埃及遠征の意ありしを以て、英國亦其備を嚴にして之を待てり。

已にして土耳其は、前大臣ゼマルパシャを以て埃及出征軍司令官に任じ、三軍團十二萬の將士を率ゐて進發せしむ、その前衛は、一月二十六日を以て蘇士運河鐵道沿線なるカンタラの東方に於て、早くも英軍と接觸せり、而して當時英國の埃及方面に於ける防備は、甚だ厚からず、即ち平時埃及に駐屯せる守備軍は、開戦の始め佛國の戰場に送られ、印度軍及び新西蘭土軍の一部を以てシナイ半島の防備に任じ、若干の土民兵を以て蘇士の守備に任ずるのみ、その兵數に於て到底土耳其の大軍に抗す可からざるも、シナイ半島より埃及に通ずる道路は、僅に二條に過ぎずして、而もその間概ね無水の沙漠の擴がるあり、爲

土耳其は埃及
出征に際し、
沙漠横斷用と
して一萬三千
頭の駱駝を準備
せりと云は
る。

に土耳其の大軍も、一時に進軍するを得ざるのみならず、開戦以來多数の英國砲艦は運河内に配置せられ、陸上樞要の地亦幾多の堡壘築かゝるあり、一望涯際なき沙漠は、飛行機の展望を遮るものなくして、その偵察に従ひ、運河と鐵道とを利用し、隨所に備を立てて待つを得る英軍は、容易に土耳其の目的を爲さしむ可きにあらざるなり。

果然、殺到せる土耳其軍は、一撃の下に撃攘せられぬ。土耳其軍は、三縱隊となりて、カンタラ附近、イスメリヤ附近、イナイ山西斜面の三道に沿ひ、蘇士に迫るや、その先頭兵團の一萬五千は、六個中隊の砲兵と、若干の不完全なる架橋材料とを以て、二月二日夜蘇士運河に達し、附近の英軍に向つて攻勢を取れり、而も英軍は、早くも偵察して敵の實情を知れり、即ち土軍をしてその携行せる架橋材料を運河堤防に運ばしめ、その架橋の完了して、土軍の將に運河を横ぎらんとするに當り、突如猛烈なる砲火を之に集中したるを以て、土軍狼狽出づる所を知らず、一切の架橋材料と多大の死傷者とを遺棄して潰走し、運河二十哩以内の地又その隻影を見ざるに至れりと云ふ、勿論此の戦ひや、僅に敵の一小部を潰亂せしめたるに過ぎずと雖も、地勢已に右の如く、到底大軍を行るに適せざるを以て、爾後遂に土軍目的を遂ぐるの期なる可し、況んや蘇士は東西交通の公道にして、之を守るは英國の責任なり、若し英國にして運河を敵手に委し、爲に東西の交通を妨げらる

るあらば、英國が大國たるの面目將た何處にか之を求むるを得ん。英國亦よく之を知る、運河は必ず安全に守らる可きなり。

第四節 夕海峽の砲撃

協商三國が土耳其に宣戦せるの後、英佛艦隊は直ちにダダネルス海峽に近づきて之を砲撃する所ありしも、要するに威嚇に過ぎざりき、其後勇敢なる英國潛航艇が、水雷の密布せられたる海峽を突破し、マルモラ海に入りて、土艦戰艦に水雷を發射し、之を轟沈せりと傳へらるゝも、未だ眞偽を保す可からず、爾後機に乗じて、威嚇的砲撃は英佛艦隊によりて試みられたるも、その眞に有效なる砲撃の開始せられたるは、實に二月十八日の事に屬す。

之より先英佛露三國の藏相は巴里に會して商議する所あり、將來必要なる可き戦費に關する協議を遂ぐると共に、新に協商國に與して立つ可き諸國の軍費に對して、十分なる便宜を與ふ可きを定め、同時に豊富なる露西亞の農産物に對し、之が搬出の途を得んことを議せり、而してバルチックの制海權は、獨逸海軍の手中にありて、此の方面よりする輸出は到底不可能事たり、一方露國の搬出口たる黑海は、土耳其艦隊の跳梁するものあるのみならず、ボスポロス、ダダネルスの兩海峽は、敵對關係たる露船の出入を許さざるや明

かにして、露西亞にして若しその産物を輸出せんとせば、遠く東洋を迂回せざる可からざるの狀にあり、即ち一面土耳其に大打撃を加ふると共に、一面露國産物の爲に搬出を自由ならしめんが爲、英佛艦隊は、その精英を抜いてダアナルス海峡の砲撃を試みるに至れるなり。

二月十八日午前、英國戰艦クギン、エリザベス、佛國戰艦ゴローア以下、多數の大戦艦は、巨砲の口を開いて、巨弾を海峡砲臺に送り、爾來連日その砲撃破壊に努めつゝあり、幾多の堡壘は、巨弾の破る所となりたるも、海峡の全長四十哩に亘り、蜿蜒連互せる砲臺全部を破壊し盡さんとするは、是決して容易にあらず、而も陸兵を擧げて佛國戰場に送れる英佛は、更に陸兵を此の方面に派して、背面攻撃の擧に出づる能はず、隔靴搔痒の嘆を禁ぜざるものありしが、十國の狼狽亦頗る甚たしきものあり、早くも皇帝蒙塵説の傳へらるゝあり、加ふるに獨逸亦土耳其の爲すなきに苦しみ、今や捨てゝ顧みざるに至りて、土耳其の運命は刻一刻に迫らんとす、此の時に當り、希臘の國論大に主戰に傾き、干戈を取りて協商國側に加はらんとするを傳へられ、希臘にして若し立たんか、敗殘の土耳其は、一擧にしてその屠る所となる可く、海峡の諸砲臺亦早くその手に歸して、黒海の門口は全く開放せらるゝに至らん。

第七章 白佛境對峙戰

マルヌの一戰獨軍に利あらずして、一擧佛國を蹂躪せんとしたるカイゼルの作戦茲に破れ、兩軍エヌヌ河孟にありて相對峙し、殆んど要塞戰に等しき狀勢を呈するに至りては、精銳なる獨兵亦施すに術なく、僅に塹壕の爭奪に苦心するのみ、戰勢の發展遂に期す可からざらんとす。而も東方に於ける露軍の勢ひ日に盛んにして、埃軍は早く已にその蹴破する所となり、動もすれば露軍の巨砲シレジャの地に現はれ來らんとし、東方の警報切りに臻るあり、アントワープの攻略によりて、漸く剩し得たる數個軍團も、以てその急を補ふに足らず、而して國內の壯丁は、已に殆んど戦線に在りて、今や又一兵をも得難からんとするに當りては、獨軍の窮狀察するに餘りあり、たゞ僅に完備せる鐵道網によりて、兵員の運用を活潑ならしめ、漸くにして現狀を維持するのみ。此に於てか、東はワルシャウを得て露軍の策源地を覆へさんとし、西は聯合軍の中堅を突破して覆滅を誘はんとし、奮勵最も努めたるも、遂に何れも目的を達する能はず、或はカレーに出で、ドーヴァアの鎖鑰を握り、英本土を脅威せんことを企てしも、之れ亦目的を達するに至らずして、動もすれば聯合軍の爲に壓迫せられんとするもの、實に白佛境對峙戰の狀況なりとす。

第一節 イーゼル争奪戦

エヌヌ河孟に於ける戦闘が、全く陣地戦となり、殆んど要塞戦に等しき状態となるや、獨軍が最大努力を以てする聯合軍中堅突破も、到底その効を奏す可からず、獨軍即ちその方針を一轉して、ドーヴァー海峡に出てんとし、アントワープ攻略以後、更に西南方にその軍を進め、先づガンに迫れり。十月十一日、ガンにありて、頑強に獨軍の前進を阻止しつゝ、ありし英白聯合軍は、夜に乗じて南方に退却し、ガンは十二日を以て獨軍の手に歸しぬ、獨軍即ち進んでオステンドに迫り、殆んど何等の抵抗を受くることなくして、オステンド及びその北方なるブランケンブルグを占領するを得たり。此に於てか兩軍の戦線は、瑞西國境より佛國海岸に及び、何れの點よりするも側面攻撃を許さざるに至れり。

之より先きガンを撤退せる白軍は、十月十五日を以て白佛國境に達し、此に隊伍を整頓して、イーゼル河の線に在る聯合軍に合し、十七日同河及び諸渡河點に對する獨軍の攻撃を撃退せしが、獨軍亦毫も屈せず、飽く迄その前進を繼續せんとし、奮戦最も努む、蓋し獨軍の意圖たる、オステンドよりダンケルクに至り、白耳義海岸の一角より聯合軍の左側背に出でんとせるなりき。聯合軍亦此の企圖を知り、飽く迄も之を妨げんとし、此に猛烈なる戦闘となり、互に一進一退、苦戦惡闘を重ねつゝありき。

十月二十五日、獨軍は、頑強なる聯合軍の抵抗を排し、非常の努力を以て、ニューポール及びヂスミュードの間に於てイーゼル河を渡過せり、當時その戦闘の如何に激烈なるものありしかは、獨軍爲に開戦以來無比の大損害を受けたりと云ふに見るも略想像するに足らん、斯くて獨軍は、更に新鋭隊を招致して、長驅カレーに進まんとせるも、聯合軍亦之に備ふる所あり、獨軍渡河の前日に於て、必要なる地點に多大の軍隊を配備したるを以て、漸く渡河の目的を達したる獨軍も、爾後その進路を開くを得ず、戦闘は河畔に膠着して、惡戦苦闘を反覆するに過ぎず、遂に英軍は、一旦敵手に委したるヂスミュードを復するに至りて、獨軍支へず、河を渡つて退くに至れり。此の役前後約十日、兩軍の死傷十數萬に達せりと云ふ。

爾來獨軍は、機會ある毎に渡河を企て、カイゼル亦必ずカレーを陥れてドーヴァー海峡を制す可きの嚴命を下せりと雖も、獨軍の企圖は常に聯合軍の挫く所となり、遂に目的を達する能はず、其他全線に互り、激戦殆んど寧日なしと雖も、戦局の發展殆んど見る可きものあるなく、九月中旬以來、三月に入りて尙大なる變化を見ず、此の間聯合軍は、或は有力なる新武器の製造に、或は新兵員の訓練に努むる所あり、獨軍の形勢日に非ならんとするを見る。

第二節 獨逸の英國脅威

獨軍の強猛なる、東は露の大兵を支へ、西は佛英白の聯合軍に當り、白耳義全土を蹂躪して、本國の地會て敵の一兵を容れしめずと雖も、その最も嫉視せる大英國に對しては、遂に一指を染むる能はざるなり、之れカイゼルの最も遺憾とせる所なるも、如何せん強大なる英國海軍は、到底獨海軍の抗爭す可からざる所に屬し、北海の波靜かなれども、獨の一艦一艇も之を航過する能はず、況んやその陸兵をして英本土を窺はしむるをや、此に於てか獨逸が取る可きの策、その危大なるツエツペリン飛行船を飛ばして英國各都市に爆彈を投下すると、その潜水艇をして、英艦隊を奇襲せしむるの外ある可からず、或はドーヴアー海峡を制し、巨砲を此に運びて、海峡を越えて英本土を攻撃する、又一法たるを免れず、而して獨逸は之が爲に五十瓏口徑の巨砲を鑄造せりと傳へられ、一面その白佛國境軍をして、損害を厭はずカレーを占領せしめんとせるに見れば、或は之れ亦架空の談にあらざるやも知る可からず。

獨軍が毎次多大の損害を被るにも拘はらず、イーゼルを渡り、進んでダンケルクを取りカレーに出でんとせるもの、果して前記の目的を有するに由るや否や、今之を詳かにせずと雖も、その企圖は毎に挫折せしめられ、未だ嘗て目的を達せず、然れども他の方法によ

る英國の脅威は、遂に實行せられたり、一月十九日午後八時半、天正に暗くして、星疎らなるのとき、數隻のツエツペリン飛行船は、推進機の爆音を空に轟かしつゝ、英本土の空に襲ひ來れり、彼等は、北海沿岸ノーフォーク州の中空を飛航しつゝ、ヤーマス、サンドリンガム、キングスリン、クローマー、シエリンガム及びピーストン等の都市に爆彈を投下し、多少の損害を加へて去れり。

獨逸は、之を以て非常の大功なりとし、モルゲンボースト紙の如きは、「英國の離れ島も首尾克く征服せられたり、獨飛行船にして一ひ海を渡りて爆彈を投ずるあらんか、海も海軍も、英國の爲に何等の用を爲さず」と云ひ、他の獨紙は、「北海も今や空中襲撃に何等の障礙を與ふるものにあらず」と云へり、而もタイムス紙はツエツペリン襲來の目的を解剖して曰く、「第一、獨逸は英國が飛行船攻撃に對して如何なる手段を用ゐるかを知り、第二、獨逸ツ式飛行船は無益の玩具にあらざるを知らしめ、第三、之を以て單に英人を威嚇するものなり、而もその第三の目的たるや、全然失敗に終れり」と、然り開戦の當初にありては、ツエツペリン飛行船は、英人の惡夢たりしと雖も、今や現にその襲來を受くるに及び、實害の甚だしからざるを知りて、之を恐るゝの念殆んど失はるゝに至れるなり。即ちタイムスの所謂第三の目的は全く失敗に終れるなり。

第八章 埃塞戰局

埃塞國交の斷絶は今大亂を誘出し來りしと雖も、二國間の戰局は、大局の上は何等の影響を及ぼすものにあらず、且つ塞軍如何に勇なりと云ふも、兵數の小なる、到底大事を爲す可からざるを以て、埃塞戰局は世の視聽を惹くこと大ならず、當面の敵たる埃國にありても、重きを之に措く事なかりき、即ち國交斷絶の當時に於て、埃の大軍は、ダニウブの流を横ぎりて塞都ベルグラードを攻略せんとし、塞軍との間に激戦を交ふるところありしが、次いで露佛との開戦を見るや、その軍團は多くガリシヤ方面及び佛境方面に送遣せられ、塞軍に對しては僅に守勢を取るに止めたり、塞軍即ち與國黒山の軍と共にボスニアに侵入し、宿怨聊か酬いらるゝを得たるも、埃の大軍此の方面に向ふや、その壓迫する所となり、十一月二十七日コルバラ河の線より新陣地に退却するの止むなきに至れり、而も勇敢なる塞軍は、退却中數次逆襲に轉じ、局部的勝利を博して、埃兵將校以下二千名を捕虜とし、悠々として豫定の退却を爲しつゝありしが、二十九日更に猛烈なる逆襲を試み、五軍團を有する埃軍と激戦を交へぬ、而も衆寡の懸絶は如何ともす可からず、遂に國境内深く退却するに至りて、埃軍は塞爾比亞の首都ベルグラードを其の手に收めたり。

此の次塞軍の退却や、最も迅速巧妙を極め、殆んど一兵をも損することなくしてよく豫定の行動に出で、埃軍をしてベルグラードに入らしめたり、時に十二月二日なりき、而も塞國政府は早く已に南方山地に移りて、ベルグラードは何等軍事上の價値を有せざる一都市に過ぎざるなり、然りと雖も開戦以來始めて捷報に接したる埃國上下の歡喜は最も大なるものありき。

此の時に當り、ガリシヤ方面に於ける露軍の活動頗る著るしきものあり、埃軍到る所不利にして、露軍將に一舉してカアパシアン山脈を蹴破し、洪牙利に入らんとするの概ありしを以て、埃國は、塞國方面の軍を割いて急遽赴き援けしむ、蓋し埃軍已に塞地に入り、必要なる陣地を占めたるを以て、兵力を割くも優にその地位を保つ可きを信じたるなり。然り而して塞軍は、その退却に當り、他日の捲土重來を期せるもの、謀じて埃の兵力分割を知るや、五日拂曉を以て、早くもベルグラードの埃軍陣地に殺到せり、埃軍即ち市外の丘陵に據り、頑強なる抵抗を試みたるも、勇敢なる塞軍は、三び銃槍突撃を加へ、遂に陣地を奪取するや、埃軍は尙優勢を持続せるにも拘はらず、その銳鋒に辟易して、急遽退却を開始せり、而も彼等の退却を始むるや、諸種族より成れる埃軍は、互に先を争ひて秩序を失せるのみならず、遂に同志討の陋態を示せりと云ふ。

斯くの如くにして埃軍は、潰亂の状態を以て退却したるが、塞軍の追撃は頗る急なるものあり、巨弾は潰亂せる埃軍の頭上に破裂し、死傷算を知らず、加ふるに、そのサウ河の鐵橋を渡らんとするに當りて、塞軍の砲彈橋上に破裂し、橋梁を破壊したるを以て、埃軍の大部はその退路を絶たるゝに至り、將校百五十名、兵卒一萬、砲八門、輜重車四百五十輛、馬匹一千は立どころに塞軍の捕獲する所となりぬ。塞軍大に勢ひを得、更に猛烈なる追撃を續行して、埃軍を潰散せしめ、砲百五十門、彈藥車二百五十輛亦その手に歸するに至り、埃軍の戰鬥力殆んど全く盡くるに至る。

爾來塞軍は、所在埃軍を撃破して、之を西北方に壓迫し、サブツク、ロスニツツアの線を確實に占領し、埃の一兵を自領に止めしめざるのみならず、セラエツオ東南地區に於ては、モンテネグロ軍に協同して、ドリナ河の上流フオツツア、ゴラツザ、ツイゼグラードの諸要地を占領し、勢ひ頗る振ふ。

由來埃陸軍の精銳ならざる可きは何人も之に信じたる所なりと雖も、今次塞爾比亞侵入軍の如き、明かにその弱點を示したるものと云ふ可くして、斯くの如きの弱兵を以て露の強兵に抗せんとする、寧ろ至難と云ふ可く、開戦以來、埃軍の捷報遂に聞くなきは、又宜なりと云ふ可きなり。

第九章 海戦の経過

獨逸對聯合國の海軍力については、先に已に述べたる所にして、獨逸如何に努力するも到底英佛海軍に抗す可からざるや明かなり、此に於て開戦以來、殆んど海戦と云ふ可きものを見ず、茲に海戦の経過と云ふも、要するに海上の出來事たるに過ぎざるなり、讀者乞ふ之を諒とせよ。

第一節 地中海の第一戦

由來地中海は、印度への通路として、英國が最も重きをおくのところ、常に大艦隊を遊弋せしめて、警備怠るところなかりき、然るに英佛協商成るに及びて、地中海上に覇を争ふの敵佛は、英の與國となれりしを以て、英國は此の方面に意を安んずるを得、一面獨逸海軍の勃興に伴ひ、之に備へんが爲、その主力艦隊は多く北海に在り、佛國亦爲にこの北海岸の防備を友國に依頼し、専ら力を地中海に盡すに至る、即ち一千九百十二年以來、佛の艦隊は、その地中海に於ける軍港なるツーロンに在りて、大西洋に出づることなく、専らツーロンよりポーナ港に到る地中海の制海權を確保するに努めたり。之れ實に一期獨逸と事あるに當りて、最も安全に、そのアルゼリアの精兵を中國に招致せんが爲なり。

ゲーベンは有
力なるド型艦
にして、アレ
スワリは四五
〇〇噸の小巡
洋艦、パンタ
ーは九六二噸
の舊式小砲艦
なり。

今次獨佛將に干戈に見えんとするに至るや、時に獨艦ゲーベンは出で、地中海にあり、プレスラウ及びバンターの二艦を率ゐて、八月四日午前突如として亞弗利加北岸アルゼリアの佛領ポーナを砲撃せり、(ポーナはアルゼリアの良港にして、堅固の要塞を構へ、人口四萬を有し、中二萬は白人なり)その意蓋し佛のアルゼリア兵輸送を妨げんとするにあるか、或は單に偵察の目的たりしならんも、英佛の兩艦隊が、守を堅うせる地中海上にありて、此の種の行動に出づる、又餘りに大膽なりと云はざる可からず、果然、彼等のポーナを去らんとするや、優勢なる英國艦隊は、舳艫相啣みてその退路を絶てり、獨艦止むなく針路を轉じて去らんとす、時に佛の艦隊はその前面に現はれ、茲に海戰第一彈は交換せられたるが、その結果として、最も劣勢なるバンター艦は撃沈せられ、ゲーベン、プレスラウ亦佛艦の爲に捕へらるゝの報ありしも、二艦は圍を衝いて遁れ、伊太利メツシナ港に竄入せり、後又ダーダネルスに現はれ、交戦各國の紛議を生じ、遂に土耳其に賣却せられたるは先に説きたるが如し。爾來地中海は全然英佛兩艦隊の掌握する所となり、強大なる獨の海軍も、一指を染むるを得ざるなり。

即次いで英國海軍省は、巡洋艦アンフィオン號が八月七日獨逸の沈設水雷に觸れ、遂に沈没するに至り、乗組員中百三十一名之に死せることを公表せるが、同號は、一千九百十一

年の進水にかゝる新式輕巡洋艦にして、三千四百四十噸、四吋砲千門を備へ、速力二十二節を有するものなりき。

之より先、歐洲の風雲愈々急にして、到底戰禍の避く可からざるに至るや、各國海軍亦各々之に備ふる所あり、即ち英國海軍にありては、その精銳を集めた内國艦隊の主力は、開戦前の大演習に参加せるまゝ、ポーツマス軍港に在りて解散せられず、威容儼然として北海に雄視せり、後最も優勢なる第一艦隊は、ポートルランドに移り、盛んに出動準備を爲しつゝあり、一方地中海艦隊亦マルタに集中して戰團準備に忙はしく、佛國艦隊亦ツローン軍港にありて、地中海を睥睨しつゝありき。一方機逸の海軍は、時恰も諾威海岸に大演習を舉行しつゝありしが、開戦と同時に本國海面に入り、一部は北海の軍港ウイールヘルムスハーツエンに、一部はバルチック海のキール軍港に入りて、共に戦備を收め、又その地中海艦隊は、伊のターラント港に集りて出動の命を待てり。埃國海軍亦カッタ口港に集中し、ダルマチア海岸に水雷を沈設して、その守備を堅くせしが、カッタ口港は、モンテネグロに接し、その高丘上より瞰村せらるゝの不利を免れざりき。露西亞に至りては、日露戰爭によりてその殆んど全部の海軍を失ひ、爾來その建造に銳意せるも、新艦多く工事中にありて、バルチック海にありて、到底獨海軍に抗する能はず、然れども、砲臺の掩護と

モンテネグロ
は佛海軍と共
同してカッタ
口港内の埃海
軍を山上より
砲撃したり。

獨逸は海路陸兵を露領に送致するの意圖あり、露即ち之に備へんとするなり。

相待つて、優にフィンランド灣口を守るに足るものあるを以て、その五隻をバルチック海に殘せる外、フィンランド灣内に潛み、燈臺の火を滅し、リガ灣口に水雷を沈設して獨軍を待てり、一方黒海方面に於ては、セバストポールに全艦隊を集め、燈臺の點火を止め、嚴重に之を衛れり。然り而して、地中海上に在りたる獨塊の海軍は、前記ゲーベン、ブレスタウ以下凡て撃沈若くは掃蕩せられ、地中海の制海權は、全く英佛艦隊の手中に存すること前述せる如し。

第二節 ヘリゴランド島沖の海戦

獨逸自らその海軍は到底英海軍の敵にあらざるを知る、此を以てその優勢なる艦隊は、深くウイルヘルムスハーフェン及びキールに潛み、たゞ僅に潛航艇、驅逐艦の奇襲によりて、英の主力艦隊に打撃を與へ、兩々勢力相若くに至らしめ、然る後主力艦隊を率ゐて堂々の戦ひを爲ざんことを思へり、然もその計畫は容易に成功す可からず、開戦以來已に半歳餘を経過せる今日に於て、毫も英の主力艦隊に加ふるなきを見れば、蓋しその成功の機到底無かる可きか、英國艦隊は、始め獨の主力艦隊を北海に誘出して、一舉之れを殲滅するの計畫なりしが如くなるも、獨海軍の此の態度は、到底その目的を達せしめざらんとするを以て、遂に大封鎖を行ふに決し、主力艦隊を本國海岸に備ふると共に、快速なる驅逐



艦、無線電信等の便を藉り、和蘭よりバルチック海口に至る迄の大區域をその封鎖線内に
入れ終れり。

此の不便やが
て又露軍の不
利とする所に
して、露の大
軍が一舉獨の
地に入る能は
ざるもの、亦
後方輸送機關
の缺如に原因
する所多し。

蓋し獨逸の大海軍は、素と英國海軍に拮抗せんが爲に計畫せられたるものなるも、今次
の戦役に當りては、之を陸兵輸送の掩護に宛てんとするが如し、即ち獨軍にして豫定の如
く、西に聯合軍を破り、佛軍をして復立つ能はざるに至らしめんか、直ちに東の方露に向
つて之を用ゐんとするは、前已に説く所の如くにして、此の時に當り、陸路國境を越えて
露の地に入らんか、幸ひにその目的を達するとするも、交通不便なる露の内地は、到底大
兵の後方機關を全からしむ可からずして、奈翁の覆轍を踏まざる可からざるに至らんとす、
之を避けんが爲には、海路大兵をフィンランド沿岸に送り、一舉露都を衝くに若かざるな
り、即ち此の際に於て、大にその海軍に依頼せんとす、之をして英海軍名譽の犠牲たらし
む可からざるなり。

斯くの如くにして獨の海軍は敢て出でず、北海は確實に英海軍の手中に在りて、その艦
隊は悠々濶歩しつゝあるなり、時に八月二十七日時は、朝靄未だ深く、東天漸く紅を潮
するのとき、封鎖任務に在る英國驅逐艦隊は、ヘリゴランド島の南方沖合に現はれたり、

第一巡洋艦隊の主力ライオンを始めとし、その姉妹艦たるブーンセスローヤル、クキンメ

ヘリゴランド
島は獨逸エル
ベ河口を距る
三十哩の地點
にあり、獨の
海軍根據地た
り。

リー以下、ニュージールランド其他の數巡洋艦は、遙に之を掩護しつゝ、隊伍整然として進
航を續けぬ。時に海岸警備の獨逸巡洋艦隊及び驅逐艦隊は、晴れ渡る狭霧の中に現はれ、
圖らずも英艦隊はよき敵を得たり、即ち英艦隊は、一齊に旋回運動を取ると共に、敵艦隊
の後方連絡を脅かし、驅逐艦先づ突進して敵驅逐艦に肉薄すれば、巡洋艦隊以下敵の巡洋
艦隊に對して砲口を開けり、斯くて砲戰少時の後、獨の巡洋艦アインツ（一二三噸）は撃
沈する所となり、ケルン型のもの一隻亦沈没せる外、他の一隻は火災を起して濃霧の裡に
姿を没せり、驅逐艦隊亦英の捷利に歸し、獨の二隻は撃沈せられ、數隻は大損害を受けた
るも、英國艦隊にありては、小巡洋艦アンチス（三〇〇噸）及び驅逐艦デアメスト號の
多少の損害を被りたるのみ。

第三節 英艦の奇禍

ヘルゴランド島沖の海戦ありて以來、獨逸艦隊は一層深く潜んで出でず、優勢なる英艦
隊も、遂に何等の打撃をも之に加ふるを得ずして、僅に封鎖を嚴にするのみ。然れども時
漸く秋に入りて、北海の夜は愈々永く、獨逸潜航艇をして活動の機を得せしむること多
きを以て、封鎖艦隊の勞苦頗る察す可きものあり。九月二十一日、英の巡洋艦隊は、例に依
りてその配備につき、封鎖任務に服しつゝありしが、アプーカー號は、突如としてその艦

三艘遭難の爲
士官約六十名
下士卒一千四
百名は艦と運
命を共にせり
と云ふ。

底に異様の衝動を受け、瞬時にして巨大なる艦隊は、沈下を始めたり、嗚呼、彼や實に獨
潜航艇の襲撃を受けたるなりき。

アブーカー號の難に遭ふや、附近に在りし僚艦ホーグは、舵を轉じて赴き助けんとし。
アブーカー號の側に至るや、犇猛なる獨潜航艇は、更に好個の敵を得て、水雷一發、ホー
グ亦アブーカーの轍を履めり、此の時僚艦クレッシー亦至りたるも、等しく獨潜航艇の狙
撃する所となり、三艦時を同じうして沈没の災に遭へり、三艦各々一萬二千噸、速力二十
二節にして、一千九百年頃の建造に罹るもの、その喪失や、敢て英海軍の全勢力に影響す
る所あらずと雖も、亦英海軍の爲に吊せざるを得ず。

前記三艦の遭難に對し、英國海軍省は説明して曰く、「アブーカー號の沈没は、海上警備
中常に見るの出來事にして、全く不測の災厄たり、但しホーグ、クレッシーの三艦に至り
ては、大に趣きを異にするものなくばならず、三艦がアブーカー號乗組員救助の爲、
現場に航行し、其儘進行を止めたるは、恰も敵潜航艇の爲に、好個の標的を與へたるもの
にして、終に撃沈の不幸を見るに至れるなり」と。此の事あるや、英國官憲は、大に鑑み
る所あり、航海中航行不能となる船舶を、その爲すが儘に放棄するを得るの法規を、水
雷敷設地にて損傷を受け、潜航艇の攻撃を受くるの虞ある船舶にも適用し得ることとした

エルベ河口は
獨軍港の所在
地にして、又
重要なる貿易
港たり。

りと云ふ。斯くの如くにして封鎖隊は、危険を冒して奮闘しつゝありしが、英國海相チャ
ーナル氏は、一新聞社員の問に應じ、英國海軍の現勢について語りて曰く、

我が海軍は、未だ獨逸海軍と決戦を爲すの機を得ざるも、現に我が海軍の支配せる制海
權は、恰も一大決勝戦を経たる後に於ける夫れと異なることなし、エルベ河口は綿密に
封鎖せられ、獨逸は貿易の絶滅と、供給の杜絶を見たるに關はず、英國の輸入及び工
業は、何等の支障なく繼續せらる、而して開戦當時一對二の優勢を以て戦争に従へる我
が海軍は、現在の艦船建造のプログラムに依るときは、一年外内に於てより以上の優勢
を占むるに至る可し云々。

海相の言の如く、英海軍の獨逸海軍に比して遙に優勝なるものあるは、獨逸海軍も亦よく
之を知れり、此に於てか飽迄も決戦を避けんとし、その大艦隊も嘗て本國軍港を出づること
となく、僅に潜航艇を放つて奇襲を試みるに過ぎず、爲に世人をして、遂に一大海戦の機
なからんことを思はしめき。

三艦遭難後久しからずして、英國戰艦ブルワークは、テームス河碇泊中、不明の原因
によりて爆沈の不幸に會せり、實に十一月二十五日なりきのタイムス電報は當時の光景を
報じて曰く、ブルワークの爆沈は不可思議千萬の事なり、當時轟然たる一大爆音を耳にせ

ブルワークは一九〇二年建造、一五〇〇噸、速力一八節の戦艦なり。

るもの、テームス河方面を望見せるに、ブルワーク艦上に炎焰の漲れるを見、僅に三分間にして艦影を没せりと、而してブルワークの沈没原因につきては、諸説紛々として、或は獨潜航艇の所爲なりと云ひ、或は獨探の陰謀に出づと爲し、殆んど歸着する所を知らざる如くなりしも、要するに火薬庫の爆發にあるは疑ひなきもの、如く、而してその爆發は、果して獨探の所爲に出づるや否やは不明なり。

第四節 北海の海戦

ヘルゴランド島沖の一戦に敗戦を餘儀なくせられたる獨逸海軍は、爾來深くこの軍港に潜みて、敢て出動することなく、僅を潜水艇、驅逐艦等を放ちて、英海軍の隙を窺ふに過ぎざりしが、十月十六日午後、その驅逐艦四隻は、突如として和蘭海岸に現はれたり、豫ねて嚴密なる封鎖地位にある英艦は、直ちに之を發見するや、三十節の高速力を有する輕巡洋艦アンダウンテッドは、逐驅艦ランス、レンノック、レジョン、ローヤル等を率ゐて急航之を掩撃し、遂に悉く之を撃沈し終れり。

アレダウンテッドはヘルゴランド島沖の海戦に偉功を奏せるアレツ式の姉妹艦なり。

爾來海上に於ける消息は、杳として聞くなりしが、十二月十六日、獨逸の有力なる巡艦洋より成る一隊は、英國海岸を襲ひて、二三の都市に損害を與へたり。前已に述ぶるが如く、獨逸の大艦隊も、之を英國艦隊に比すれば、その勢力到底相匹敵す可からずして、

正々堂々の陣を以て兩艦隊相對戦するが如きは望む可からざる所に屬し、獨の大艦隊は、本國軍港に蟄伏し、英國艦隊は、大勢力を以て獨逸海岸を嚴に封鎖し、その艦隊の逸出を防ぐと共に、一面中立國船舶の密輸入を取締りつゝありき、而も近世武器の進歩は、飛行機、飛行船、潜水艇の出現となり、爲に主力艦隊をして近く敵地を窺はしむ可からず、遠距離に在りて、遙に警戒するの外なからしむ、従つて被封锁艦隊も、幾分出動の自由を有するに至れり。此の次獨逸巡洋艦隊が英國海岸を襲ひたる如き即ちその一例にして、止むを得ざるの結果なり。

十二月十五日、獨逸の一巡洋艦隊は、恰も冬期の長夜を利し、本國根據地を發して、一舉三百哩を航過し、十六日黎明を以て英國海岸に接近せり、暗夜と濃霧とは、彼等の爲に最も有利にして、彼等は嚴重なる英封鎖艦隊の監視を被り、ハートルプール沖に達するを得ぬ、時に夜漸く明けんとし、東天紅を潮し來る、朝暉曉靄を破つて四顧始めて明かなるや、巨彈は先づハートルプールを見舞ひ、次いで彼等は、スカーバラ、ホイットビーの二港を脅威し、八十一名の死者二三百三十名の負傷者を生ぜしむ、英艦即ち警を聞いて急航し來るや、彼等は僅に數彈を應酬せるのみ、艦影は早くも濃霧の中に没して、逃走し了れり。

北海は緯度高きが故に、冬期の夜間は頗る長し。

獨艦の英海岸
砲撃は全く非
常の危険を冒
せるものなり
若し中途に發
見せらるれば
彼等は優勢な
る英艦隊の爲
に全滅の悲運
に會せざるを
得ざるなり。

獨艦隊の英海岸襲撃は、軍事上何等の價値を有するものに非ずと雖も、砲撃を被りたる地方人民の生命財産に多大の損害を與へ、且つ人心を擾亂せしめたる精神上の打撃は、決して輕々に看過す可からざるなり、獨逸亦之によりて何等軍事上の利を得んとするにあらず、彼等は何等かの方法によりて、英國に打撃を與へんとせるに過ぎず。當時英國海相チャーチル氏がスカーパー市長に懇篤なる慰問状を送りて、「獨逸海軍の我が大英國海上の威力を恐るゝの極、堂々たる主力の決戦は、到底勝算なきを覺りて、徒らに熱狂的嫌惡の念を懷き、大速度巡洋艦の威力を以て、老若男女、境遇の如何を問はず、なる可く多くの英人を殺害し、一時的快樂を貪らんが爲め、斯くの如き非常の危険を冒したるものに過ぎず」と云へるとの、實にその肯綮に當れるを信ず。

強大なる英國海軍も、本國港内に蟄伏せる獨艦は、之を如何ともする能はず、特に沈没水雷の危険と、潜水艇の襲撃とは、敵國海岸に接近して、之に巨弾を見舞ふを許さざるなり、而も半獸的獨人は、何等防備なき港灣を砲撃し、武装なき市民を殺傷して快哉を叫ばんとす、英艦隊即ち彼等に一矢を酬して之を威嚇せんとし、獨艦の英海岸を砲撃せる後十日、十二月二十五日を以て、その有力なる艦隊は、數臺の飛行機を携へ、クックスハーフエン沖に集會せる獨艦隊を襲撃せり。所定の地に達するや、英艦は七臺の水上飛行機を放

ち、快速なる輕巡洋艦及び驅逐艦の掩護の下に、クックスハーフエン沖シリング水道に碇泊せる獨艦隊を襲はしめ、同時に潜水艇の一隊亦之に向つて蔦進せり、獨艦隊亦二隻のツエツペリン飛行船及び四臺の飛行機をして之に向はしめ、潜水艇の一隊は、英の掩護艦隊を襲はんとす、此に前代未聞の新戦闘は開始せられ、空中、水面、水中の三方に分れて相闘ふに至りしが、アンダウンテッド及びアレツサの二艦は、その輕快なる速力を利して、奮戦最も努め、獨潜航艇を撃退し、その巨弾はツエツペリン飛行船をして敗走せしむ、斯くして英艦隊は、敵前に暴露すること三時間、その飛行機は敵艦隊上に飛翔して爆弾を投下し、意の如くに之を脅威して、何等の損害を被ることなく根據地に歸れり。

斯くの如くにして、北海に於ては、殆んど海戦を見ることなく、僅に驅逐艦、潜航艇の活動を見るに過ぎざりしが、一月二十四日、始めて有力なる艦隊の間に交戦を見るに至りぬ、先に英國海岸砲撃に成功せる獨逸艦隊は、再び之を試みんとして、一月二十三日夜を以て根據地を出て、英海岸に向ひて進航せり、時に獨逸艦隊の主力たるもの、巡洋艦デルフリンゲル、サイドリツツ及びモルトケにして、之に装甲巡洋艦ブリユッヘル以下四隻の輕巡洋艦を加へ、別に約二十隻の驅逐艦を従へたり、彼等は夜暗に乗じて北海を航過し、將に英海岸に迫らんとす。

ヘルゴランド
島は獨逸潜水艇の根據地にして、附近一帶沈設水雷の防備あり。

彼等が、雄姿堂々北海を航進しつゝあるのとき、哨戒中の英國水雷戦隊は、早くも之を發見して、急を本隊に報ず、時に此の附近にありたるもの、先にヘルゴランド島沖の海戦に偉功を奏せるピエツチー少將の率ゐる第一巡洋戦艦隊にして、水雷戦隊の無線電信を受くるや、急に出動し來れり、獨逸隊即ちその敵し難きを知り、急に舵を轉じて遁走せんとす、ピエツチー少將即ち全速力を令し、二十八節の快速力を以て急追するや、三時間の後早くも敵艦隊に接觸するを得、午前九時彼我兩艦隊は、その砲煩を開けり、然れども、當時英艦隊にありて、よく二十八節の大速力を出だし得るもの、ライオン、タイガア、ブリンセスローナルの三隻を算するのみ、即ち開戦の當初に於ては、英艦隊の勢力は、反つて獨逸艦隊に若かざりしなり。斯くて兩艦隊は、互に巨弾を送りて奮闘せしが、英艦隊の漸く勢力を加ふるに反し、獨逸のブリユツヘルは、舊式艦なるが爲、遂に戦列外に出でざる可からざるに至り、獨逸隊漸く振はず、ブリユツヘルを放棄して敗走するに至れり、英艦隊は追撃に移り、敵の主力艦に大損傷を與へたるも、漸くにしてヘルゴランド島に近づき、敵沈設水雷の危険區域に入ると共に、潜水艇の出動を慮りて、追撃を中止し、根據地に引き上げぬ、此の役英國側にありては、旗艦ライオンは機關部に敵弾を受け、進退の自由を失ふに至りたるも、僚艦の曳く所となりて無事引上げるを得、其他驅逐艦一隻の損傷を被

タイガアは開戦後に竣工せる最新艦なり。

れるものあるのみ、之に反し獨逸側にありては、ブリユツヘルは撃沈せられ、其他二隻の巡洋戦艦は大破し、驅逐艦中大損害を受けたるもの亦少からず、而して戦闘に参加せる英艦の總數は、巡洋戦艦五隻、輕巡洋艦五隻、驅逐艦二十六隻にして、兩者主力の比較を示せば左の如し。

▲英國艦隊
司令官ダヴィッド、ピエツチー少將

ライオン	巡洋戦艦	二六、三五〇噸	三十一節七八
タイガア	同	二八、〇〇〇	三十節(計畫)
ブリンセスローナル	同	二六、三五〇	三十二節七
ニウジーランド	同	一八、八〇〇	二十七節六
インドミタブル	同	一七、二五〇	二十八節七
▲獨逸艦隊 司令官不詳			
デルフリンゲル	巡洋戦艦	二八、〇〇〇	三十節(計畫)
サイドリツツ	同	二四、一〇〇	二十九節
モルトケ	同	二二、六四〇	二十八節五七
ブリユツヘル	装甲巡洋艦	一五、五五〇	三十五節八八

北海の一戦は、英海軍の爲に萬丈の氣を吐くものにして、狡猾なる獨逸艦隊も、此の敗に氣阻みたるか、爾來又出でて英海岸を窺ふことなく、例によりて潜水艇をして活動せしむるのみなりき。

第十章 漂浪の獨艦

英獨國交斷絶するや、北海は早くも英海軍の掌裡に歸して、一隻の獨艦も之を通航するを得ず、時に獨逸軍艦にして本國を離れ、殖民地の警備其他に任せるもの亦少からざりしが、之等の諸艦は、その歸路を絶たれたるを以て、何れも本國艦隊に合すること能はず、止むなく東西に漂浪して、或は敵國貿易の妨礙に當り、或は敵地を砲撃しつゝありき、その地中海にありしは、かのゲーベン、プレスラウ及びパンターの三艦にして、之等三艦については、吾人已にその運命を説けり、即ちパンターは撃沈せられ、ゲーベン、プレスラウは、土耳其に賣却せられたるも、東洋方面其他にありし獨艦亦少からずして、その自暴自棄なる活動は、獨り交戦列國のみならず、中立國船舶の爲にも大なる脅威を感ぜしむるところあり、その撃滅の爲に、英國海軍を始め、佛國及び吾が海軍亦多大の勞苦を嘗めしめられぬ。

第一節 エムデンの最期

漂浪獨艦中邦人の耳に最もよく熟せるものはエムデンなり、彼は獨りその僚艦と離れ、印度洋上に出没して、盛んに各國商船を撃沈し、爲に歐亞の貿易は一時杜絶せられんとするの概あり、英國艦隊を始め、佛國及び帝國艦隊亦その踪跡を求めて之を撃滅せんとしたるも、彼れ亦巧みにその踪跡を晦まし、神出鬼沈、容易にその踪跡を得ず、就中英國商船の多數は、その撃滅する所となりしを以て、英國の上下は著るしく不安の念を抱き、爲に海軍に對して非難の聲を擧ぐるものあるに至れり。

由來大海に於ける索敵行動は、最も困難なる事業にして、特にエムデンの如き、僅に一艦のみを以て出沒するもの、如きは、一層の困難あるを免れず、英海軍は勿論、與國の海軍は、彼を獲んとして努力する所ありしも、容易にその目的を達せざりしが、時なる哉、彼は、自ら死地に入りて、遂にその最期を遂ぐるに至れり。十一月九日、南洋英領コ、ス島沖に、エムデンはその姿を現はしぬ、蓋しコ、ス島は、英海軍の根據地にして、此に無線電信所を設けあり、又海底電線の接續地たり、エムデン即ち之等の通信機關を破壊せんとし、同日を以て此に襲來し、陸戰隊を上陸せしめて、兇暴を行はんとせしが、大膽にして機敏なる無線電信手は、エムデンの出現を知ると同時に、直ちに無線電信によりて急

エムデン出現の報は、忽ちにして印度洋上の航海を絶ち、爲に歐亞の交通を阻碍すること甚だしきものありき。

此の時我が某艦は二百哩の距離にありてエムデンを案めつゝありたりと云ふ。

を報ず、時に濠洲海軍に屬する巡洋艦シドニーは、その附近にありて此の報を得、急航して至る、エムデンその発見せられたるを知るや、上陸せる陸戦隊員を捨て、急遽遁竄せんとせしも、快速なるシドニーの追撃に敵する能はず、遂に海岸淺瀬に擱坐して破壊し、茲に明巢狙のエムデンと綽名せられたるエムデンも、無慘なる最期を遂ぐるに至れり。之と殆んど時を同じうして、獨艦ケーニヒベルヒ亦英艦の爲に、阿弗利加の某河に封鎖せらるゝに至りぬ、ケーニヒベルヒ亦阿弗利加近海にありて、貿易破壊に従ひつゝあり、英艦の追躡する所となりつゝありしが、此の時漸く発見せられ、猛烈なる追撃を受くるに及び、その淺吃水を利用して河流を遡りたるを以て、英艦止むなくその河口を塞ぎ、彼を出づるに途なからしむるに至れり。

エムデンの破壊、ケーニヒベルヒの封鎖は、友邦及び中立國をして驚喜を禁ぜざらしめき、就中英國民は始めて愁眉を開くを得、歐亞の交通此に全く安全なるを得たり、當時英國政府は、エムデン最期の顛末を發表して曰く、「獨艦エムデンに對する搜索運動は、同艦出沒の海上範圍甚だ廣濶なるが爲、頗る困難を感じ、英國海軍の外、日佛露海軍を合せ、四ヶ國の軍艦之が搜索に参加したり、英國の参加軍艦は、濠洲海軍に屬するメルボルン及びシドニーの二艦なりしが、恰も宜し、エムデンは十一月九日コ、ス群島中のキーリ

ング島に到着し、無線電信及び海底線を破壊する目的を以て、陸戦隊を上陸せしめたるが、その附近にありて急報に接せるシドニーは、直ちに現場に急航し、エムデンに戦ひを挑みて、激烈なる戦鬪を交へ、敵は遂に淺瀬に擱坐して火災を起せり、我が軍の損害は、死者三、負傷者五なるが、敵の死傷は大なるが如し、ケーニヒベルヒ及びエムデンに最期の宣告を與へたる以上、最早智利方面に遊弋せる軍艦の外、印度洋及び太平洋上には敵の隻影なく、海上は漸く安全となれり」と。

第二節 智利沖の海戦

エムデン及びケーニヒベルヒは右の如くにして遂に最後の運命に伏せり、其の他尙獨艦の漂浪せるもの、シャルンホルスト、グナイゼナウを始め、ライプチツヒ、ニウレンベルヒ、ドレスデン、ブレーメン、カルスルーへの七艦を算す、之等は多く獨逸太平洋艦隊に屬し、伯爵フオン、スペーの率ゐる所なりしが、歐洲開戦前二ヶ月、即ち六月一日を以て根據地たる膠州灣を出で、我が長崎に寄泊せる後、六月七日を以て出帆し、南洋方面に向ひたるが、爾後その何れに赴きしや、暫らく消息を得ざりき、然るに歐洲の平和破るゝや、トルツプ島に於て戦備を整へ、九月初旬一旦グアム島附近まで北上し、此にニウレンベルヒを放ちて布哇方面に赴かしめ、形勢を觀察せしむるところあり、主力は南下して、

シャルンホルストは獨逸東洋艦隊の旗艦にして、グナイゼナウはその姉妹艦なり

我が商船にし
て之等の艦隊
に脅威せられ
たるもの少か
らず。

九月二十三日佛領タヒチ島に現はれ、此處に碇泊せし佛砲艦ゼレエを撃沈せる後、ニウレ
ンベルヒを合せてイースター島に至り、炭水を補充し、陣容を整へ、東航して南米沿岸に
現はれぬ、時に十月下旬なりき、而して此の間世界各地に散在せる獨探等は、種々の方法
によりて彼等に必要なる通信を爲せるのみならず、その商船は、炭水供給の任に當りつゝ、
ありき。

南米に於ける獨艦は、エムデンの如く、重要な航路に現はれざりしを以て、その兇暴
の程度亦彼が如くならざりしと雖も、彼等にして公海に徘徊せんか、爲に通商至上大の脅
威を受くるものあるを免れず、英海軍即ち彼等を撃滅せんとし、七十隻の軍艦を派してそ
の踪跡を索めしめつゝありしが、十一月一日、その一隊は、彼等と智利コロネル沖に會す
るを得、此に一大海戦は開かるゝに至れり。

十一月一日英國海軍少將クラドックの率ゐるグッドホープ、モンマス、グラスゴー以下
の巡洋艦隊は、南米智利國コロネル沖にありて、獨艦隊を搜索しつゝありしが、午後四時
に至り、敵艦シャルンホルスト以下の出現を見、五時半に至りて、十二哩の近距離に敵艦
隊を發見せり、時に英國戰艦カノバスは、クラドック艦隊に合す可きの命を受けて、南方
二百哩の地にあり、その來着を待たんか、英艦隊は優勢を以て敵に對するを得るも、爲に

敵を逸するの恐あり、クラドック少將即ち勇を鼓して進撃を令し、此に猛烈なる海戦を
見るに至りしが、優勢なる獨艦の砲火は、遂に英艦の敵にあらず、グッドホープ及びモン
マスの二艦は火災を起し、グッドホープは遂に爆發して沈没するに至り、モンマス亦夜陰
に乗じて戦列を離れ、附近海岸に避けんとしたるも、浸水甚だしくして沈没を免れざりき、
グラスゴーは、敵のライプツヒ及びドレスデンの二艦に對し、勇戦最も努めたるも、衆
寡敵し難く、遂に退却の止むなきに至りて、此の海戦は全く獨艦隊の捷に歸せり。

大捷を博せる獨逸艦隊は、意氣揚々としてヴァルパライソ港に入り、此にその戦捷を報
告せる後、退却せる英艦グラスゴーを索めて之を撃破すると共に、カノバス號を撃破せん
として、衝天の勢ひを以て南方に航進せり、而も遂にグラスゴーを得る能はず、カノバス
のフォークランド島に在るを諜知するや、即ち一舉之を撃滅すると共に、フォークランド
島を奪ひ、之を根據地として、南米沿岸に威を揮はんとし、ケーブホルンを越えて大西洋
に出て、フォークランドに向へり。

フォークランド島は、南緯五十一度乃至五十三度、西經五十七度乃至六十二度の間に基
布せる群島にして、マゼラン海峡の南東約百二十里に位置し、東西の二大島及び約一百の
小島より成る、その人口は僅に三千三百内外に過ぎずと雖も、羊毛の産地として、將た捕

ヴァルパライ
ソは智利國の
港なり。

鯨業者の根據地として名あり、島内幾多の良港灣を有し、特に東島の東側北岸にあるポルト、スタンレーは、最も良港の名ありて、人口亦約八百を有す、本島は又戰略上の要地にして、之を掌握するものは、よく南米大陸の南方沿岸一帯の海上權を占むるを得可し、此を以て從來英、佛、西及び亞爾然丁の諸國の間に爭奪せられたるも、一千八百三十三年以來確實に英國の手中に落ち、英國は此に海軍根據地を置けり。

第三節 漂浪獨艦

新捷の餘威を負へる獨逸のスペイン艦隊は、一舉してフオーランド島の要地を略取せんとし、威風堂々ポルト、スタンレー沖に現はれたり、時に十二月八日拂曉なりき。之より先き、コロネル沖海戰の報四方に致さるゝや、スペイン艦隊を擊滅すべく有力なる艦隊は此の方面に送られ、切りにその踪跡を索めつゝありしが、未だ會することを得ず、而も種々の情勢によりて、彼等の必ずフオーランド島を窺ふ可きを知り、スタデイ提督は麾下の巡洋戰隊を率ゐて七日ポルト、スタンレーに入れり、而してインヴェインシブル、インフレキシブル以下最新の巡洋戰艦は、深く港内に入りて影を潜め、一面炭水を滿載して、徐ろに機のを待ちつゝ、老戰艦カノバス以下劣勢の巡洋艦をして港外に在らしめ、以てスペイン艦隊を誘はんとせり。

威力強大なる
巡洋戰艦の存
在を知らしむ
れば獨艦を逸
走せしむるの
恐れあり。

飽くまで敵を
引付けて逸走
の機會なから
しむる英艦の
沈着なる態度
見る可きなり。

八日拂曉、シャルンホルスト以下のスペイン艦隊は、威風堂々としてポルト、スタンレー沖に臨めり、彼等は英艦隊が如何にして彼等を待つかを知らざるなり、劣勢なる艦隊の港外に在るを見るや、我が事成れりとなして、猛然として砲火を送りぬ、英艦亦何ぞ黙せんや、直ちに砲門を開いて之に應じ、砲戰少時、忽ちにして見る港口を壓して二大巡洋戰艦の雄姿堂々として現はれ來れるを。スペイン提督の驚愕は夫れ如何なりしぞ、彼は直ちに英艦隊の謀計に陥れるを知りぬ、即ち全速力を以て退却を始むると共に、各艦隨意の行動を執る可きを令し、急遽遁走せんと試みたるも、快速なる巡洋戰艦は、何ぞ之を許さんや、急追又急追、十二時の巨彈は、シャルンホルスト及びグナイゼナウの主力艦に蟬集して、艦首より艦尾に至る迄、殆んど完膚なきに至れり、勿論彼等亦奮戰最も努めたるも、その八・二吋砲彈は、到底巡洋戰艦の厚き装甲を貫く能はず、一彈僅にインヴェインシブルの士官公室を破りたるも、將校は凡て戰鬪配置に就きありて、一人の死傷をも出たさしめざりきと。

已にしてシャルンホルスト先づ火災に罹り、次いでグナイゼナウ亦火災に陥り、砲員は逐次死傷して砲亦漸次に破壊せられ、到底抵抗の能力なきに至るや、カノバスはシャルンホルストに信號して、發砲を中止し、その乗員を救助せんことを勸告すると共に、端艇を

スベイ提督の
勇壯なる死は
流石に獨逸の
軍國主義を偲
ばしむ。

降して赴き援けんとせしも、スベイ中將は、最後の齊射を以て之に答へ、遂に艦と共に海底に沈みしが、その二子亦之と死を共にせりと。

シャルンホルストの沈没後、グナイゼナウは尙勇戦を續け、英艦射手の眼を眩せんが爲め、全速力を以て縦横に馳突しつゝありしが、熟練なる英艦は、毫も屈することなく、終始適當の距離に艦位を保ち、最も沈着に最も有効にその巨弾を送りしを以て、二時間の後グナイゼナウは、遂にその舵機を損じ、進退の自由を失ふに至り、艦亦大破して、主砲は沈黙せしめらるゝに至れり、英艦即ち信號して曰く、艦を去らんとする者は救助を惜まざと、而も勇敢なる乗組員は之に答へず、從容として艦と共に沈みしが、英艦端艇を派してその一部を救ひ、艦長亦その中にあり。

其他ライプチヒは、英艦グラスゴーと對戦せしが、彼我の砲力大差なきを以て、グラスゴーは比較的多くの損害を被りしに、その六吋砲の火力は、漸次敵の四・一時砲を壓し、二時間の後、ライプチヒは全く沈黙せしめらるゝに至り、白旗を掲げて降を乞へり、グラスゴー即ち端艇を卸し、之を收めんとするに際し、ライプチヒ舷側の一砲門は、轟然たる響と共に、一弾をグラスゴーに送りたるを以て、グラスゴー復砲門を開き、遂に之を撃沈し終れり、其他ニウレンベルヒ、ドレスデンの二隻は、戦場を逃れて、遁避せんとしたる

も、ライプチヒの沈没後幾許ならずして、ニウレンベルヒは、英艦ケントの追及する所となり、之れ亦僚艦と運命を共にせり、たゞドレスデンは、二十四節の高速力を有するを以て、漸くにして虎口を脱し、十三日ブント、アレナス港に入りて載炭せんとしたるも、前回入港後未だ三ヶ月を経過せざるを以て、中立條規により、石炭の供給を拒まれ、止むなく出港せしが、中途自國の運炭船に會し、之より石炭を得て、遂に踪跡を晦ませり、之等軍艦の外、獨艦隊は、二隻の給炭船を伴ひつゝありしが、之亦降伏を拒みて、他と運命を共にし、此に久しく世界通商の脅威たりし獨逸漂浪艦は、殆んど殲滅せられ、その餘喘を保てるものも、深く潜みて又兇暴を恣にすることなきに到れり。

斯くの如くにして、フォークランドの海戦は、全然英軍の捷利に歸し、自ら殆んど何等の損害を被ることなくして、よく敵を全滅したるもの、實にその努級艦の效に歸せざる可からざるなり、尙當時兩者の勢力を表示すれば左の如し。

▲英國艦隊

司令官 サア、ドウトン、スタデイ中將

インヴァインシブル

巡洋戰艦

一七、二五〇噸

二十八節六

インフレキシブル

同

同

二十八節四

カノバス

戰艦

一一、九五〇

十八節六

カアナアボン	装甲巡洋艦	一〇、八五〇	二十三節三
ケント	同	九、八〇〇	二十四節一
コオンウオル	同	同	二十四節
カムバアランド	同	同	二十四節五
グラスゴー	輕巡洋艦	四、八二〇	二十六節七
プリストル	同	同	二十六節八四
▲獨逸艦隊			
司令官	フオン、スベイ中將		
シヤルンホルスト	装甲巡洋艦	一一、四二〇噸	二十二節七一
グナイゼナウ	同	同	二十三節八
ドレスデン	輕巡洋艦	三、五四四	二十四節五
ニウレンベルヒ	同	三、三五〇	二十三節七
ライプチヒ	同	三、二〇〇	二十三節六

第八編 日獨開戦

第一章 日本の主張

英國已に獨と國交を絶ち、將に干戈相見えんとす、我れや英と同盟の誼を有するもの、何ぞ之を傍觀す可けんや、勿論は英同盟は、印度以東の事局に對し、之を適應すべきはその明文に示せる所、歐洲事變に際して我の之に干渉するを要せざるは勿論なるも、英獨共に領土を東洋に有し、特に獨艦清國山東省膠州灣にあり、此を策源地として、敵國商業を脅威せんとし、延いて東洋の和平亦破れんとす、東洋全局の平和保全を以て任とする我れ何ぞ黙するを得ん、即ち先づ好意を以て獨政府に勸告せる所ありしも、彼の暴慢遂に應ぜず、日獨國交茲に破る。請ふ先づその曲折を見ん。

第一節 帝國政府の勸告

西歐の風雲漸く急ならんとするものあるや、我が國民亦多大の興味を以てその成果を待ちつゝありき、然るに七月末に至りて、事件は急轉直下し來り、遂に露獨の開戦を傳へ、此間英國の態度は最も注意を惹けりしが、八月四日に至りて、英獨宣戦の報を得るに至りて、我が國の立場の如何なる可きかは、特に重大なる注意を惹くに至れり、政府即ちその

我は最も平和を愛好す、故を以て先づ好意の勸告を爲せるなり。

最後通牒は翌十六日を以て外務省より公表せらる。

執る可きの態度を聲明して曰く、「日本帝國政府は、萬一英國政府にして戦争の渦中に投じ、日英協約の目的或は危殆に瀕する場合に於ては、必要なる措置を執る可きことを聲明す」と。次いで八月六日、英國政府より日英同盟に關し、重要なる飛電午後五時を以て帝國政府に著するあり、各大臣は深夜早稻田なる首相邸に會して密議を凝らす、蓋し英國よりの照會に關するや勿論なり。七日又臨時内閣會議は開かれ、その決議を齎らして、加藤外相は日光田母澤の御用邸に伺候し、折柄御避暑中の陛下に覆奏する所あり、歸來元老大臣會議は開かれ、風雲已に東洋の地を蔽ふの概ありき。

元老大臣會議の結果は、直ちに何等かの行動となりて現はる可きを思へる國民は、天の一方を望んで、事態の變轉を注視せしが、日を経て遂にその事なし、國論は政府の軟弱を責むるありしが、蓋し英國との間、尙交渉を要す可き事項ありたるなり、十三日、我が駐英大使は、英外相グラー氏と會して、我が帝國の態度を明かにするあり、交渉愈々決す、即ち十四日元老大臣會議は再び開かれ、その結果聖上御還幸の奏請となり、十五日、天皇陛下には皇后陛下御同列にて還幸あらせられ、直ちに元老大臣以下、島村軍令部長、長谷川參謀總長等を御前に召され、帝國政府の行動に關する最後の決定を與へ給ふ、政府即ち同日を以て獨逸政府に左の通牒を發す。

帝國政府は現下の狀勢に於て極東の和平を紊亂すべき源泉を除去し日英同盟協約の豫期せる全般の利益を防護するの措置を講ずるは該協約の目的とする東亞の平和を永遠に確保するが爲に極めて緊要の事たるを思ひ茲に誠意を以て獨逸帝國政府に勸告するに同政府に於て左記二項を實行せられむことを以てす。

第一 日本及び支那海洋方面より獨逸艦艇の即時に退去すること、退去すること能はざるものは直にその武裝を解除すること。

第二 獨逸帝國政府は膠州灣租借地全部を支那國に還付するの目的を以て一千九百十四年九月十五日を限り無償無條件にて日本帝國官憲に交付すること。

日本帝國政府に於て叙上の勸告に對し一千九百十四年八月二十三日正午迄に無條件にて應諾の旨獨逸帝國政府よりの回答を受領せざるに於ては帝國政府は其の必要と認むる行動を執る可きことを聲明す。

斯くて此の通牒は、種々の方法によりて獨逸政府に送達せられたるが、帝國政府の盡力により、比較的短時間を以て伯林政府の受領する所となりたりと云ふ、而も暴慢なるカイゼルの政府は、我が誠意を以てせる勸告に對し、遂に何等の回答を與へざるのみか、我が在留民に對して幾多の不法を加へたりき。

回答期限一週
間とせるは、
當時獨逸は四
圍皆敵の中に
ありて通信の
自由を缺きた
るに依る。

第二節 首相外相の宣明

帝國政府が今次の戦亂に對し如何なる態度を執らんとするかは、前記通牒によりて已に明かなり、而も該通牒の公表せらるゝに際し、我が大隈首相及び加藤外相は首相官邸に新聞通信社代表者を招待し、帝國政府が獨逸政府に對して最後通牒を送りたる顛末に關し説明する所あり、即ち左にその梗概を掲げん。

▲大隈首相の演説

歐洲戦亂に關聯する日本の態度につき、新聞紙の報道往々にして誤謬なきにあらざりしも、之れ要するに熱烈なる愛國心の發動に基づけるものにして、深く多とする所なり、抑も今回の事件に關し、英國より初めて交渉を受けたるは、去る七日にして、爾來種々折衝を重ね、十五日に至り初めて東洋の平和の爲に、日英協同の動作を以て、危害ある敵の勢力を撃破することに決したり、此は云ふ迄もなく、日本自ら求めて此に至りたるにあらずして、全く日英同盟規約に基づく日本の任務に外ならず、今や我國は、大なる敵國を有するに至り、國家は重大なる時局に處す、切に諸君が慎重なる態度を以て、國民を指導せんことを望まざるを得ず、十五日御裁可を経て外交、上所謂最後通牒を獨逸に送りたり、獨逸にして我が要求に應ずれば可、若し應ぜざるに於ては、戦ふの外なき

苟くも一國和
戦を決す、此
の間複雑なる
外交關係の存
するや勿論な
りとす。

が、世界の注意は、日本の態度に集中せり、日露戦争の相手は、露國と云ふ大敵なりしに相違なかりしも、單獨なる露國を相手にしたるに過ぎず、今や世界の運命を支配すべき大亂に際し、日本が之に参加するは、即ち日本が世界的に働くものたり、而して今回は勿論陸海軍の働きもある可けれども、恐らく旅順、奉天、日本海に於けるが如き大戦は無かる可く、無論大軍隊も動かざる可く、大部分は外交の働きに依る可きものにして、今日迄の経過を以てするも、全部を披露すれば、外交當局者の苦心慘憺たるものあり、又随分面白けれど、全部披露するの時機に達せず、而も今後は益々外交關係は大切となる可し云々。

▲加藤外相の演説

今回の動亂に際し、日本の態度は、各國より注目せられたるが、我國の態度は、曩に諸君を煩はして、新聞紙上に發表したる如くにして、英國之が渦中に投じ、且つ禍亂東洋に及ぶにあらざる限り、我國は無關係たるなり、然るに其の後に於て英國も戦争に参加し、而して東洋に於ては、砲火相見ゆると云ふが如きことなしと雖も、相互に商船を拿捕し、已に戦争状態を成せり、七日に至り、英國政府より我國に對し、東洋方面に於ける英國貿易威嚇せらるゝが故に、之が救済につき、適當の助力を借ることを得ば幸福な

四日に發表せ
るものみ指せ
るなり。

りとの要求ありたり、之に應ずるは、日本の義務にして、且つ我國の爲にも利益なるを以て、爾來我國にては、余と英國大使との間に、英國に於ては、同國外相と井上大使との間に議を重ねる所ありしも、通信機關故障等の理由により、案外手間取りたるが、結局日英同盟規約の豫期せる、利益保護の方法を講ぜざる可からずとの、兩國政府の意見の合致を見るに至りたり、されば獨逸に對し、直ちに戦ひを宣し、戦鬪行爲に移る可き筈なれども、日英兩國政府の所期は、東洋の平和にあり、平和の手段を以て目的を達し得れば、之に勝る事なきを以て、成功甚だ覺束なきにも拘はらず、獨逸に對して要求を爲すに決し、十五日御裁可を得、同日直ちに一方船越代理大使をして獨逸政府に、他方當地に於ても、獨逸大使レツクス伯に對して之を交附したるが、前後返答期間九日を附したり、外交上の慣例に依れば、最後通牒なるものは、普通二十四時間若しくは四十八時間を限れるに、今回九日間と爲したるは、通信機關不備の爲、自然遅延せんことを惧れたるに依る、之に對して、獨逸が如何なる回答を爲すかは、全く豫期する能はず、各人見る所に任すの外なきが、我國は戦はずして目的を達するを得ば、幸ひ之より大なるはなし、若し期限内に獨逸が回答を爲さるか、若しくはその回答不満足にして、無條件を以て我が要求の全部を容れざるに於ては、不祥ながら我國は、直ちに戦鬪行爲に移りて、

東洋全局の平和、之れ帝國が終始論らざるの信條ならずや。

日英同盟の目的を遂行せざる可からず、以上大體の經過にして、其の詳細は未だ之を公表する能はざるを遺憾とす云々。

然り、我が主張は、加藤外務大臣の演説せる如く、徹頭徹尾東洋の平和を確保せんとするにあり、日英同盟に定めたる目的を遂行するにあり、公明正大、俯仰天地に恥づるあるなし、之を、自己野望の爲に、徒らに他の成功を妨げんとするものに比するに、月豎宵壤の差も雷ならざるなり。

第三節 宣戦の布告

最後通牒致されて茲に九日、一千九百十四年八月二十三日の午砲は、帝都宮城の一角に鳴り渡れども、獨逸政府の通牒は遂に來らざるなり、即ち宣戦の詔勅は發せられ、日獨の國交此に絶ゆ、大詔全文左の如し。

詔勅

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス
朕茲ニ獨逸國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜シク力ヲ極メテ戰鬪ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜シク職務ニ率循シテ軍國ノ目的ヲ達スルニ勗ムヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ必ス遺算ナカラムコトヲ期セヨ

朕ハ深ク現時歐洲戰亂ノ殃禍ヲ憂ヒ專ラ局外中立ヲ恪守シ以テ東洋ノ平和ヲ保持スルヲ念トセリ此ノ時ニ方リ獨逸國ノ行動ハ遂ニ朕ノ同盟國タル大不列顛國ヲシテ戰端ヲ開クノ已ムナキニ至ラシメ其ノ租借地タル膠州灣ニ於テモ亦日夜戰備ヲ修メ其艦艇ヲ東亞ノ海洋ニ出沒シテ帝國及與國ノ通商貿易爲ニ威壓ヲ受ケ極東ノ平和ハ正ニ危殆ニ瀕セリ是ニ於テ朕ノ政府ト大不列顛國皇帝陛下ノ政府トハ相互隔意ナキ協議ヲ遂テ兩國政府ハ同盟協約ノ豫期セル全般ノ利益ヲ防護スルカ爲ニ必要ナル措置ヲ執ルニ一致シタリ朕ハ此ノ目的ヲ達セムトスルニ當リ尙努メテ平和ノ手段ヲ悉サムコトヲ欲シ先ツ朕ノ政府ヲシテ誠意ヲ以テ獨逸帝國政府ニ勸告スル所アラシメタリ然レトモ所定ノ期日ニ及フモ朕ノ政府ハ終ニ其ノ應諾ノ回牒ヲ得ルニ至ラス

朕皇祚ヲ踐テ未タ幾クナラス且今尙皇妣ノ喪ニ居レリ恒ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ而カモ竟ニ戰ヲ宣スルノ已ムヲ得サルニ至ル朕深ク之ヲ憾トス

朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ宣揚セムコトヲ期ス

御名 御璽

大正三年八月二十三日

各 大 臣 副 署

黃禍説を捻出して我が發展を呪はんとしたるもの、實に彼れカイセルに非ずや。

大詔一下、暗雲急ち晴るゝの概あり、國民は皆腕を叩いて踴躍しぬ。然り而して我が開戦の目的は、大詔炳として示し給ふ如く、一に東洋全局の平和を確保せんとするにあり、その此に至りたるもの、日英同盟協約の明文に基づくと雖も、彼れや實に、日清和約に謂なきの干渉を敢てして、我に恨を結べるもの、此の機に乗じて曩日の恨に酬いんとする、之に將た國民の至情ならずんばあらず。殊に況んや、その露骨なる侵略政策と、傍若無人なる態度とが、常に我が國民の不快を買へるをや、假令遼東遼東附の事なしとするも、一び之を膺懲せんと欲する、亦自然の數のみ。

我が最後通牒に附せる期限に至りて、獨逸遂に何等の回答を致さず、即ち同時に我は任意行動を採ることとなり、獨逸に對しては、別に何等の通牒をなすことなくして、茲に兩國の國交は漸絶し、戰時状態に入ることとなりしも、其他の締盟各國に對しては、海牙條約第一條の定むるところにより、二十三日午後三時を以て、東京駐在の大公使に對し、簡單なる公文書を以て右の旨を通告すると共に、各國駐在の帝國大公使をして、夫々駐劄國政府に通告せしむる所ありき。

埃洪國は、獨逸の同盟國として、歐洲に於ては、現に共同作戰の事に當りつゝありと雖も、我が獨逸に宣戰せるは、日英同盟協約の明文に基づき、東洋に於ける兩國の利益を保

埃國との開戦は、事實に於て之を見る可からず、之れ開戦の布告なき所以。

護せんとするに出て、東洋に寸土をも有せず、又何等東洋の平和に關係なき埃國に對し、之が適用を見るの要なきを以て、依然親交國を以て之を待ち、敢て他意なかりしにも拘はらず、八月二十七日午後二時、東京駐在埃國大使は、突如公文を我が外務省に送りて曰く、「埃國政府は、日本帝國政府が埃國の同盟國たる獨逸に對する行動に顧み、日本駐在埃國大使に對し、日本帝國政府に旅券を請求して、速かに歸國す可きことを命じ來れり」と、彼れ已に國交斷絶を通ず、即ち我が外務省は、午後吉田秘書官をして旅券を埃國大使館に送付せしむると共に、在埃國佐藤大使に對し、即時埃國政府より旅券を受け差當り伊太利國に引揚ぐ可きの命を下せり。斯くの如くにして日埃の國交は斷絶するの不祥を見たるも、兩國共に宣戰することなく、以て今に至れり、恐らくは最後迄之を見ることなからん。

之より先、埃國巡洋艦カイザリン、エリザベスの膠州灣内に在るあり、優勢なる英佛東洋艦隊は、之が出航を許さざらんとす。然り而して日獨關係の切迫は、遂に日軍の膠州灣攻撃を見んとす、此の時に當り、一巡洋艦の爲に日埃間に紛雜なる問題を生ずるは、最も忌む可しとなし、日獨交渉の漸く危殆ならんとするに當り、埃國政府は、該艦の武装を釋き、乗組員を撤して國際紛議を生ぜざらしめんとし、駐日埃國大使旨を我が政府に致

して、一部乗組員は退艦して已に天津に至れり、埃國の意が邦邊に存するか以て見る可きなり、而も此に至りて突如豹變すること此の如し、之れ豈に獨逸政府の意にあらざるなきを得んや。而して之と同時にカイザリン、エリザベスの乗組員等は再び膠州灣に歸り、武装亦復せられて、後遂に我が滅ぼす所となれり。

第二章 獨逸の東洋政策

先に已に述べたるが如く、獨逸の侵略主義、傍若無人なる態度は、實に我が國民のみならず、世界の共に惡める所にして、今次の戦亂に當りても、一埃國を除いては、世界を擧げてその敵たるが如きの觀ある亦偶然にあらず、今次の戦亂が、一面より之を見れば、獨逸の軍國主義を破砕す可き聯合各國の努力と云はるゝ如く、その軍國主義は、最も露骨に、又最も大膽にして、之に觸るゝもの皆脅威を感ぜずんばあらず、今や我が國が、正義の戈を執りて、敢然その東洋の根據を碎かんとせるもの、之によりて、東洋の地をしてその不斷の脅威より免れしめ、茲に永遠の平和を確立せんとするに外ならず、而して、日清平和の干渉、膠州灣の強奪、悉く之れその軍國主義、侵略主義の反映にして、吾人は茲に少しく彼の東洋政策について見ざる可からず。

第一節 獨の殖民政策

鐵血宰相ビスマルクは、最も守保主義にして、獨逸統一を以てその畢世の事業としたるや已に之を説きたり、彼れのウイヘルム一世を助けて、大獨逸帝國の建設を了するや、爾來彼は専ら力を内治に注ぎ、外は三國同盟を結びて佛の復讐に備ふると共に、國內の統一と充實とを旨として、守成に甘んぜんとし、領土の擴張其他を意味する國外への發展の如き、多くその喜ぶところにあらざりし。彼は常に、獨逸は最早領土を擴張するの必要なしとなせり、獨逸は已に政治上の統一を確保す、爾後たゞ平和主義を以て現状を維持するの外なしとなせり、故を以て彼は、獨逸の殖民をして政治的性質を帯びしむるを厭ひ、寧ろ之を殖民會社の事業となさんことを期したりき。然り而してビスマルクの此の政策が、當時尙一親王たりしも、將來獨逸帝國に君臨すべきカイゼルの意に満たざるものありしや勿論なり。

一八八八年はカイゼル即位の年なるを記憶せよ。

一千八百八十八年、サンジバルに叛亂起るや、ビスマルクは却つて之に政治的干渉を試み、一千八百九十年英獨條約を結びて、阿弗利加大陸に六十五萬方哩の新版圖を得るに至り、爾來獨逸の殖民政策は、少壯なる皇帝の雄圖を相待つて、全くその面目を一新するに至り、殖民事業を完成せんが爲には、強力なる政治的援助を缺く可からずとなし、頗

此の艦隊條例は一九九八年法律となりて發布せらる。その内容は先に説きたり。

る意を海軍擴張に用ふるに至り、一千八百九十七年の議會に、新艦隊條例の提出せらるゝや、内閣員フオン、マルシヤルは之が説明に當り、議院に告げて曰く、「獨逸の政策は敢て危険なる進路を執らんとするものにあらず、唯吾人は、獨逸の利益を維持する必要の上より、海外の獨逸民族を保護せざる可からず、獨逸の殖民は、海外の獨逸民族が獨逸民族として立つを得可き方面に向つて擴張せざる可からず」と、而して之れ實にカイゼル、ウイヘルム二世の政策にして、彼れや、歐洲に於ける汎ゲルマニズムを以て足れりとせずして、之を世界に及ぼさんとせるものなり。

カイゼルは斯くして帝國政策の撰手として起たんとせり、而して又常にその帝國政策に關する意見を發表して憚らず、一千九百九十七年マローン市の演説に於て曰く、「吾人は世界に於て大なる義務を有す、吾人が保護せざる可からざる獨逸人は、世界の各方面に散在せり、外國に於ける獨逸の勢力は、獨力之を維持せざる可からず」と、以てその抱負を窺ふに足らん。而も普魯西が歐洲の強國として立ちたるは、フレデリキ大王以來にして、その大獨逸帝國の建設を見たるは、近く一千八百七十一年の事に屬し、此の間一度ナポレオンの蹂躪する所となれるのみならず、普墺、普佛の二役あり、帝國の建設後にありても、國內の統一に忙殺せられたるを以て、遠く手を海外に延ばすを得ず、英佛以下の諸國が、

米國には八百萬の獨逸殖民あるも、今や殆んど同化され盡せり。

世界の各地に廣大なる屬地を有するに拘はらず、獨逸は殆んど殖民地を有せず、之れ少壯なる皇軍の最も遺憾とせる所にして、即位以來彼は殖民地の獲得に全力を效さんとせり、然れども、世界に於ける殆んど凡ての地が、英佛以下諸國の手中に歸し、當時已にその剩れるものを見ざらんとす、此に於てか彼は、眼を八方に配りて、苟くも機會あらば、必ず之を逸せざらんとし、先づ亞弗利加に於て、獨逸東阿殖民地を得、南阿弗利加にも廣大なる地積を獲得せる外、カルメン、トーゴランド等をその手に收むるを得たり。

其他彼は、小亞細亞の經營に大なる努力を致せり、彼は機會ある毎に土耳其の懷柔に努め、よつてその歡心を得て、着々此の方面の發展を怠らず、一千八百九十八年には、カイゼル自らパレスタインの地を訪へるが如き、以てその努力を見る可きなり、斯くの如くにして獨逸は、小亞細亞に大なる基礎を据え、早晩土耳其を一掃して、此の地方を自己勢力の下におかんとす、元來獨逸殖民は、往々にして英語國民の爲に吸收せられ、同化したるの弊少からず、然るに、小亞細亞地方にありては、同化するに足る可き英語國民のあるなきを以て、獨逸は、此の地方にその殖民を吸収し、以て他日に備へんとするものにして、その巴爾幹政策の如きも、要するに小亞細亞に達するの便を得んとするものたるや勿論なり。

獨逸已に小亞細亞及び阿弗利加大陸に發展の基礎を据えたりと雖も、未だ極東に一指を染むるを得ざるなり、世界の富庫たる支那は、その龐大なる面積と、四億の人民とを有して、世界列強の前に横はるも、その要部は早く已に諸強の據る所となれり、英は香港に據り、葡萄牙は澳門を占め、佛亦東京に蟠居せるのみならず、露は西伯利亞經營を全うして北方より之に臨さんとし、新興の日本亦その地理的優勝の地位を利用して、大に富源を擡まんとするも、獨逸は全く據る可きの地なし、カイゼルの鋭き眼光は、早くも極東の地を射て、そこに何等かの機會を待てるなりき。

第二節 日清和約の干渉

明治二十七年朝鮮の志士金玉均の上海に暗殺せらるゝや、鷄林の風雲漸く急にして、延いて日清の平和破れ、猛勇なる日本軍は、連戦連勝、皇軍は進んで旅順の險要を奪ひ、遼東の地その占領する所となり、一部は山東省に上陸して威海衛を屠り、清國北洋艦隊は全滅して、北京の咽喉早く日本の扼する所となる、清國即ち李鴻章を遣はして和を日本に請ひ、四月下旬關條約は成りて、清國政府は朝鮮の獨立を確保すること、遼東半島及び臺灣並に澎湖列島を日本に割讓すること、軍費の賠償として清國は日本に庫平銀二億兩を贈ること、沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を開くことを約せり。我が明治天皇陛下には嘉賞

明治二十七年
は一八九四年
なり。

斜めならず、特に優渥なる御誼を賜ひて、直ちに御批准の事終り、今はたゞその交換を剩すのみなりき。

日清戦争の當時、弱小國を以て見られたる我の外交が如何に細心の注意を要したるかを見よ。

一千八百九十五年四月二十三日、實に下ノ關係約訂結せらるゝの後六日なりき、我が出征將卒は、和約の批准交換を待ちて、赫々たる戦功を負ひ、樂しき凱旋の途に就かんことを思ひ、國民亦戦捷の光榮に酔ふのとき、露、獨、佛三國の公使は、外務省に林次官を訪へり、彼等は各自本國政府の訓令なりとして、日清媾和條約中、遼東半島割讓の一條に關して異議を申し述べぬ、噫、突然の事件、始め帝國政府の遼東半島、臺灣澎湖列島を割かしめんとするや、先づ案を具へて列國政府の内意に聞けり、蓋し此の帝國空前の事件に當り、その終りを全うせしめんが爲、後日列國の異議あらんことを恐れればなり、然り而して露は、素より極東經營に全力を注がんとするもの、日本の遼東半島領有は、大にその便とせざる所なるも、當時未だ西伯利亞鐵道は開通せず、武力を以て日本を壓するが如きは到底期す可からざるなり、即ち逡巡敢て干渉の途に出ず、佛亦露の與國として、露西亞にして干渉に出でんか、事を共にす可きも、自ら之に當るが如きはその望む所に非ず、即ち各國の承認を経て、媾和條件として提出せる所に屬す、圖らざりき此の時に於て列國の干渉を受けんとは、警報は忽ちにして廣島大本營に飛びぬ。

清國動もすれば列國の干渉を頼んで批准を放棄せんとするの色ありき。

二十四日、廣島大本營には緊急御前會議の開かるゝあり、一、新に敵を求むるも三國の勸告を拒絶すべきか、二、列國會議を召集して之にその處理を一任すべきか、三、三國の提議に應じて遼東半島を恩惠的に清國に還附す可きか、三その何れを執るべきかを計る、而して衆議は、我が艦隊、兵員共に疲勞缺乏して、到底新銳の三國に當る可からず、此を以て一面帝國政府の體面を保たんが爲、列國會議に依らんことを決す。時に伊藤と共に全權として和約の訂結に當れる外相陸奥は、訂約と共に去つて舞子に赴き、徐に病を養ひつゝありしが、三國干渉の警報を得て早く後圖を定むるあり。彼や辛辣稀に見るの手腕を有するもの、先づ三國の提議を斥け、以て一面三國の決心が如何の鞏固を有するかを測ると共に、又事實の一切を公表して、軍隊及び人民が如何に激昂すべきかを見、以て新なる策を樹てんことを思ふ。偶々伊藤の來りて御前會議の決定に對し、その意を聽かんとするあり、彼れ計るに自己の意を以てしたるも、伊藤はその餘りに大膽にして、遂に不測の災害を生ぜんことを恐れ、之を肯んぜず、陸奥亦列國會議が下ノ關係約全部を破棄し終るあらんことを恐れ、之に賛せず、遂に止なく三國の勸告に應ずるに決せり、而も清國政府は、尙萬一を僥倖して條約批准を難んずるの風ありしも、遂に事なくして止み、五月八日條約は交換せられ、政府は之を公布すると共に、遼東還附の詔勅を公にす、實に左の如し。

詔 勅

朕嚮ニ清國皇帝ノ請ニ依リ全權辦理大臣ヲ命ジ其ノ簡派スル所ノ使臣ト會商シ兩國媾和ノ條約ヲ訂結セシメタリ然ルニ露西亞獨逸兩帝國及法朗西共和國ノ政府ハ日本帝國ノ遼東半島ノ讓地ヲ永久ノ所領トスルヲ以テ東洋永遠ノ平和ニ利アラズトナシ交々朕ガ政府ニ德懣スルニ其ノ地域ノ保有ヲ永久ニスル勿ラザラムコトヲ以テシタリ願フニ朕ガ常ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ遂ニ清國ト兵ヲ交フルニ至リシモノ洵ニ東洋ノ平和ヲシテ永遠ニ鞏固ナラシメントスルノ目的ニ外ナラズ而シテ三國政府ノ友誼ヲ以テ切憇スル所其ノ意亦茲ニ存ス朕平和ノ爲ニ計ル之ヲ容ルニ吝ナラザルノミナラズ更ニ事端ヲ滋シ時局ヲ難シ治平ノ回復ヲ遲滯セシメ以テ民生ノ痛苦ヲ釀シ國運ノ振肅ヲ阻ムハ眞ニ朕ノ意ニアラズ且清國媾和條約ノ訂結ニヨリ已ニ淪盟ヲ悔ユルノ誠ヲ致シ我ガ交戰ノ理由及目的ヲシテ天下ニ炳焉タラシム今ニ於テ大局ニ顧ミ寬洪以テ事ヲ處スルモ帝國ノ光榮ト威權トニ於テ毀損スル所アルヲ見ズ朕乃チ友邦ノ忠言ヲ容レ朕ノ政府ガ三國政府ニ照覆スルニ其ノ意ヲ以テセシメタリ若シ夫レ半島讓地還附ニ關スル一切ノ措置ハ朕特ニ政府ヲシテ清國政府ト商定スル所アラシメントス今ヤ媾和條約已ニ批准交換ヲ了シ兩國ノ和親舊ニ復シ局外ノ列國亦斯ニ交誼ノ厚ヲ加フ百僚臣庶其レ能ク朕ガ意ヲ體シ深ク時勢ノ大局

日露戰爭も亦
カイゼルの從
遷せる所と傳
へらる。

ニ視微ヲ慎シミ漸ヲ戒メ邦家ノ大計ヲ誤ルナキヲ期セヨ
國民泣いて大詔を拜し、激昂の氣抑ふ可からざるものあらんとす、而も時利あらず、臥薪嘗膽の語は國民の口々に叫ばれ、一び之に酬いんことを期せざるはあらず、而して當時國民が、不俱戴天の感を爲せるは露西亞にして、此の意氣遂に日露戰爭に現はれ、強大露西亞をして遂に屈するに至らしめき、而も何ぞ計らん、露佛を引いて三國干渉を敢てせるもの、彼れカイゼルなりしなり。

第三節 獨逸と三國干渉

カイゼル已にその爛々たる眼光を遙に極東の地に放ちて機の到るを待てり、而して茲に日清の平和破る、彼は早くも此の機に乗じて極東の地に指を染むるの素地を得んことを計れり、日本捷つも支那破るゝも、蓋し彼が問ふ所にあらざりしならん。斯くて戰爭は日本の勝利に歸し、李鴻章支那全權として下ノ關に和を議せんとするや、その條件は諸強の内諾を得可く彼の前に呈示せられたり、彼れ惟へらく、露の極東經營を阻碍せんとする遼東半島の割讓は、到底露の忍ぶ能はざる所なる可く、その佛を引いて干渉に出づるや必せりと、即ち伊と英とを引いて干渉反對の態度に出で、大に恩を日本に售ると共に、他日自己の慾望を遂げんとするに當り、日本をして亦之を助けしめんことを思へり、且つ露佛同盟

露西亞が獨力
干渉を離れ
たるもの、又
獨の爲に後を
脅かざるの
恐ありたれば
なり。

の勢力が、漸く三國同盟に壓迫を加へんとせるものあるは、彼の最も堪へ難き所にして、之によりて又その勢力をも挫かんことを思へるなりき。彼れ即ち伊を誘ひて、更に英に説かしむる所あり、而も英の未だ決するに至らずして、早くも講和談判は成立し、只批准交換の手續を剩すのみとなりぬ。

此の時に當り、露佛の態度は彼が如くにして、講和條約は全く確定を見んとし、カイゼルが已に手中にせるを思へる機會は、空しく逸し去らんとす、此に於てか心機一轉、その反目嫉視せる露佛と共に、日清和約に干渉して、以て恩を支那に售らんことを思ひ、先づ露に説くに干渉の事を以てす、露は勿論喜んで之に應ぜり、即ち秘電は伯林、巴里、セントペートルスブルグの間に頻々として交換せられ、優勢なる露西亞の浦鹽艦隊は戰備を整へ、獨逸皇帝は、その太平洋艦隊の指揮權を露提督に依託す可きを公表し、コサツクの鐵蹄早く已に我が滿洲軍に殺到せんとして、茲に所謂友誼の勸告を提出せられたり、當時露國公使の提出したる口述覺書に曰く、

露國皇帝陛下の政府は、日本國より清國に向つて要求したる講和條件を査閲するに、遼東半島を日本にて所有するときは、常に清國の首府を危うするの恐あるのみならず、之と同時に、朝鮮の獨立を有名無實と爲すものにして、右は將來極東永久の平和に對し、

障害を與ふるものと認む、因つて露國政府は、日本皇帝陛下の政府に向つて、重ねてその誠實なる友誼を表せんが爲、茲に日本政府に勸告するに、遼東半島を確然領有することを放棄すべきを以てす。

而して彼は、反覆してその理由を述べ、諄々として或は訓へんとするが如きものあり、佛國公使は、僅に員に携はるのみ、寧ろ帝國の立場に同情するが如く然り、而も獨逸公使に至りては、傲然として威を示し、呵喝を以て懼伏せしめんとするが如く、且つその外務省に送れる公文には、別に羅馬字綴の和譯文を附して曰く、

獨逸國政府が日清講和の條件を見れば貴國より請求したる遼東の所有は、清國の都府をして何時までも不安定の地位におき、且朝鮮の獨立をも水泡に屬させ、因りて東洋平和の永續の妨げになることであると認めなければなりません、夫故に貴國政府が遼東の永久なる所有を斷念なさるやうに、本政府が御勸告致します。

尙原文には、「貴國弱く我國強し、若し戰ひを交ふれば貴國敗れん」の句ありしも、我が注意によりて僅に之を除けりと云ふ。カイゼルや、その歐洲に於て互に敵視せる露佛と共に、此の所以なきの干渉を敢てし、以て恩を支那に售らんとす、彼が如何に東洋政策に腐心したりしか以て見る可きなり。

何等の無禮、
何等の傲慢ぞ
や。

フオン、リヒト
トホーフエン
の支那を訪へ
るは一七七〇
年頃なりき。

第四節 膠州灣の占領

カイゼル已に恩を支那に售る、次いで來る可きものはその報酬の要求なり、而してカイゼルは、早く膠州灣に垂涎せるもの、得て以て獨が東洋に於ける根據地たらしめんことを思へり、膠州灣は清國山東省の一灣にして、その灣口に青島あり、始め獨逸の地理學者、地質學者たるフエルヂナンド、フオン、リヒトホーフエン支那内地に入り、具さに視察する所あり、その山東省に至り、膠州灣を見るに及びて、其の氣候の溫良なる、地味の豊饒なる、港灣の深廣なる、支那第一と稱するも誇言にあらざるを感し、歸りて報ずるところあり、時にカイゼル尙少年、未だ一親王たるに過ぎざりしが、意早く動くあり、次いでその位に即くに及び、雄大なる世界政策を行はんとするに至りて、極東に一根據地を得んとするの念切なり、即ち人を派して膠州灣に臨み、リヒトホーフエンの報告に基づきて、具さに調査せしむる所ありしが、その結果は、軍事上よりも將た經濟上よりも、最も有望なるを慥かめらる。此に於てカイゼル必ず之を得んことを期す、而も他國の領土、恣に之を奪ふを得ざるなり。

時なる哉一千八百九十七年十一月、清國山東省登州府に兇徒の動亂を爲すあり、獨の宣教師リカールドホイレ及びフラツニースの二人、兇徒の殺す所となる、彼等名は宣教師と

一面カイセル
の國を愛撫
するの至情に
出でしならば
大に賞賜に値
するも獨逸は
之を機として
膠州灣占領の
宿志を遂げん
とす。

云ふと雖も、常に自國の強大を恃みて暴横の行爲少からず、本國と通じて國事探偵を爲せるの疑ひあり、地方貴紳の最も嫌忌する所となれりしが、彼等の教養は、山東巡撫李秉衡の煽動に出づるの流説あり、虎視眈々、機を視へるのカイゼル、何ぞ此の好題目を看過す可けんや、恐る可き強壓は支那政府に致されぬ。

假令兩者にして、眞に殺戮せらる可き理由を有するとするも、暴徒濫りに之を殺すが如きは、素より道に反す、況んや官憲が之を教唆せるの流説あるに於てをや、支那政府は、具さに情を訴へて、陳謝最も努めたるも、已に本國政府の意を體せる獨逸公使は、頑として之を斥け、凡て本國政府の命に聽いて事を處す可きを云ひ、私に會心の笑を漏らすなり、斯くて本國に具申せる結果は、直ちに膠州灣の占領となりて現はれたり。

十一月十七日、獨逸東洋艦隊司令官デーリツヒスは、麾下の四艦を率ひて膠州灣に入れり、而してその陸戰隊は、堂々として上陸せり、清の守兵、事の何たるを解せず、徒らに疑懼するの間、デーリツヒスは彼等に告ぐるに、獨逸は膠州灣を占領せり、清國守備兵は三時間以内に撤退す可きを以てせり、而して巨砲はその砲口を兵營に擬して、一令の下に巨砲を飛ばさんとするなり、而も之れ何等外交上の折衝を経ざるの前早くも行はれたる所にして、彼等は、先づその眞の目的を遂げたる後、たゞ之を糊塗すべし口實を構

俎の間に見出たさんとするに過ぎず、驕慢か將た暴戻か、吾人は之を評すべき言辭を有せざるなり。

膠州灣の事を秘せるは、要するに他の干渉に恐れたるものか。

更に見よ、獨逸は、皇弟ハインリッヒ親王を東洋艦隊司令長官に任じ、三隻より成る艦隊を極東に増派して、以て膠州灣の占領を確實ならしめんとす、その發するに臨み、カイゼル親しくその行を送り、餞して曰く、「帝國艦隊は大なる威力を以て、帝國の保護すべき義務あるものを保護す、朕は勇猛なる東洋艦隊の任務を祝福す」と、斯くして獨逸は、清國政府に向ひて、強硬なる外交談判を開始せり、その要求せる所、頗る多岐に亘ると雖も、最も重要なものは膠州灣の租借にあり、清國にして否を云はゞ、忽ちにして武力之に臨まんとなす、清廷止むなく之を許すの外はなかりき。即ち一千八百九十八年三月六日、膠州灣租借條約は訂結せらる、その梗概左の如し。而して獨逸の狡獪なるや、その談判の始に於ては、殺害の賠償、山東鐵道の敷設權、嶺山採掘權等のみについて要求せるのみならず、増遣艦隊の征路に就くや、俄にその態度を一變して、膠州灣租借問題を加へ、遂にその要求を徹底し了せるなりき。

一 清國は獨逸軍隊をして何時にても膠州灣の周圍五十キロ以内の線の通行を自由ならしむると同時に獨逸の承諾なくして清國は此の地帯に何等の設備をも爲すを得ず。

一 清國は獨逸に對し向ふ九十九ヶ年間膠州灣兩岸地域の永借特權を與ふること。

一 清國は前記年限中はその地域に對して一切主權を行ふことなし。

一 將來若し獨逸の意思に基づき膠州灣を支那に返却せんとするときは支那は獨逸に對しその經營の爲に獨逸が費したる所を償還し且つ他の適當なる領土を獨逸に割與すること。

一 支那政府は山東省内に於て二線の鐵道敷設權を獨逸に與ふること、該鐵道線路の沿道左右三十清里以内にある石炭其他諸礦山は獨逸に於て自由に採掘し得ること。

第五節 獨逸手中の膠州灣

膠州灣は斯くの如くにして獨逸の手に落ち、カイゼル多年の宿望遂げらるゝを得たり、爾來獨逸がその經營に如何の努力を拂ひたるか、獨逸手中の膠州灣が如何なる發達を爲したるか、少しく之を説かん。獨逸が膠州灣に於て租借せる地域は、その水面全部と、灣口北方の半島並に對角半島の一部及び諸島嶼にして、水陸合して四千方哩に達す可し、而して獨逸は、先づその北方半島の突端なる青島の經營に全力を注げり、西北風を防ぐ可き大防波堤は築造せられ、歐風市街は建設せられ、その背面及び前面には堅固なる防禦工事を施し、政治上、軍事上、將た商業上の根據地たる可き素質は遺憾なく整へられぬ。防波堤

島嶼には女姑島、陰島、黃島、竹筴島、端島、准孟島、大公島、小公島、石島、福島等あり。

内は實に二百二十五萬平方キロにして、二千噸の大船十二隻を一時に入船せしむ可く、市街亦人口約二萬を有するに至れり。

次いで鐵道の敷設亦獨逸の忽諸に附せざる所なりき、彼は條約によりて得たる所に基づき、租借後直ちに線路の踏査に努め、一千九百年、即ち租借の翌年九月を以て、早くも山東鐵道の起工式は舉げられ、爾來五歳の星霜を閲して、一千九百五年膠州灣と濟南府間の鐵道は開通せり、斯くて漸くその羽翼成るや、彼は更に清廷に強要して、津浦鐵道の敷設權を得、爪牙漸く支那の内部に入らんとす。若し今次の事件にして突發するなからんか、彼はその鐵道を順德に延長し、以て直ちに直隸省に迫ると共に、沂州に接続して山東省内の富源を開かんとせしや必せり。

由來山東省は、清國最古の開發地にして、土地肥沃にして人口衆く、現今楊子江流域が支那經濟上の中心を爲せるが如くなるも、若し山東にして適當なる經營の下に發展するあらんか、或はその地位を變ずる未だ知る可からざるなり、獨逸今茲に蟠屈す、彼等は呼ぶに向陽の殖民地を以てし、營々として努めて倦まざるもの、一はその獨逸が東洋に有する政治上、軍事上、商業上唯一の根據地たるに因らんも、亦之によりて英の商業に拮抗せんとするものその素志にあらざるなきを得んや。故を以て、此の地は特に獨逸帝國の直轄地

獨逸の他の殖民地は、多く落日の嘆あり之に對して彼等は向陽の殖民地と名づくるなり。

とせられ、海軍省の管下において、年々多額の經營を注入して惜まず、特にカイゼルの熱心なる、往々その經營の爲に帝室の資財を供給すと云はる。

第六節 黃禍論

カイゼル 東洋政策を窺ふ可き一話あり、その無稽なる黃禍論之なり。黃禍とは何ぞ、その意黃色人種より來る危険と云ふにあり、その歐州人否な白人よりの見地たるや勿論なり。黃禍論とは、要するに、世界の競争場裏に於て、黃人種はやがて白人種を壓倒し、迫害するに至る可しとなすもの即ち之なり。日清戰爭に於て、日本がその猛勇無雙なるを現出するや、從來黃人種を以て、弱者、劣者を以て見たりし彼等白人は、黃人種中亦恐る可きものあるを認め、窃に畏怖を禁せず、此に於てか黃禍論漸く現はる、時にカイゼル取つて題とし、戯畫を畫くあり、大に世の視聽を聳てしむるに至れり。

カイゼル素と丹青の技を善くす、日清戰爭方に終り、三國干涉の事あらんとするの時、親ら彩筆を揮つてカンパスに向へり、畫く所、一端には佛陀の龍に駕し、炎々たる火焰を揚げつ、西方に向つて突進せんとするに對し、歐洲諸國を代表せる幾多の女神、各自武器を取りて大十字架の下に立ち、之を遼撃せんとするの狀なり、而して獨逸を代表せるらしき女神は最も前頭に在り、露、佛を代表せるもの之に續けりと。此の畫素より日本の物

成吉思汗、帖木兒の偉業も過去の一夢に過ぎずと爲せりしなり。

第一次の日英同盟は、敵國が二以上なる場合始めて共同作戦に出づ可きを規定したり。

興を意味するものなりや、將た支那の覺醒を意味せるものなりや、之を知る可からずと雖も、耶蘇教國たる白人種が、一致して佛敎國たる黃人種の襲來を防遏せんとするの意を寫せるや勿論にして、前後の事情に見、將たカイゼルの行ふ所に對比すれば、彼が日本に對する意を寫したるものと云ふを妨げず。

カイゼル已に斯の如し、獨逸は黃禍論の大宗にして、常に吾人の爲に不利を圖れり、特に日清戰後隆々たる日本國運の進展は、カイゼルの最も苦慮するところなりき、之れやがて東洋に於ける彼の發展を防遏せんとするものなればなり、此を以て彼の日本を視る、常に一種の猜忌を以てせり、偶々露西亞がその極東經營に於て日本と衝突せんとするを見るや、之を煽揚して日本と戰はしめ、一面日本の進運に一痛棒を加ふると共に、露西亞をして疲弊せしめ、獨り漁夫の利を得んことを思へり。而も結果は頗る彼の意外に出で、日本は連戰連捷を占め、更に國威を張ると共に、日英同盟協約は、一層その効力を強め來りて日本の勢力は、牢として抜く可からざるに至りぬ。

世界に於ける日本の位置が、漸く向上すると共に、カイゼルに培はれたる黃禍論は、漸く盛んに論議せらるゝに至れり、然れども、現に世界を呪ひつゝあるものは、反つて白禍にして、世界到る處、その桎梏に泣かざるもの幾許ぞ。黃人種中毅然として歐米列強と對峙せるものは、唯一の日本あるのみ、支那は日清戰爭の敗亡に續いて、白人種の列國により、到る處その要地を奪はれ、或は瓜分の厄に罹らんとするの狀を續けつゝあり、近く革命成りて、共和制を布くと雖も、その到底大なる發展を爲すは、近き將來に之を求む可からず、日本を以てして尙日清講和に三國干涉の苦楚を嘗めざる可からざりし、其他の諸國に至りては、早く悉く白禍の乗ずる所となり了れり。のみならずカイゼルは、今や白人の凡てを敵として尙その暴威を揮はんとしつゝあるにあらずや、世界は黃禍よりも獨逸禍を患ひつゝあるなり。

此に於てか日本は、黃人の爲に萬丈の氣を吐くもの、今後彼等をして黃人の亞細亞たらしむるは、一に日本指導の力に待たざる可からず、日本國民たるもの、夫れ努めざる可けんや。

夫れ然り、黃禍論の如き、單に無稽の妄説たるに過ぎずと雖も、日本の急激なる發展は、彼等の畏怖をして頗る大ならしめ、始め僅に無責任なる新聞雜誌が人氣取の策として、多く世人の注意を惹かず、將來亞細亞の覇たるものは、日本なる可しと明言せる一英國政治家の如きも、黃禍論の如きは一種の杞憂に過ぎずとせしが、日露戰爭後に至りては、漸く眞面目の研究を爲すもの少からず、黃禍論は始めて世界的大問題たるに至れり、或は之を歴史的に見、或は之を種族性より見、盛んに黃禍を説き、黃人特に日本人の警戒せざる可からざるものを説く者少からず、今その軍事的方面より黃禍を説けるもの、一節に曰く、黃人、主として日本人及び支那人は、蠻的勇氣を備へて、軍人に適したるの素質を有し居

日本兵の強猛無比なるは、大和魂なるを知らざるか。

れり、彼等にして最新の軍事教育を受け、最新の武器を使用し得るに至らば、白人は到底之に抵抗し得ざるに至る可し、今日白人の占領しつつある亞細亞の土地は、斯くして早晩黄人の手に奪取せらるゝに至る可しと。殖民方面より黄禍を説くものは曰く、黄人は如何なる氣候風土にも適應し得るの體質を有し、且つ耐忍、勤勉、質素の資性を備ふ、故に、黄人は到る處に於て、労働者として、又は資本家として、優に白人を壓倒し得るに至る可しと。又、經濟方面より黄禍を説くものは曰く、東亞殊に支那はあらゆる物産に於て無盡蔵なり、而も未だ少しも開發せられず、又、支那及び日本は最も石炭に富み、水運頗る便なり、此の豊富なる石炭と便利なる水運を利用し、且つ低廉なる賃銀に満足する日本、支那の労働者を使役して、文明的の生産工業に力を用ゐるに至らば、低廉なる東亞の生産物工業品は、世界の市場に跋扈し、此の方面に於ても、白人は到底黄人に對抗する能はざるに至る可しと。

上記の論旨は、何れも多少の眞理を含めること勿論なり、然れども、黄人種を以て狼りに好戦民族と爲すは、誤れるも亦甚だしからずや、勿論吾人は、最近數十年間に於て、干戈を取りて起てること茲に三回、十年毎に一回の戦争を見るが如きは、その頻繁なる驚く可しと雖も、之れ實に止むを得ざるのみ、平和の間に解決を得んとせる事件の、敵手の容るる所とならずして、自衛上然りしのみ、その戦ひに強きは、又決して好戦の理由ならず、特に支那人の如きは、世界無比の平和的人種にして、之を以て好戦人種となすは、強ふるも亦太甚しと云はざる可からず。

之等幾多の黄禍論者中にありて、萬錄叢中紅一點と見る可きはギユリツク氏なりとす。氏はその著書「極東に於ける白禍」中に説いて曰く、「今日世界の平和を脅かすものは、黄禍にあらずして白禍なり、即ち白人の跋扈なり、黄白人種の衝突を避け、世界の平和を永遠に保持せんとせば、先づ白人をして、凡ての人種は同一の價値と權利とを有すて根本眞理を會得せしめざる可からず、英米獨佛人に對すると同一の標準を以て、日本人及び支那人に對すること、之れ世界平和の第一歩なり」と、然り、白人にして、黄白人種同等の權利を有するの眞理に想到し、之を事實に現はすあらんか、幾多の紛争は忽ちにして解決せらる可きなり。

第三章 米支の態度

東方君子國今や正義の劍を執つて、蠻賊獨逸の東洋根據地膠州灣に臨まんとす、而して之れ一に世界平和の爲にせるなり、日英同盟規約に基づき日本の任務を遂行せんとするも

白人が黄白人種間に差別をつけ之を迫害せんとするもの、要するに凡ての點に於て彼等の劣れるを知るが爲か。

のなり、八月四日、英獨の國交危殆ならんとするに際し、帝國政府が飽迄も日英同盟に對して忠實ならんことを宣明せるの一事、已に早く英國上下の感佩措かざるところ、今や正に之を事實に見るに至りて、英國をして多大の満足を感じしめしや勿論なり、其他與國なる露佛も、共に深き感謝を我に捧げり、而して協商國側の喜ぶ所は、則ち獨逸の嫌忌する所にして、特に勇敢なる日本軍の前に、その東洋唯一の根據地を覆滅せられんとする獨逸は軍隊と云はず國民と云はず、意氣の阻喪頗る大なるものなくんばあらず、而も之れ自ら索むるの禍ひ、遼東還付に苦き經驗を日本に與へたるの因は、茲に果となりて現はれたるのみ、又その横暴なる東洋政策が、遂に之を導きたるのみ、今に於て將た誰をか恨まんや。

獨逸人の多くは、歐洲大亂の際日本が露西亞の背後を衝く可きを思ひたりき。

前已に說けるが如く、我が對獨開戦は、獨り同盟國英のみならず、露佛共に感謝を捧ぐるところ、然り而して、我と露とは、三國干涉の事ありて以來、久しく吳越の思を挾みて、遂に日露の大戦となり、我は十年の遺恨を雪ぐを得たるも、爲に鼎の輕重を問はれたる露西亞は、更に大に啣むところある必至の勢ひなり。而も所謂雨降りて地固まるものか、此の一戦は大に兩國の誤解を説き、相互に他を尊敬するに至りて、爾來交情は益々密を加へ、一千九百五年早くも日露協商の訂結せらるゝあり、以て相互に領土の保全を約し、友

日米開戦論早くも天の一角に響けるものありき。

邦の獨立及び領土保全、並に支那に於ける列國商工業の機會均等主義を承認す可きを約せり、佛亦此の頌を以て我と大に親善なるに至り、日佛協商は訂結せられ、佛領印度支那に關して協定する所あり、日英露佛は、その同盟と協商とにより、最も親善なる關係を維持して、獨逸は、歐洲に於ても將た東洋に於ても、共に孤立の状態にあり、我が今次の行動が、列國の等しく承認し感謝する所となる素より當然なり。然るに、近時漸く帝國主義に傾き、東洋に爲すあらんとせる米國の、動もすれば嫉視の眼を我に放たんとするあり、太平洋上に於て我が勢力を呪はんとする彼の態度や、又注意に値せずんばあらず。

第一節 米國の態度

徳川氏治平三百年、領國の夢穩かに、桃源の眠を貪りつゝありし我國を警醒し、指導し誘掖して、世界の文明に觸れしめ、維新新政府をして、國際上大なる過誤なきを得しめ、以て今日の隆運を致さしめたるもの、實に自由平等、正義之れ事とせる米國の我に寄與せること大なるものなくんばあらず、此を以て日米の親交は、他の諸國に比し、最も深厚なるものありて存せり、然るに年所の變遷は、又國情の變化を促すこと急に、堅くモンロー主義を執りて、西大陸の外に出でざらんことを主義とせし米國も、遂に時代の風潮に冒され、漸く帝國主義に移らんとし、先づ布哇を併せ、次いで西瑞牙と戦ふや、比律賓群島は

之等米國の我邦に對する各種問題の裏面には常に獨人あるを記せざる可からず。

その手に歸し、太平洋上に深き關係を有するに至り、延いて又支那貿易に重きを置き、此にその商權を張らんとするに至りて、從來閉却せられたりしその東洋政策は、俄に活氣を加へ來れり、此の時に當り、日本亦勃興して、陰然東洋に重きを爲し、日露戰爭は、更に一層その地位を進め、日本をして東洋の覇たらしむると共に、南滿洲はその勢力範圍に入り、日本の商權は、清國市場を蔽はんとす、即ち米國は、支那に於て將た太平洋に於て、勢ひ日本と相容れざるに至りて、米人の嫉視は深く日本に致され、桑港に於ける日本學童隔離問題となり、カリホルニア州の土地所有禁止問題となり、更に滿洲鐵道中立問題となりて現はれ來り、我が國民の感情を害すること甚だしきものあり、而も彼等は、日本を恐るゝこと、黃禍論者よりも一層甚だしく、その極無稽なる日米開戰説を流布するもの少からず、畢竟怯犬の影に吠ゆるに過ぎざるも、又次て彼等の意が那邊にあるかを知るに足るものあらん。

日米の關係已に斯くの如し、一面米獨の關係や夫れ如何、獨逸の露骨なる侵略主義、傍若無人なる態度は、決して何れの國とも容る可きにあらず。一千八百九十九年米西戰爭に際し、米のデラウエー提督のマニラ灣に西瑞牙艦隊を全滅せしむるや、時に獨逸艦隊は提督デーデリッヒに率ゐられてマニラに入る、英艦隊亦時を同じうして入れり、デーデ

此の時獨逸は米の占領に先だちて太平洋上の西班牙領諸島を買収したり。

リッヒ英提督に問うて曰く、獨逸にして若し米艦隊を威壓し、之をしてマニラを捨てしめんとなせば、貴下は果して如何の態度を執らる可きやと、禍心以て伺ふ可し、事漏れ、爲に米國の怒を買ふこと少からざりき。然れども、米國々民中には獨逸種より出づるもの現に八百萬を算し、その農産物は多く獨逸に輸入せらる、之れ等民種と貿易上との關係は、米國をして獨逸と密接なる關係にあらしむるを免れず、況んや米國は、獨逸の無法なる膨脹策、及び之が施行者たるカイセルを惡むも、國民としては、何等獨逸人を忌むことなきに於てや。斯くの如くにして、米國は獨逸國民に對し深厚なる同情を有するのみならず、所謂獨逸種米人亦此の間に乘じて、盛んに祖國の利益を計らんとするあり。特に支那に於ける利害關係に於ては、米國と獨逸との間に甚だしき不一致を見ず、少くとも膠洲灣の日本の手にあるよりは、獨逸によりて保持せらるゝを利とす、日本の膠洲灣占領は、決して米國の快しとせざるところ、況んや太平洋上の諸島の占領に於てや、風聲鶴涙に過ぎざる日米開戰説が、他日或は事實となりて生ずるや亦知る可からざるなり。

第二節 米の仲裁提議

今次の戰亂は、その跨る所頗る廣きに亘り、延いてその慘害の大なる豫測す可からざるものあらんとす、若し之をして未然に防止し、或はその終結を速かならしむるを得ば、獨

八月六日は英
獨開戦後單に
二日のみ。

り交戦軍隊幾十百萬の生命を救ふのみならず、交戦各國家、國民塗炭の苦を救ひ、並に中立諸國民の利益を保護すること頗る大なるものなくばあらざるなり。此を以て開戦以來之が仲裁の提議を爲し、若くはその運動に着手せるもの少からず、就中北米合衆國大統領は、八月六日早くも露、獨、埃、英の各國皇帝並に佛國大統領に親書を送りて、歐羅巴の平和を恢復せんが爲に、海牙條約の下に、今日若くは他日を以て、自ら居中調停の勞を取らん事を申出でたり、此の提言に對しては、交戦各國共に何等の重きを措かざりしのみならず、提言者たる米國自身にありても、自ら時機尙早きを認め、只他日機を見て、二度調停を提議す可き素地を作り置かんとするに過ぎざりき。

米國の仲裁提議は、他日適當の機に於て再び致され、交戦各國亦之に應じて、戰亂終結を見る可きや否や、果して之を知る可からずと雖も、現に世界列強にして、全く戰亂に參與せざるもの、一の米國を措いて又ならず、即ち米國は、列強中唯一の中立國たり、此の地位よりして、他日平和を議するのとき、居中斡旋の任に當る可きは、當然米國ならざる可からず、而して此の時に於て、米國果して如何の態度に出でんとするか、特に我が日本に對する態度の如何なるものある可きか、我が國民たるもの、大なる注意を之に拂はざる可からざるなり。

米國新聞紙中
には、日米戰
争將に起らん
とするを傳へ
たるものすら
ありき。

平和會議に於て、最も重きを措かざる可からざるは、仲表者若くは關係者の態度なり、遠く伯林會議の例を引くを要せず、近くは日露講和條約の訂結に於て之を證す可し。然り而して今次戰亂の仲裁者たる可き米國の態度や、已に述べたる所の如く、加ふるに幾多の事實我の大に注意せざる可からざるものあり、始め我の獨に宣戰して、海陸の師青島の攻圍に従はんとするや、蜚語紛々として太平洋の彼方より來れり、曰く、米國は日本の行動を牽制す可く、漸く開通せる巴拿馬運河によりて、その大西洋艦隊を太平洋方面に廻航せしむ可き準備中なりと、曰く、日本政府に對して嚴正中立を提議し來れりと。而して之等は流説に過ぎざりしも、此に擧ぐ可からざる幾多の事實と、前記米國の態度とに鑑みば、我が國民は決して論安に耽る可からず、たゞその實力を備へ、機に臨み變に應ずるの覺悟なかる可からざるなり。

第三節 支那の態度

日本今や兵を發して膠州灣を收めんとす、此の地獨逸の租借地たりと雖も、同時に又支那領土の一部たり、日本が膠州灣を攻撃し、之を陥落せしむる、素より日本の自由でありと雖も、之を爲すが爲に、支那領土の他の一部を使用せざる可からず、此に於てか支那の態度亦大に注目せざる可からず。

支那政府には
親獨主義者甚
だ少からず。

由來支那の外交は、所謂根本方針なるものなく、風に從ひて漂游する萍草の如きものありて存せり、近者革命新に成りて、袁世凱一世の偉器を以て之に大總統たるも、徳望未だ以て一國を壓するに足らず、不平の徒所在に散在して、政令動もすれば敷かれざらんとして、その外交の如き、亦敢て舊態を脱せざるなり、此を以て、歐洲事變發生に際しても、その態度頗る曖昧たるものあり、八月三日以來、數次總統府に會議を開きて、態度の決定を議しつゝありき、而して此の間傳ふる所によれば、袁世凱は、表面日本に親しむの態度を標榜しつゝ、裏面竊に獨逸と結托し、又米國に依頼して日本の行動を牽制するに決せりと、這個狡猾の策、何ぞ遂ぐるを得んや、況んや獨今列強を敵とし、米亦底に深く日本の怨を買ふに堪へざるをや。斯くの如くにして時局の愈々展開するや、支那政府は局外中立の議を決し、八月六日之を中外に布告せり。曰く

我が友邦埃洪國が塞爾比亞國と開戦したるを端緒として、歐洲列國兵火の間に相見ゆるもの多きに至りしは、各國と等しく遺憾とするところなり、我と各交戰國とは締盟の友邦にして、今回の戦争は極東の商務に關すること大なり、我が人民の歐洲各國内に在住營業し、及び財産を有する者は素より各國の保護を受く、故に本大總統は極東の平和を維持することに努め、我が人民の享くる所の安寧幸福の爲に、嚴正中立を守るに決し、

特に中立條規を宣布す、凡そ我が人民努めて此の意を體し、現行法令、條約及び國際法の大綱に依り、中立義務を遵守す可く、各將軍巡按使は所屬を督率し、極力國際條規を遵守し、友邦の親睦を保持せんこと、本大總統の切に望むところなり。
支那政府已に中立を宣す、即ち之に基づきて、中立辦事處を中央政府に設け、天津、奉天、濟南、芝罘、上海其他の要地に之が分處を置き、専ら中立事務を處辨せしむること、なせり。

日本已に兵を山東に用ゐんとするや、先づ交戰地域問題に關して中華民國政府と謀るところありき、即ち日本が獨逸を攻撃せんが爲に、山東の地に武を行ふは、明かに中華民國の中立を破るものなればなり、此の間獨逸がその間に策を弄し、日本の不便を來さしめんとせるや勿論なるも、議は遂に決して、支那政府は、非公式に日本の要求を容るゝ旨を回答し來ると共に、九月三日、その外交總長の名を以て、支那駐劄各國公使に公式の通牒を發しぬ、其文に曰く、

今次歐洲の戦争あらゆる交戰國皆本國の友邦に係る、是を以て本政府は中立を宣言し、力を竭して奉行せり、先後、山東地方官憲の報告によるに、獨逸軍隊は膠州灣一帶に在りて行軍戰備の形狀あり、日英聯合軍亦龍口及び膠州灣、萊州附近一帶に在りて軍事行

孤立せる獨逸の抗議は何等の反響をも有せず。

動を爲す、日英獨三國は同じく本國の友邦たり、而して之れ我が國境内に於て意外の舉動にして、實に特別の形狀に屬し、一千九百四年日露兩國戦ひを遼東境内に交へし事實と相似たり、故にこの先例を參照し、龍口、萊州及び膠州灣に連接する附近の各地方を以て確實に交戦國軍隊の行動し得可き至小の地點となし、本政府は完全に中立の責任を負はず。

然るに、獨逸政府は、清國政府の此の宣言を以て、明かに中立の義務に背反し、日英聯合軍の行動を援助するものなりとなして、北京駐劄公使をして抗議を爲さしむ、曰く、

- 一 獨逸が青島に防禦を施し戦備を修むるは素より其の權利に屬す。
- 一 支那は豫じめ日本軍の上陸を止むるが爲に日本に抗議す可き筈なるに、その事無かりしは中立を完了したりと謂ふ可からず。
- 一 支那政府が交戦地域を公然宣明せしは、日本軍が已に上陸を終了せし後にあり、之れ支那政府が日英聯合軍の行動に便宜を與へたる確證なり。
- 支那政府は之に對し、元來獨逸は膠州灣に防禦工事を施すの權利なく、従つて中立違反の責は却つて獨逸に於て之を負擔せざる可からざる旨を陳辯すると共に、「支那は、最初よりその領土内に戦禍の及ばざらんことを望み、之を防止せんとして努力する所ありたる

凡て實力にあり、實力足らずんば、たゞ強者の意の儘ならざる可からず、白耳義に對する獨逸を見ずや。

る、遂に其の効を奏せず、日本軍隊の龍口に上陸するに際し、政府は、本國の領土を通過せしめざらんことを欲し、極力之を防止せんとしたるも、實力足らずしてその目的を達せず、此を以て支那政府は、日露戦役の先例に照らし、豫じめ交戦區域を劃定し、次て中立の侵害を免るゝの外施す可き術なきに至れり」との意を通告せり、而も獨逸は、尙前議を執りて動かさず、重ねて抗議する所あり、九月十五日更に支那政府に通牒して曰く、

- 一 支那政府は日本軍上陸以後正式に抗議を爲したることなし。
- 一 支那政府は、交戦區域を明確に限定せず、之れ日英聯合軍の行動に自由を與へたるものなり。
- 一 交戦區域の限定は、日本軍の上陸以前に於て之を通牒せざる可からず、何となればその事たる獨逸の防禦工事に頗る重大なる關係を有すればなり。
- 一 支那政府は日露戦役の先例を云々すれども、當時の交戦區域は、之を兩交戦國に開放して、兩交戦國をして之を選ばしめたるを以て、今日の場合と日と同じうして語る可きにあらず、何となれば、日露戦役の際にありては、兩交戦國は、前陳の事實の爲めに、均等の利益を得たるに反し、今日の交戦地域限定は、獨り日英聯合軍に利ありて獨逸に害あり、支那政府の措置は公平を缺くものと云はざる可からず。

然れども、支那政府は頑として前議を固執し、再三の抗議に對しても、遂に何等の動搖を來さず、獨逸の抗議は遂に効を奏せずして止みぬ、斯くして支那の態度は、比較的公平なるを得たるも、要するに當時獨逸の勢力が、世界に各地に失墜せられたるの結果ならんばならず、支那自ら好んで然く公平に出でたるにあらざるは、爾後の態度に見て容易に之を察す可きものあり。

第四章 皇軍進發

我が好意を以てせる妥當の勸告も、頑冥なる獨逸政府の之を容れざる可きや、殆んど明かなるものありたるを以て、我が政府は、對獨最後通牒の交附と同時に、早くも諸般の準備に着手するところあり、陸軍の一部に動員令を布くと共に、有力なる帝國海軍の新式諸艦艇以下は、早くも戦時編成を了り、佐世保にありて最後の訓令を待つと同時に、一部は山東方面に海面に出動するあり、斯くて二十三日正午に至るも、獨逸の回答は豫期の如く遂に來らず、此に官戰の大詔は煥發せられて、局面は一轉し、帝國は三たび軍國に入り、外務省は國交斷絶の經過を公表する所あり、又對獨戰費を協賛すべき帝國議會召集の勅令は公布せられ、我が陸海軍は、衝天の意氣を以て征途に上れり。

第一節 陸海軍の部署

我れ已に獨逸に戰ひを宣す、その期する所は驕慢なる獨逸の膺懲にあり、膠州灣の攻陥の如き、素よりその一部たりと雖も、以て目的の全豹となす可からざるや明かなり、苟くも帝國の力の及ぶ限り、獨逸に打撃を加へんとする、開戰の大眼目たるなり、而して當時獨逸艦隊中、遁れて公海に漂浪せるもの甚だ少からずして、爲に各國通商の脅威せらるゝこと大なるものあり、之等漂浪艦隊を撃滅し、併せて獨逸の南洋に有する領土を占領する如き、又帝國の努む可き所に屬す、即ち我が陸軍及び海軍の一部は、主として膠州灣の攻略に従事すると同時に、海軍の他の一部は、獨逸艦隊及び南洋獨逸の占領に従はんとし、海軍中將加藤定吉の率ゐる第二艦隊は、主として黃海方面に策動し、海軍中將加藤友次郎の率ゐる第一艦隊は、南洋方面より太平洋、並に南米地方に策動せり、而して陸海軍は、宣戰と同時に運動を開始せしが、膠州灣攻撃軍の主腦は實に左の如し。

- | | | | |
|-------|--------|------|-------|
| 軍司令官 | 第十八師團長 | 陸軍中將 | 神尾光臣 |
| 參謀長 | | 陸軍少將 | 山梨半造 |
| 甲 旅團長 | | 陸軍少將 | 山田良水 |
| 乙 旅團長 | | 陸軍少將 | 堀内文次郎 |

第二節 膠州灣の封鎖

八月二十三日、日獨交戦状態に入るや、我が第二艦隊の主力は、司令長官 加藤定吉中將の率ゐる所となりて、敵地に向ひたるが、之より先き早くも同方面にありて警戒に従事しつゝありし我が水雷戦隊は、國交斷絶と同時に膠州灣外に進み、専ら警戒に努む、時に八月二十四日、猛烈なる颶風は山東方面を襲ひ、哨戒中なる我が第一水雷戦隊は、狂風怒濤と戦ふこと二晝夜に及び、各艦殆んど相離れ、全く連絡を失ふに至りしも、幸ひにして艦艇に損傷せるものなく、二十六日風浪静かなるに及びて根據地に歸るを得たるが、不幸にして勇敢なる五水兵は風浪の爲に没す所となり、開戦第一の犠牲者となり了れり、當時加藤長官は報告して曰く、

第一水雷戦隊は哨區に出動中二十四日午後二時頃颶風に遭遇し、激浪豪雨の爲避泊の目的を達する能はず、颶風の中心を避けつゝ、風浪に従ひ南西に航し、怒濤の中に漂よふこと約一晝夜に及び、各隊相分離するに至れり、二十五日正午頃より風浪漸く収まりたるを以て、藤本水雷戦隊司令官は、各隊僚艦の搜索を行ひ、二十六日夜に至り悉く集合せり、長時間怒濤に翻弄せられたる爲、或は端艇を奪はれ、或はハッチ若くは要具を流失せしめたる等、各艦多少の損害を被りしも、乗員一同奮闘努力の結果、何れも戦闘航

海に差支なきを得たり、唯波風乗組の二等機関兵後藤仲久(栃木縣那須郡伊王野村)山風乗組三等機関兵野口米藏(埼玉縣北足立郡大石村)が挺身防水作業に従事中、又櫻乗組の一等兵曹菅原重(巖手縣西磐井郡貞瀧村)三等兵曹渡邊新之助(福島縣石城郡野村)二等水兵岩田伊三郎(岐阜縣羽島郡下羽栗村)が危険を冒し端艇の固縛に従事中、何れも怒濤の没す所となり、殉難するに至りしを報ずるの已を得ざるに至りしは最も遺憾とする所なり。

斯くて二十七日朝加藤中將の主力 隊膠州灣外に達するや、先づ無線電信を以て、敵總督に告ぐるに、我は軍使を送る可きを以て、彼れの之を迎へんことを以てせり、然るに我が艦隊の大公島の南約九裡に達せる頃、彼れ又無線電信を以て無線電信によりて我れの希望を傳へんことを望み來り、且つ當時膠州灣内に在りし塊艦カイザリン、エリサベス艦長並に米國領事等に對しては、我が要件を彼れより取次ぐ可きを以てしたるを以て、我れ亦軍使の派遣を止め、無線電信によりて封鎖を宣言するに至れり、時に我が中央標準時の午前九時にして、封鎖宣言の全文は左の如し。

本官は大正三年八月二十七日東經百二十度十分、北緯三十五度五十四分より東經百二十度三十六分、北緯三十六度七分に至る全沿岸(膠州灣租借地全沿岸)を本官の指揮下に

屬する海軍力を以て封鎖し、之を維持する事並に右封鎖地域内に在る支那及び中立國船舶に對し、封鎖區域を退去する爲、二十四時間の猶豫期間を與ふ可きことを宣言す、右封鎖を破らんとする一切の船舶に對しては、國際法及び帝國と中立諸國との條約によりて之を處置す可し。

大正三年八月二十七日 軍艦周防に於て

第二艦隊司令長官 加藤 定吉

爾來我が優勢なる艦隊は、膠州灣外にありて封鎖を續行し、敵艦艇を灣内に威壓したるを以て、黃海方面一帶の制海權は我が手に歸し、航海全く安全なるを得たり、同時に我が海軍は、銳意灣内外の掃海事業に従ふと共に、時に逐驅隊を放ちて強行偵察を試みしめ、或は水上飛行機を飛ばして敵軍要塞地帯の偵察に努め、若くは爆彈を投下して敵艦を奪ふ等々豫定の行動を取りつゝありき。

第五章 青島の攻圍

青島は敵國獨逸が東洋に有する唯一の根據地にして、據つて以て東洋侵略の策源地たらしめんとせるもの、その施設に對し如何に多大の用意を拂へるかは、吾人已に述べたり、

帝國が日英同盟の協約に従ひ、獨逸に宣戰するに至りたるもの、實に彼が此に蟠屈して、東洋の平和を脅かさんとするものありしによる、此を以て青島の攻圍は、日獨交戰の目的中その主要なるものたるは論を待たざるなり、即ち開戰と同時に我が海軍は、膠州灣一帶の沿岸を封鎖して敵の交通を絶つと共に、有力なる陸軍は、山東の一角に上陸して之が攻圍に従へり。

第一節 青島の防備

前述せる如く膠州灣は、獨逸が宣教師の生命二個と交換せるの地にして、爾來此に嚴重なる防備を加へ、以て萬一に備へたり、即ち海正面の防備としては、灰泉角砲臺、オウガスト岬角砲臺、臺西鎮砲臺、エイヌイサン岬砲臺等あり、何れも敵海軍に應戰して、殆んど遺憾なきを得る程度に大、中口径火砲を備ふるのみならず、その工事亦頗る堅固なるものありて、よく艦載砲の威力に對抗し得可きものなりし。然れども、何れも低砲臺なりしが爲、比較的威力薄弱にして、我が海軍の猛撃に對し、沈黙せざる可からざるに至れり。陸正面に對しては、イルチス砲臺、ビスマルク砲臺、ビスマルク山南砲臺、モルトケ砲臺等の防備あり、中モルトケ砲臺を除くの外は、何れも陸海兩正面に對戰し得るが如くに設計せられ、且つその砲臺は、凡て花崗岩質の高地上に築かれ、最新式の築城法に依れるも

青島には支那舊砲臺ありしも、之等殆んど何等の價値なきものなりし。

のにして、隱蔽式の形式に則り、砲臺は地下に築かれ、地上に露出せる部分は、堅厚なる鋼鐵板を以て蔽はる、その堅牢なるは、彼が難攻不落を以て誇りたるに見るも之を知る可きなり。

仲家窪の堡壘は中央堡壘と稱せられたるものにして、湛山北方の堡壘は小湛山北堡壘と稱呼せられたり。

加ふるに、日獨國交危殆に瀕するや、ワルデック總督は、一萬有餘の支那苦力を督し、更に防備を嚴にする所あり、背面防禦として、巫山より龍山に至る線を第一防備線とし、以下砲臺に至る迄の間を五線に分ちて、電流鐵條網、鹿柴は勿論、塹壕を穿ち、豫備砲臺を築けり、即ち海泊河口に近く一堡壘を築きて、最左翼の據點とし、次に臺東鎮の北方標高十七米突の高地、臺東鎮の東方標高二十九米突の高地に各一個、仲家窪の高地に二個並に湛山北方の高地に半永久的の堡壘を築き、その後方亦幾多の臨時砲臺を築きて我が兵の侵入を防がんとせり。

又海面にありては、防材、敷設水雷等の防備嚴重なるものありしは勿論なるも、獨逸東洋艦隊の主力たりしシャルンホルスト及びグナイゼナウを始め、エムデン等の有力艦は、開戦以前南洋方面に去りて、當時港内にありたるもの、砲艦イルチス、マギアル等の外、國軍艦カイザリン、エリザベス並に獨逸驅逐艦にして、之等砲艦の多くはその武装を解き、砲門は之を揚陸して陸上の防備に當てたるを以て、海軍勢力は全く論ずるに足らず。

更にその守兵を見るに、平常にありては、歩兵五個中隊、乗馬歩兵一個中隊、野砲兵一個中隊、重砲兵四個中隊、工兵一個中隊、合計約二千六百名に過ぎざりしと雖も、歐洲開戦以來北支那駐屯の歩兵一個大隊、野砲兵一個中隊を合せるのみならず、東洋各地に散在せし豫後備兵等の此の地に集るもの少からず、其他海兵にして陸上勤務に就けるものある可く、普通人民にして義勇兵たるもの亦甚だ少からざる可きを以て、守備軍の總數は七千以上に達せること疑ふ可からず。

第二節 帝國陸軍の上陸

對獨最後通牒の發せらるゝや、その到底武力を用ゐざる可からざるは明かなりしを以て我が陸軍最高幹部は、鎮西第十八師團を以て青島攻略に當らしむるに決し、師團長神尾中將は闕下に伏して命を奉ずる所あり、出征の準備に忙殺せられつゝありしが、已にして宣戰の大詔煥發せらるゝや、八月二十八日を以て、師團の先頭部隊は附近港灣より乗船し、海軍掩護の下に輸送は開始せられ、九月二日を以て山東角の一灣龍口に達し、海軍陸戰隊の掩護を受けて、早くも上陸を開始したるが、時に天候頗る不穩にして、風雨交々臻り、怒濤岸を嚙んで端艇を近づく可からず、爲に揚陸は數次中止せらるゝの不幸に會し、九月十四日に至りて、漸く戰鬪部隊の大部を揚陸せしむるを得たり。

當時我が陸軍公報が、天候の險惡により海陸交通機關の故障に遭遇を報じたるが如く、帝國陸軍の行動が、始終天候の爲に多大の困難を感じたるは實に豫想外の處にして、山東一角の地、近年未曾有と稱せらるゝ暴風雨の襲來するあり、豪雨連日に亘りて止まず、間狂風の之を激するものありて、山東一省將に洪水の裡に没し終らんとするの概あり、獨り諸川の汎濫して橋梁悉く破壊墜落せるのみならず、所在の民家、馬匹、物資等亦多く流失する所となりて、道路はあれども無きが如く、到る所大破を生じ、加ふるに濁水漲溢して腰を没するの慘況を呈しつゝありき、此を以て、給養の困難、輜重の困難と共に、行軍の至難なる又言語に絶するものあらんとす、而も行進一日を緩うす可からず、我が出征諸隊は、その上陸を了るに従ひ、逐次之を數梯團に區分し、大部は龍口より萊州、平度を經、即墨に通ずるの道路を前進せしが、行軍中亦數次豪雨暴風の襲來に會して、爲に時間を要すること多く、某部隊の如きは、一里の行程に二時間半を費したりと云ふ。

斯くの如きの間にありて、我が各隊は、一連日の疲勞に堪へ、萬難を排して前進を繼續し十日その騎兵隊は早くも平度に達して之を占領し、次いで即墨亦我が手に歸し、二十四日に至る間に於て、我が上陸軍の主力は、殆んど即墨附近に集結するを得たり、此の間我が斥候にして敵の斥候と衝突せるものありしも、特に記す可きの事故なかりし。

之より先き我が海軍は、敵を膠州灣内に壓迫するや、直ちに附近の掃海作業に従事し、九月中旬に至りて漸く安全なる一路を開通し得たるを以て、九月十八日、帝國陸軍の一部は、新上陸地點たる勞山灣に臨み、海軍陸戰隊の掩護によりて揚陸を開始せしが、士氣已に沮喪せる敵は、敢て我が行動を妨ぐるることなきのみならず、附近の地敵の一兵を見ざる有様なりき。

第三節 敵前進陣地の蹴破

前述せる如く、敵は數線の防備線を張り、此に我が前進を阻止せんとす、而も勇猛なる天兵は、早くも諸要地を略して敵の交通を絶ち、徐ろに攻圍戰に着手せり、時に天候亦漸く定まりて、軍の行動に自由を與ふるに至る、即ち龍口上陸軍は、即墨を中心として、流亭、膠州等の敵を驅逐し、之を占領したるが、後更に進んで膠州停車場を占領して列車を押收し、更に租借地境界の白沙河を挟んで敵の前哨と砲火を交へ、勞山灣上陸部隊は、上陸後直ちに運動を起して先づ王哥庄西南方の高地を占領し、次いで柳樹臺の敵を掃蕩し、北家に敵の逆襲を撃退せり、斯くして敵の前哨線は、早くも凡て我が撃破する所となりしが、時に九月二十四日、爾後軍は、進んで敵の前進陣地を奪はんとし、二十五日以來勇敢なる攻撃に出で、二十八日を以て殆んど目的を達し終れり、即ち左の如し。

▲王哥庄要地占領

九月二十日陸軍省公表

勞山灣に上陸せる部隊は十八日王哥庄（即墨東方約六里）西南方山頭に於て堅固なる防禦工事に據り機關銃を有する敵を攻撃し、日没頃遂に之を撃退せり、敵は彈藥、軍帽、帶革、眼鏡、天幕器具、寢臺等を遺棄し、倉皇退却せり、我に死傷なし。

▲柳樹臺占領

九月二十一日陸軍省公表

十八日夜、王哥庄西南方の山頭を占領したる我が勞山灣上陸部隊は、十九日夜更にその前方約二里、柳樹臺（青島東北方約七里）附近の鞍部を準備せる敵を攻撃せしに、敵は彈藥、糧食等を遺棄して退却せり、我が兵卒二名輕傷を負へる外損害なく、士氣旺盛なり。

▲北家附近敵兵擊退

九月二十五日陸軍省公表

帝國陸軍の行動は豫定の如く進捗しつゝあり、第一線に於ては、二十二日より二十四日迄各方面共著るしき變化なし。

二十三日、北家（王哥庄西南方約四里半）附近を占領せる我が小部隊に對し、機關銃を有する約三百の敵兵攻撃し來りしも、我は直ちに之を撃退せり、此の戦闘に於て我が卒一名戰死し、特務曹長一名、卒三名負傷せり、敵の死傷亦少からざるものゝ如し。

▲山東鐵道列車押收

九月二十日陸軍省公表

我が騎兵の一部は、十七日早朝膠州停車場を占領し、同日午前八時西方より來れる一列車を押收せり、該列車には自ら山東鐵道總裁と稱するもの乗車しあり、下車を許さずして監視中なり。

▲白沙河沿岸の戦闘

九月二十日陸軍省公表

我が騎兵隊は、十八日白沙河右岸流亭附近に前進し、午前十一時三十分頃より約一時間に亘り、對岸狗塔埠附近に據る敵と戰鬥を交へ、中隊長騎兵大尉佐久間善次戰死し、兵卒二名負傷せり、敵の死傷は少くも十名を下らず、此の戦闘は有利なる偵察の効果を收め、之によりて、白沙河左岸一帯の敵狀を確かめ、特に狗塔埠附近には砲數門を有する約二百の兵騎兵あることを知り得たり。

▲第一前進陣地線擊攘

九月二十七日陸軍省公表

我が軍は、九月二十六日、姑女山、石門山（流亭東南方約一里半）九水廟（柳樹臺西南方約一里）の線に向ひ前進し、午後三時以來敵の第一前進陣地線たる樓山後南方高地より黒見及び王家（龍口西方約一里）を經、龍口附近に亘る敵を攻撃し、午後六時三十分先づ黒見南方鞍部附近に據れる敵を撃退し、次で龍口方面の敵を撃退せり、樓山後南方

高地の敵は、二十六日夜迄は未だ退却するに至らず、引續き攻撃中なり。彼我の損害未だ詳かならざるも、已に確知せる我が死傷は、戦死陸軍歩兵中尉池部末尾外卒二、負傷歩兵中尉津田業外下士以下十一名なり。此の戦闘間、敵の砲艦は、絶えず海上より我が右側を砲撃し、夜間は探照燈を以て照射しつゝあり。

▲青島外方約二里に迫る

九月二十八日陸軍省公表

九月二十七日拂曉迄に、樓山後南方高地の敵を撃退し、更に進んで李村河口より李村南方高地を經、巫山東北金家嶺（李村東南方約一里半）附近に亘る線を占領し、敵を青島外方約二里の線に壓迫せり、此の戦闘間敵艦三隻は、海面より猛烈に我の右側を砲撃し其の行動を妨害したるを以て、我が飛行機二機は之に對し爆彈を投下したるに、敵艦艇は狼狽して、機關銃其他を亂射し、其の一機は數發の銃砲彈を、他の一機は十數發の小銃彈を受けたるも、搭乗者及び機體に損害なきを得たり。

▲孤山巫山線の占領

九月二十九日陸軍省公表

我軍は、二十七日より二十八日拂曉に亘り、敵陣地の攻撃に着手し、海陸兩面よりする敵の猛烈なる砲火を冒し、豫期に先んじ、午前十時より正午に亘る間に於て、孤山より

巫山に亘る一帯の高地にある敵を撃退し、同陣地を占領せり。敵はその大部を以て青島方面に退却し、海泊河左岸に停止したるが如し、又敵の巡洋艦

エリザベス、砲艦、驅逐艦各一は、我が側面及び背面に對し、盛んに砲撃せり、我が死傷將校以下約百五十、敵の死傷未だ詳かならざるも、我が手に歸したる捕虜將校以下約五十、戦利品機關砲四門なり。

此の攻撃に方り、堀内少將の指揮する部隊の速かに巫山及び其の西方高地を占領せるは軍全般の攻撃奏功を迅速ならしめたるに與つて力あり、又野戦重砲兵第三聯隊の全部戰鬥に参加し、特に滄口（李村西方約五吉米）附近に於て、敵艦の砲撃と對戦せる第六中隊の勇敢なる動作は、敵艦の射撃を牽制し、我が攻撃を容易ならしめたるの力大なり。此の戦闘間我が海軍は、敵のイルチス堡壘に向ひ砲火を送り、我が軍に有效なる援助を與へたり。

斯くの如くにして我が攻圍作業は着々として進行し、九月二十八日を以て、早くも攻圍の形勢全く成るを告ぐ、爾亦我が軍は、専ら敵本防禦たる諸砲臺の攻略に就て幾多の準備に急ぎつゝあり、一面十月一日を以て左の諸官を任命し、以て必要なる軍務に當らしむることとせり。

攻城砲兵司令官	陸軍少將	渡邊岩之助
兵站部長	陸軍歩兵大佐	高柳保太郎
碓泊場司令官	陸軍歩兵中佐	堀内龍明
同	陸軍輜重兵少佐	寺田武
重砲兵第三聯隊長	陸軍砲兵中佐	土井源市

第四節 飛行隊の活動

帝國陸軍は武州所澤に、帝國海軍は相州追濱に、共に飛行隊を置きて、専ら技術の練習に努めつゝありしが、今次の開戦に當り、之等飛行隊亦征途に上り、青島攻圍軍に参加して各々偉功を樹つる所あり、即ち陸軍航空隊は、龍口に上陸以來直ちに機の組立を終り、十三日を以て數回の試験飛行を行ひて好果を得るや、直ちに前進を起して一躍即墨附近に飛行し、爾來白沙河沿岸の第一前進地より李村河左岸一帯の第二前進地にある敵狀を偵察し、攻圍軍の作戦に多大の貢獻をなせしが、爾後青島開城に至る迄、或は偵察飛行に、或は爆彈投下に、數次殊功を奏す、左に録するは即ち陸軍省にて公表せる飛行隊活動の一部なり。

▲九月二十五日陸軍省公表

我が飛行機は、龍口上陸後同地より平度に、平度より即墨に、躍進的飛行を爲し、二十一日以來、連日概ね八百乃至千二百米突の高度を以て、白沙河左岸一帯の區域に亘り、交互偵察を實施し、之に依りて敵の第一前進陣地線に於ける防禦工事及びその配備を確認するを得たり、二十四日龍口（北家南方約一里）方面の偵察に任じたる一飛行機は、敵歩砲兵の射撃を受け、翼に七個の小銃弾を受けたるも、幸ひにして搭乗者及び機體に異常なきを得たり。

▲九月二十七日陸軍省公表

二十五日以來我が飛行機の行動概ね左の如し。
 二十五日朝、二機を以て李村河左岸の高地線を偵察す、此の際海泊河左岸より五十餘發の砲撃を受けたるも損害なし。
 二十六日早朝、一機を以て李村河左岸の偵察に任じ、他の一機を以て敵飛行機に對し之が掩護に任ず、該偵察間も、敵歩砲兵の射撃を受けたるも何等損害なし。

▲九月二十七日陸軍省公表

二十六日午後、我が攻撃戰鬥間一機を以て絶えず敵陣地上を飛行せしめ、時に該飛行機より投下する報告板に依り、敵の動靜を察知するを得たり。

▲十月十四日陸軍省公表

十月十日朝、敵の飛行機は、張村河谷及び李村河谷上に飛來し、爆彈を投下せるも我に損害なし。

十一、十二兩日、我が飛行機數機は、敵機に對し脅威的飛行を實施し、爲に敵機の飛行するものなし。

十三日、敵飛行機一機は、張村河谷上に飛來せしを以て、我が三機は交互敵機に向ひ突進し、茲に空中戦の端緒を開けり、敵機は我が襲撃に會ふや、急遽三千米突以上の上空に退避し、更に機首を青島方向に轉じて、遂に密雲中にその姿を没せり、我に何等の損害なし。

以上は我が陸軍飛行隊行動の一部なるも、海軍飛行隊亦頗る勇敢にその任を盡し、爲に敵艦を寒からしめたること少からず、その一部は加藤長官の報告に基づき、海軍省より發表せられたるを以て左に之を抄録せん。

▲九月十八日發表

十六日、山田大尉、大崎中尉は一飛行機にて敵港内を偵察し、且つ艦艇、無線電信所、發電所等に爆彈攻撃を加へ、一彈は確かに大形汽艇に命中して、爆煙の昇騰するを認め

たり、又同日、和田大尉、武部中尉も、他の飛行機にて港内主要海面上を飛翔し、有益なる瞰察を遂行せり。

▲九月二十九日公表

我が飛行機は近來益々飛行に努め、有益なる効果を齎らしつゝあり、その概況左の如し。
二十一日、和田大尉、藤瀬中尉の同乗せる一機は、青島港上を飛翔して、諸般の敵情を瞰察し、且つ爆彈を投下せるに、中二個は工廠埠頭南端防材の根元に命中して、之を爆破せるもの、如し、本作業中、敵艦及び陸上より猛射せられ、時に飛行機附近に炸裂せるものありしも損傷なし。

二十二日、山田大尉、飯倉中尉の同乗せる一機は、再び青島港内を瞰察し、且つ爆彈を投下せるに、中一個はビスマーク兵營の東角部に命中爆發せり、此日、又敵壘より砲撃を受けしも損傷なし。

二十四日、和田大尉、武部中尉は一機に、又山田大尉、大崎中尉は他の一機に同乗して青島港上を飛翔し、共に有益なる偵察を遂げたるのみならず、驅逐艦、砲臺、兵營、無線電信所等に爆彈を投下し、何れも多少の効果を收めたるもの、如し、又同日、金子少佐、藤瀬中尉の同乗せる一機は、勞山港外大公島一帶海面上を飛行して、機械水雷の

有無を透視し、よく其の目的を遂了せり。

二十七日、金子少佐、和田大尉、花島機關大尉は一機に、大崎中尉、藤瀬中尉は他の一機に、武部中尉、板倉中尉は又他の一機に同乗して、汎ねく青島港の内外を飛翔し、各種の有益なる瞰察を遂げたるのみならず、無線電信所及び飛行機格納所に對して爆彈を投下せり、此日、又十數發の砲撃を受けしも、概ね機の後方に炸裂し、一も損傷なし。

▲十月四日發表

二日、敵の一飛行機は、勞山港附近に於て、我が特務艦船に對し、爆彈攻撃を企つること二回に及びたるも、我に損害なし、和田大尉、武部中尉は直ちに一飛行機に同乗し、敵を追うて青島直上に到り、將に格納せんとする繫留氣球を發見して、之に爆彈攻撃を加へたり、效果不明なるも、一彈は其の近距離に於て爆發せり。

▲十月七日發表

我が航空隊は、三日及び五日の兩日、青島上に數回の偵察飛行を行ひ、且つ爆彈を投下し、敵を脅威せり。

七日午後四時、敵の一氣球はその繫維を失し、風の爲め青島上より東南に壓流せらる、我が驅逐隊追躡中なり。

第五節 英軍の參加

之より先、帝國が東洋平和の爲膠州灣の攻略を遂げんとするや、英國との間に約あり、英軍亦戰鬪に參與すること、成れりしを以て、英國は、その北清駐屯軍司令官たるバーナード少將をして、天津駐屯の英兵九百及び數百の印度兵に將とし、來つて攻圍軍に加はらしむ、バーナード少將即ち九月二十三日を以て勞山灣に來り、直ちに揚陸を開始して、二十四日前進を起し、二十五日その先頭部隊は即墨の我軍に合し、爾來青島の陥落するに至る迄、戰役の苦を分てり。

一面英國東洋艦隊の一部亦我が海軍と協同して、海上より青島攻撃に従ひつゝあり、九月二十八日我が海軍は、敵砲臺の威力を偵知し、併せて陸軍の前進を容易ならしめんが爲早朝より敵砲臺に向つて戦ひを挑みたるが、當時英艦亦之と協同して砲撃に加はり、海軍公報はその状況を報じて左の如くに云へり。

第二戰隊の一部は、英艦一隻と共に、大公島の北方より陸岸に接近し、オルチス及び灰泉角砲臺を主目標として砲撃を加へたるに、前者は之に應ぜず、後者は大口徑砲一門、中口徑砲三門を以て對戦せしが、我に何等の損傷なし、此の砲戰中、モルトケ砲臺方面より、時々大口徑榴彈を放ちたるも、我に達せしものなし、我が砲撃の效果は確知し得

山東鐵道は開
戰以來獨逸の
軍用に供せら
れつゝありた
り。

ざるも、側方觀測によれば、彈著概ね良好にして、特にピスマーク砲臺信號所間に落下したるものは、其の效大なりしが如く、中一個は、兵營と認めらるゝ煉瓦屋に命中し、又イルチス方面に於ては、著るしく塹壕を破壊せり、尙本日午後、第二戰隊の殘部を以て、更に灰泉角を砲撃し、且つ他の一戰隊を以て、浮山西方の敵を撃攘せんとす。

第六節 山東鐵道の押收

山東鐵道とは何ぞ、之れ獨逸が膠州灣租借と同時に、支那を強要して得たる所にして、青島より濰縣を経て濟南に到り、此に津浦鐵道に聯絡する鐵道なり、その經營は、獨支合辦の名の下にありと雖も、事實は、獨逸政府の特許により、獨逸の東亞方面投資銀行團の組織せる山東鐵道會社の専ら經營する所にかゝり、附近鑛山と共に、獨逸の山東經營上最も重要な地位を占むるものたり、且つ獨逸は、開戰以來本鐵道を軍用に供し、在青島の獨軍は、之を利用して、北京天津方面より戰員、武器、糧食等を輸送せるのみならず、沿線の獨人等は、或は支那官民を煽動し、或は地方新聞を買收して、帝國の行動に對し不利益なる事實を捏造、流布する等、獨り敵軍を利すること多きと共に、我が攻圍軍の作戰に故障を來すもの少からざりしを以て、我が龍口上陸軍は、豫定の計畫に基づき、九月二十六日、濰縣に入りて直ちに同停車場を占領し、支那政府の中立違反を云爲して抗議し來れ

之等の鑛山は
何れも獨逸の
經營にかゝる
ものなり。

るにも拘はらず、我が政府は、十月二日、支那政府に對して、山東鐵道押收に關する通牒を發し、同時に濰縣停車場を占領せる我が派遣軍をして、更に鐵道に沿ひて前進せしめ、行々停車場を押收し、遂に十月三日夜半を以て、その先頭部隊は濟南に入り、同停車場及び鐵道運轉材料全部を押收せしむ、時ひ我が手に歸するもの、機關車三十七輛、客貨車九百七十二輛、合計一千九輛なりき。

超えて十日、本隊亦濟南に到着すると共に、一部隊を派して博山炭礦を占領せしむ、炭礦は僅に唧筒機械の一部を取外せるのみにして、他に殆んど損傷なく、直ちに採掘に従事し得るの状態にありき、同日又張店守備隊の一部は、金家鎮鐵礦を押收し、十二日進んで洪山金鑛を押收し、斯くて獨逸が山東に經營せる事業の凡ては、我が押收する所となり了れり。

我が軍の山東鐵道押收に關し、支那政府の抗議を提出せること前記の如くにして、彼れが抗議の眼目とするところは、山東鐵道は獨支合辦事業にして、支那政府當然之が管理に當る可きものなること、交戰區域は濰縣以東を以て限りとす、然るにその以西に出て、恣に鐵道を押收し、獨人を捕縛する如きは、明かに支那の中立を侵害するものなりと云ふにあり、同時に世界の大局に盲目なる支那參政院議員等及び獨逸に心酔し居れる軍人輩等

は、獨逸に買収せられたる新聞紙と相呼應し、慷慨激越の辭を弄して、政府の外交軟弱を責むると共に、帝國の行動を批難して止まず。

然れども我が政府亦見る所あり、況んや大言壯語徒らに一時の快を貪らんとする支那議員及び軍人輩の如き我が眼中にあらざるをや、山東鐵道が獨逸の管理に屬するは、事實之を證して一點の疑義を挾むの餘地なきこと、交戦區域宣言と山東鐵道とは全然別個の問題なること、濰縣以西の鐵道を敵國に放任しおくは、軍事行動上頗る危険なること、且つ支那は敵國を援助せる事實あり、濰縣濟南間の鐵道守備兵撤廢を要求せるに之に同意せざるは何ぞ、要するに山東鐵道は租借地の延長なれば、日本軍が之を占領すると否とは、元來支那政府の關係す可き問題にあらざる事なりとし、反復之が説明を與ふると同時に、一方に於ては、着々豫定の行動を進めしめり。

此に於てか、支那政府亦内實帝國の行動が正當なることを認め、且つ強ひて我と争はんか、實力を以てその主張を貫徹するの外途なきを知るが故に、表面に於ては尙抗議を繼續しつゝあるにも拘はらず、一面自家官憲に對しては、日本兵山東鐵道守備の爲濟南府に入る可きは、政府の已に諾せる所にして、日本兵は鐵道守備の外、何等の禍心を包藏せざるを以て、毫も意を勞するに足らず、たゞ日本兵が中立違反の行動に出てざるやう注意す

支那政府は事端の發生を恐れてその軍隊をして日本軍か避けしめた

可しと電命するに至れり、故を以て我が兵の濟南に入るや、支那側よりは、交渉委員、中立委員、鐵路巡察長等來り迎ふるあり、鐵道押收の件に關しては、相互の意思頗る圓滿に疏通するを得、満足なる解決を見たり。而も尙彼が抗議の越旨を固執せるものや、蓋し後口の爲に口實を保留せるに過ぎざるなり。

第六章 青島攻奪

青島の險は旅順に若かず、その防備亦旅順の如く嚴ならずと雖も、二十世紀最新式の築城法に據れる幾多の砲臺は、儼として我を待つあり、天兵の猛勇を以てするも、容易に之が攻陥を見んこと、或は難かる可きを思はしむるものあり、我が軍は、九月末を以て攻圍の勢ひを完成すると共に、銳意攻城作業の進捗に努め、有力なる攻城砲の運搬を始め、攻圍陣地の完成を急ぐあり、一面海軍の乞を容れて、その重砲隊をして攻圍戰に参加せしむることとなり、正木海軍大佐は、之が司令として攻圍軍に加はり、一面陸軍の不足を補はんが爲、新に淨法寺旅團の増援を見、十月末を以て準備全く成るを告ぐるや、此に壯快なる總攻撃は開始せられ、連續一週間に亘る攻撃を以て、敵の主要砲臺を陥れ、遂に敵をして降を乞はしむるに至る。

第一節 聖恩無邊

敵が無謀なる砲撃を敢てして補給の途なき彈藥を浪費せしは、後日開城に際し、戦ふ可き彈丸を有せざりしとの口實を得んが爲なりとの説を爲すものあり。

九月二十六日を以て開始せられたる我が運動は、豫定以上の迅速を以て進行し、二十八日を以て早くも攻圍の形勢を成すを得たり、即ち我が軍は、此の線にありて攻城作業を完成せんとし、活潑なる運動に出でず、たゞ飛行隊の活動を見るに過ぎざりしが、已に本防禦線に壓迫せられたる敵は、健勝にも演襲を試み來れり、而も我が警戒は頗る嚴にして、彼等をして敢て乗するを得ざらしめ、多大の損害を以て退却するの止むなきに至らしめしが、爾後敵は、日夜盛んに巨彈を我が陣地に送りて、我が諸種の作業を妨害するに努め、時としては、一日一千五百發以上の砲彈を空費すること少からざりき。

斯くの如くにして青島内の敵は、宛として囊中の鼠の如く、早晚その運命の窮まる可きは明かなり、而も青島内には、婦女老幼を始め、幾多の非戦員の存在せるもの少からず、之等をして鐵火の慘に遭はしむるは、忍び難きの所に屬す、我が至仁至慈なる大元帥陛下には、之等の非戦員をして、なる可く兵火の惨害を免れしめんことを望ませ給ひ、特に青島攻圍軍司令官及び青島封鎖艦隊司令長官に對して命じ給ふ所あり。青島攻圍軍司令官陸軍中將神尾光臣及び青島封鎖艦隊司令長官海軍中將加藤定吉は、右の聖旨を奉じ、十月十二日軍使によりて之が傳達を企圖し、無線電信を以て、その趣旨を敵總督ワルデック

に通ずるや、彼は無線電信によりて傳へられんことを望めり、即ち同日午後一時を以て、無線電信を以て左の通牒を爲し、彼をして確實に之を受領せしめたり。

下名等は閣下の名譽ある守城に方り、現に青島に在る交戦國の非交戦者及び中立國人にして、攻城より生ずる損害を避けんと欲する者を救助せんとするに日本皇帝陛下の至仁至慈なる聖旨を閣下に通告するの光榮を有す、閣下若し此の聖旨に副はんことを望まるとに於ては、更に詳細なる通告を爲すべし。

青島攻城軍指揮官陸軍中將 神尾光臣
青島封鎖艦隊司令長官海軍中將 加藤定吉

青島總督宛

噫、聖恩廣大、日の照さざるなく、雨の霑さるなき尙何ぞ若かんや、敵總督亦感激措かず、直ちに無線電信を以て、明十三日午前十時軍使を東吳家村に送り、此に我が軍使と會して細部の協定を爲さんことを請ふ、我れ即ち之に應じて、攻圍軍參謀磯村大佐を軍使とし、副官山田大尉、同上野大尉を譯官として隨行せしめ、喇叭手を從へ、各從者一名を從へて、白旗を掲げて東吳家村に至らしむ、敵亦青島總督副官海軍少佐ゲオルグ、フオン、カイゼルを軍使とし、副官外數名の隨員と共に、約の如く東吳家村に來れり。

釋放非戦員は
米領事以下凡
て六名なり、

兩使相會するや、獨軍使は、我が 大元帥陛下の至仁至慈なる 聖旨に對し、總督以下 感佩に堪へず、即ち 聖旨に基づき、非戦員救出に關する細目の協定を爲さんことを乞へり、我が軍使は、此に改めて日本文にて認めたる 陛下の聖旨を公式に交附し、非戦員引渡手續につきて、双方より提案協議せる結果、十五日正午、膠州灣對岸なる塔埠頭沖に於て、彼我の間に之を受授することゝなれり、然れども當時引渡し人員等については何等決定することなかりき、斯くて十五日に至り、我が軍よりは山田大尉を受領委員とし、戎克に搭して豫定の地點に至らしむ、彼れ亦海軍大尉ベツツハイムを引渡委員とし、快遊船を驅りて來り、米國領事及び獨逸非戦員、看護婦各一名、支那人ボーイ一名を送り來れり、時に海上風波荒く、山田大尉は彼の快遊船に移りて受授手續を了し、彼は頗る優遇に努め、引渡人名簿及び攻圍軍司令官に宛てたる感謝狀一通を提出せり、山田大尉即ち之等と共に米國領事以下を受取りて戎克に移らしめ、將に相分れんとするや、彼は喇叭を吹奏して別れを告ぐ。之等の非戦員は、膠州灣對岸に上陸せる後、山田大尉以下兵員十名に護られ、濟南府に到着せしが、此に我が受領委員より支那官憲に引渡され、天津に送らしめき。米領事を始め、一行凡て我が好意を謝せざるなし。特に獨軍の蠻行頻々として傳へらるゝの時に際し、我が此の博愛人道的行爲は、如何に世の注意を惹きたるか、當時露國

のダリナヤ、オクライナ紙は、我が 大元帥陛下の仁慈なる思召に關して、特に社説に於て論じて曰く、

日本皇帝陛下が 青島籠城の獨逸軍に對して下されたる聖旨は、眞に博愛主義の發揮と云ふ可きものなり、此の聖旨の結果として、獨逸婦人小兒數名、及び米國領事等の退去を見たり、日本は遙に歐洲基督教國を超越せり、獨逸は何の面目ありて後日日本人に見ゆるを得んや、最少限としても、獨逸派の宣教師は、亞細亞に於て博愛を説くの權利を失へるものなり云々。

然り、武装なき都市を砲撃し、無辜の良民を殺戮し、歴史ある建築物を破壊し、婦女を姦し老幼を虐げ、恬として恥ぢざる獨逸軍隊の亡狀に照らし、我が仁慈なる行動を見れば、眼中人道の何たるかを解せざる獨人も、恐らくは愧死す可きなり。

第二節 高千穂の最期

八月二十七日膠州灣の封鎖宣言以來、我が封鎖艦隊は、險惡なる天候と戦ひつゝ、よくその任務を全うすると共に、一面附近海面の掃海に従ひ、敵水雷の除去に努めつゝありしが、爲に不測の災害に罹れる艦艇亦少からず、二等海防艦高千穂亦之が犠牲となり、十月十七日夜半、その二百餘名の乗員と共に、膠州灣外の藻屑となり終れり。

ルーヴァン市の
煉打、リエ
ーヤユの虐殺
等獨人の蠻行
擧げて數ふ可
からず。

十月十九日海軍省公報に曰く、

膠州灣外哨戒勤務中の軍艦高千穂、一昨十七日夜半、敵水雷の爲に沈没せり。

時に敵驅逐艦エス九十號の封鎖を破りて逸出せるあり、高千穂沈没の時刻と、その逸出の時刻と吻合せるのみならず、種々の状況により、高千穂の沈没は、エス九十號が發射せる水雷に原因せるなきや大に疑はしきものありたるを以て、世間沈没原因につきて云爲するもの少からず、然れども、高千穂乗組員中現場に在りて生存せるもの僅に三名に過ぎずして、艦長伊東大佐以下二百八十餘名は、悉く艦と運命を共にしたるを以て、没沈眞因につきては殆んど知るに苦しましむるものありき。即ち公報は、前記の如くにして發表せられたるが、更に研究の結果は、高千穂沈没の原因は、果して世説の如く、エス九十號の發射せる水雷にあること明瞭となるに至れり。

エス九十號は、敵艦艇にして現に膠州灣内に封鎖せられたるもの中、最も新式艦にして、その速力一時間二十六節を算し、頗る快速なるものあるを以て、我が陸海の脅威日に甚だしく、青島の運命將に窮せんとするに當り、敵總督は、之に重要なる任務を授け、萬一を僥倖して、我が封鎖線を突破せしめんとす、時に十月十七日、夜間うして呎尺を辨ぜず、彼れ即ち竊に港外に出で、我が哨艦の目を掠め、逸走せんとせり、此時に當り、

エス九十號の乗組員は、艦長海軍大尉ブルネル以下總計六十一名を算す。

不幸なる高千穂は、彼の前面近距離にありて、専ら哨戒任務に従ひつゝありしが、黒暗々たる海上にありて、未だ彼を發見するに至らず、彼れ即ち竊に水雷を準備し、高千穂を襲ひ、その命中を見るや、更にその姿を没して逸走を續けぬ、而も我が哨艦は最も嚴なるものあり、幾許ならずして發見する所となるや、數隻の驅逐艦及び快速なる巡洋艦は、之を急追し猛撃を加ふ、彼れ即ち狼狽措く所を知らず、全速力を以て逸走を試み、遂に山東省港岬附近石血所の海岸に乗り上げ、擱座破壊し終れり、而して此の地己に中立地帯なるを以て、我は此に戦闘行爲を行ふ能はず、その全く運轉の不可能なるを認めて、空しく根拠地に歸れり、敵艦乗組員亦艦を捨て、上陸し、三哩を潜行して日照に出でしが、同地に於て支那官憲の抑留する所となり、武装を解除して上海に護送せられ、支那政府は之を南京に抑留せり。

あゝ軍艦高千穂、不幸なる運命に呪はれたる老艦の最期よ、我が當局は、精査の後二十日を以て沈没の原因及び當時の状況について發表せり、即ち左の如し。

軍艦高千穂沈没の當時、附近の海面一帯に粉砕せる浮流水木の無數なりしこと、約二十海里を隔つる勞山港より、その爆發の大煙光を望見し得たること、及び生存者僅に三名なりしこと、並に該生存者の言より判斷すれば、その沈没は敵驅逐艦エス九十號の發射

高千穂は排水
三千七百餘噸
現在帝國軍艦
中最も古きも
の唯一なり。

せる魚形水雷を受け、延いて火薬庫等の激烈なる爆發を誘起したるに因るものと信ぜらる。又、當時艦長の艦橋附近に在りしことは、其の負傷の状態及び軍裝手袋を着けたること等に依りて明かなり、生存者の言に據れば、同艦の沈没後、波間に漂流せる數名の艦員は、『君ケ代』を奉唱し、又は『此處は御國を何百里』の軍歌を唱へ居たりと、以てその如何に專念君國を思ひ、從容死に就きしかを察知するに足る可く、本職は、深く艦員が皇國軍人の本領を發揮したるを喜ぶと同時に、益々壯烈なる其の戦死を痛惜して斷腸の念に堪へざるなり。

高千穂は、實に明治十八年の進水にして、英國アームストロング會社の建造にかゝり、十九年四月竣工して、同年七月横須賀に回航せられ、爾來二十七八年戦役に際しては、最も偉功を樹て、三十七八年戦役において、第二艦隊に編入せられて、蔚山沖、日本海等の海戦に従ひ、四十年豫備艦編入、練習艦として用ゐられつゝあり、今次の戦亂起るに及びて警備艦に編入せられ、次いで戦列部隊に編入せられて出征せるものなり。現に二等海防艦として、帝國海軍の威力に何等重要な關係を有せず、且つ己に功成り名遂げたる老艦多くは惜むに足らずと雖も、たゞ乗員二百九十餘名の共に亡びたるは、帝國海軍の一大恨事なりと云はざる可からず。

第三節 總攻撃の準備

我が攻圍軍は、九月二十六日より二十八日に亘る攻撃を以て、早くも敵前進陣地の凡てを奪ひ、近く敵の本防禦に肉薄せしも、近世築城術の粹を盡くしたる最新式要塞の攻略に當りては、自ら一定の戦則なかる可からず、徒らに強襲之れ事とし、無謀の突撃を加へんか、假令攻略の目的を全うするも、爲に我が損害亦少からざる可く、特に敵は僅に青島要塞のみにして、之が攻略は敢て急を要せざるものあるを以て、我が軍は、能ふ限りの準備を盡くし、最も些少の損害を以て目的を達せんとし、爾來各隊は攻城作業に忙殺されつゝありき。

雨中汎溢せる
河水を横ぎり
て重砲を運搬
するの苦は、
蓋し頗る大なるものあり。

此の間十月十四日夜より三日間に亘る暴風雨は、我が作業を妨害すること甚だしく、各方面ともに、河川は汎溢して道路を没し、塹壕亦濁水の漲溢する所となりて、兵士は水中に立たざる可からざるの困難を嘗め、物資の流失せるもの亦少からず、前線、後方部隊共に困厄を極めたるが、而も堅忍勇武なる我が軍は、萬難を排して刻苦勵精し、頗るたる敵の砲撃を冒して、着々豫定の作業を進捗せり、即ち勞山灣方面より即墨附近を経て攻圍線背後に至る輕便鐵道の敷設、攻城諸廠の設置、大、中口径砲と其の彈藥運搬、諸般攻城材料の集積等凡て完了せられ、威力猛烈なる重砲は、各地に配備せられて、今はたゞ總

此の間敵は日
日千發乃至千
五百發の砲彈
を我が陣地に
送りて妨害を
試みたり。

攻撃の開始を待つのみ、此の間淨法寺旅團は新に攻圍軍に加はりて勞山灣に上陸し、直ちに所定の配備につくと共に、海軍重砲隊は、海軍大佐正木義太、海軍少佐江藤恭助を幹部として之を參加することゝなれり。

我が攻城準備は、敵の猛烈なる妨害を冒して、着々として進捗し、十月二十九日に至りて、全く整頓を告げぬ、此に於てか十月三十一日、天長節祝日の佳辰を以て總攻撃開始の事は決せられ、之に先だちて我が諸隊は、攻城砲兵掩護陣地を占領すべく立てり、即ち二十九日の夕を以て、攻圍線を四方、韓家庄、東吳家村、田家村、辛家村の線に進めぬ、敵亦猛烈なる砲撃を以て我が運動を阻碍せんとせしが、我は不撓不屈の精神を以て豫定の行動を取り、三十日夜迄に全部目的の地點を占領して、攻城砲兵をして所定の陣地に就かしむることを得たり、由來攻城砲兵の射撃は、堅固なる要塞に對し、歩、工兵を推進す可き唯一の原動力となるものなるを以て、攻城砲兵をして有利の陣地を占めしむるは、要塞攻路の第一歩たり、而して我が軍は、所定の總攻撃開始の期に先だつ一夜、三十日夜を以て全くその目的を達し終れるなり。

第四節 青島總攻撃

十月三十一日、秋空一碧、片雲を止めず、獨り母國と云はず、苟くも日本國民の在ると

ころ、日章旗影鮮かに、我が皇の萬歳を祝するその天長の佳節、午前六時を過ぎること十分、我が青島攻圍軍の中央陣地に一發の砲聲は轟けり、續いて一發又一發、全軍の砲兵之に應じて、續々として砲門を開けり、須臾にして全陣地より打出す砲聲は、宛として百雷の一時に轟くが如く、巨彈は魔々の音を發して敵砲臺、蟬集せり、海軍亦之に策動して盛んに巨彈を飛ばし、爆煙青島の一角を包んで、天日爲に光なからんとするの概ありき。斯くて砲撃は、十月三十一日以來晝夜間斷なく續行せられ、此の間我が攻圍軍の歩兵工兵隊は、漸く敵砲臺に肉薄し、突撃に移らんとするなりき。即ち十月二十九日を以て、四方、韓家庄、東吳家村、辛家庄の線に進出せる各隊は、十一月一日にはランギール停車場より西吳家村の北方を経て巫山所に亘る線に進み、四日には早くもボンブ街より西吳家村南方楊家庄の東方、及び巫山所の西方に亘る線に進み、六日には海泊河左岸の河口より楊家庄西方小湛山の麓に亘る線を占領し終れり。

當時早くも敵
聖壕内の話聲
を聞き得たり
と云ふ。

當時我が軍の配備は、右翼に淨法寺旅團の一部隊、第一中央に英國軍、第二中央に山田旅團、左翼に堀内旅團を備へ、各隊相呼應して前進工事に全力を注ぎつゝあり、斯くて六日に至りては、各隊早くも敵前に近づき、その最も近きは敵第一線を距ること三乃至五米突、遠きも五十米突に過ぎず。

敵總督も遂に
その抗し難さ
を知り、降伏
後の準備を爲
せるなり。

突撃の準備は成り、戦機は正に熟せり、今はたゞ最後の突撃を餘すのみとなりぬ、此に於てか師團は、六日夜を期して敵壘に肉薄し、第三攻撃陣地を占領する豫定なりしが、第一線諸隊中には、晝間己に之が占領を了せるものあり、且つ己に突撃準備の工事を爲しつゝあるものありき、師團長即ち午後四時を以て、之等の諸隊に命ずるに、突撃準備工事を續行し、且つその突撃實施は更に命令を待つ可きを以てせり、然るに、敵は此日市街後方に位置せる臺西鎮砲臺を自爆せるのみならず、その飛行機は、遠く西方に逸走せるまゝ歸來の形勢なく、日没後に至りては、敵の防備線は著るしく静肅となり、その砲聲亦全く之を聞くを得ずして、敵陣の形勢一變せるものあるを思はしめき。

我が中央軍中央堡壘に向へるは加藤聯隊なりしが、同夜十時を以て、前面の鐵條網を破壊し終り、更に外壕を爆破して、突撃路全く成るを告ぐ、而も敵は、我が作業に對して何等の妨害を試みざるのみならず、壘内間として聲なし、此に於て我が軍は、敵意の如何を知るに苦しみ、熟練なる斥候を派して壘内を窺はしめしに、意外にもその防禦頗る薄弱なるを體得たるを以て、七日午前一時半を期し、果敢なる突撃を實行し、殆んど何等の抵抗を受くることなくして、同堡壘の咽喉部に至る迄確實に之を占領すると共に、恰も壘内に在りし敵兵二百を捕虜とせり。

此の時に當り、爾他の諸壘にありては、敵は依然その陣地を固守せるのみならず、我が歩兵の前進作業に對しては、光弾及び機關銃を猛射して活潑なる抵抗を試みつゝありて、我が各隊は突撃準備に怠りなかりしが、已にして中央堡壘の我が手に歸するや、沈黙を守りつゝありし之等の砲臺は、一齊にその砲門を開きて猛火を中央堡壘に集中し、爲に同堡壘を占領せる加藤聯隊の第二中隊は、忽ちにして數十名の死傷を生じ、頗る苦戦に陥るの止むなきに至りしも、よくその占領を確實にし、僚隊の進撃を有利ならしむるを得たり、次いで山田旅團長は、その左翼部隊をして、更に臺東鎮堡壘に向はしむ、時に午前四時半なりき。此の時敵の抵抗最も猛烈なるものあり、突撃隊は、敵の十字火を蒙りて死傷百餘名を生じ、苦戦甚だしく、遂に全滅するなきやを危ぶましめしが、勇敢なる將士は毫も屈する所なく、猛烈果敢なる突撃を試みて、午前五時十分遂に同堡壘の占領を確實にし、更に銃砲火を冒して、他の一部隊と共にモルトケ、ピスマーク及びイルチス砲臺に殺到し、午前五時半に至りてイルチス山麓一帶の陣地皆我が手に歸せり。

一方右翼部隊たる堀内旅團は、小湛山北砲臺を目標として之に迫り、六日夜を以てその外壕を爆破せんとし、已に之を各僚隊に通報しありしも、堅硬なる花崗岩より成れる山腹は、坑道作業を妨ぐるに夥しく、到底豫期の時間中に之が目的を達する能はざるに至れ

り、加ふるに中央堡壘方面の戦況は著るしく發展し來れるを以て、同隊亦逡巡を許さず、即ち豫定を變じて、突撃によりて之が奪取を了せんとし、猛襲又猛襲、午前五時十分に至りて遂に之が占領を確實にし、更に一部隊を派して、イルチス東砲臺に向はしむ、敵亦防戦最も努め、彼我の砲彈、銃彈交々雨下し、壯絶慘絶又凄絶、時恰も朝暉光を放てるも、哨煙霧の如く四顧暗澹たり、此の間我が勇敢なる各隊の兵士は、喊聲雷の如く、突撃に次ぐに突撃を以てし、七日午前六時二十分に至りて、イルチス山一帯の高地は、山田、堀内兩旅團の手に收められ、モルトケ山一帯の高地亦山田旅團の占領する所となり、敵の防備はその中央に於て突破せらるゝに至れり、然るに敵の右翼なる小満山堡壘は、尙餘命を保ちて、防戦に努め、頑強なる抵抗を繼續しつゝありしを以て、堀内旅團長は一部隊を割きて赴き援けしめ、猛烈なる襲撃を敢行して、六時四十分遂に略取し了れり。

淨法寺旅團は、海岸堡壘に迫りしが、此の方面の敵は、最も頑強にして、小満山砲臺と共に最後迄頑強なる抵抗を試み、我が兵その第一外壕の鐵條網を破り終れるにも拘はらず尙依然として頑固の抵抗を續け、次いで我が工兵隊進んでその咽喉部に位置せる火藥庫を爆發せしめたるも、尙屈せずして防戦に努めしが、我が突撃部隊の外壁に剽到するに及びて、遂に力屈し白旗を掲ぐるに至りぬ。

バーナーヂストーン少將の率ゐる英兵は、我が淨法寺旅團と山田旅團との中間にありて、臺東鎮東堡壘を目標とし、等しく之が奪取に従ひつゝありしが、該堡壘は、七日午前六時三十分を以て、英軍援助の任にありし我が工兵隊の手によりて攻略せられ、更に猛進してモルトケ高地を奪取するに至れり、斯くの如くにして英軍の攻撃目標は、我が工兵の殊功により之が占領を見たりと雖も、英軍特にその印度兵が、續いて敵陣に突入せる勇敢なる行動は、我が全軍の認むる所にして、何れも賞讃の辭を惜まざりしと。

敵が最も堅固なる防備を施し、難攻不落と稱したりし青島要塞も、十月三十一日より十一月七日に亘る我が攻撃によりて、その主要なる堡壘は悉く攻略せられ終り、今や全く防禦の術なきに至る、敵即ち天文臺上高く白旗を掲げて降伏の意を示し、同時に各所の敵壘には燦として日章旗の輝くを見、全軍の將士は期せずして萬歳を高唱す、その聲宛ながら天地を震撼するに似たり。

此の日我が第一線部隊に於て、敵の投降して捕虜となれるもの將校以下約五百名を算し、又陥落と同時に敵總督は開城を申し込み來れるを以て、我は香椎參謀を軍使として派遣し、敵軍使と會見して商議の結果、山梨參謀長全權委員となり、磯村大佐、英國武官カルスロップ中佐、山田大尉以下を隨へ、午後二時敵委員とモルトケ兵營に會し、開城に關する諸

般の協定を爲し、青島市街は、幸ひにして慘憺たる市街戦を見ることなく、我が手中に歸しぬ。

青島我が手に歸するや、政府はその處分決定に至る迄、此に軍政を布くこととし、即ち必要なる諸官を任命したるが、その主腦左の如し。

- | | | |
|-----------|---------|-------|
| 青島守備軍司令官 | 陸軍中將 | 神尾光臣 |
| 同參謀長 | 陸軍少將 | 淨法寺五郎 |
| 外交事務 | 大使館參事官 | 船越光之亟 |
| 要港部司令官 | 海軍少將 | 岩村團次郎 |
| 知港事兼防備隊司令 | 海軍大佐 | 廣瀬順太郎 |
| 青島軍政署長 | 陸軍歩兵中佐 | 吉村健藏 |
| 李村軍政署長 | 陸軍歩兵中佐 | 多賀宗之 |
| 國際法規 | 陸軍囑託 | 兵藤三郎 |
| 赤十字病院長 | 陸軍一等軍醫正 | 田中彌太郎 |
| 警察事務 | 陸軍憲兵少佐 | 神田長平 |
| 測候所長 | 中央氣象臺技師 | 大石和三郎 |

- | | | |
|-------------|--------|-------|
| 稅關事務 | 稅關副事務官 | 天宅敬吉 |
| 會計檢査(陸軍省所管) | 檢査官 | 三輪一夫 |
| 同(海軍省外務省所管) | 同 | 平塚定二郎 |
| 山東鐵道運轉管理 | 陸軍歩兵中佐 | 佐藤安之助 |
| 濟南領事 | 領事 | 林久次郎 |
| 要塞軍機調査 | 工學博士子爵 | 大河内正敏 |

第五節 淨法寺旅團の奮戰

前已に記せしが如く淨法寺旅團は我が右翼にありて敵の海岸堡壘に迫れるもの、初め同旅團の兵力は、濱松の第六十七聯隊(隊長高野大佐)のみなりしが、十月二十九日、旅團司令部の戦線に進出するに當り、新に静岡第三十四聯隊の一個大隊を増援せらる、當時旅團にありては、早くも前進作業に着手しつゝあり、敵は連夜探照燈を照射して我が作業を妨害せんと試みたるも、我亦最も勇敢に作業を進め、十一月一日、總攻撃開始後二日、早くもランギール停車場より四房山と海泊河との中間地區に第一攻撃陣地を構築せり。

此の間濱松聯隊の山田中尉は、十月三十日夜、將校斥候として偵察に従ひ、敵彈を胃して深く敵地に入り、偵察に努むるところあり、歸途大膽にも敵地雷十三個を發掘して持ち

歸れり、三十一日、旅團方面に位置せし由良重砲兵團は、その砲門を開きて猛火を敵陣に送り、多大の効果を奏したるが、就中大港附近の浮船渠は、我が砲彈を受けて大破し、半ば沈没するに至れり、此の日敵艦我が右翼海面に現はれ、旅團に向つて砲撃せんとしたるも、我が砲火の脅かす所となりて逃走し終りぬ、斯くて旅團は、重砲火に掩護せられて、着々前進作業を進め、海泊河左岸の地區に沿うて第二攻撃陣地の構築を終ると共に、更に前進作業を続けつゝありき。然るに此の方面は、地質疎鬆なるのみならず、海岸に接近せるを以て、壕内到处水出し、作業に非常の妨碍を與へ、三日の強雨に際しては、連日の作業に疲勞せる各兵が、膝以下を水中に浸して、立ちながら眠らざる可からざるに至らしめき、次いで四日夜、第六十七聯隊の第四中隊は、ボンブ街を占領して、同所の守兵二十名を捕虜とし、旅團の作戦上に非常の便宜を與へ、又第八中隊は、臺東鎮に通ずる路側にありし敵の監視哨を奪ひ、多數の武器彈藥を鹵獲せり。

此の間前進作業亦着々進捗を見、六日夕に至り、第三十四聯隊の第二大隊は、第二陣地の占領に着手し、已に同陣地に進出しありたる第八中隊の右翼に第六中隊を増加し、更に第七中隊を増加せんとして、その一個小隊を前進せしむるや、豫て機を窺ひつゝありし敵は、之を發見し、午後七時一發の烽火を揚ぐると共に、自動車及び自轉車を列ねて此の方

面に駛走し來り、その約百名は、機關銃八門を携へて、海岸堡壘と海中砲臺との中間に展開し、モルトケ附近の砲臺亦之に應じ、敵艦亦砲煩を開きて猛火を集中し來れり、島出大隊長即ち豫備隊を進めて増援せしめ、山砲隊亦之に参加して盛んに應戦し、激戦四時間の後、敵遂に多數の死傷を遺棄して敗走したるも、此の急襲は、彼れの深く計畫せる所如く、その勇敢なる動作は賞讃に價するものありきと。

爾後島田大隊は、第三攻撃陣地にありて、直ちに坑道作業に移り、鐵條網を破壊し、第六十七聯隊亦敵の猛火を冒して鐵條網を破壊し、突撃の準備全く成りたるも、此の方面に敵の砲火は最も猛烈にして容易に突撃實施の機を得ず、旅團は、敵前にありて夜を徹するに至りしが、友隊の戦況益々發展するに及びて、七日午前六時、決然突撃に移り、猛烈なる勢ひを以て敵陣に肉薄せり、而も敵の銃砲火は益々盛んにして、我が突撃隊は非常の苦戦に陥り、死傷相續くの慘況を呈せしも、更に發奮して突撃を續行し、六時三十分將に敵壘に突入せんとするや、敵遂に屈し、白旗を掲ぐるに至れり、旅團は即ちその一部隊をして、直ちにモルトケ山に向はしめ、七時同高地一帶の陣地を占領するに至る、當時敵の抵抗が如何に激烈なるものありしかは、旅團司令部に通ずる電話線悉く敵彈の爲に切断せられ、一時通信の途なきに至れるを見て知る可し。

此の戦ひに於て、淨法寺旅團の損害は、死傷將校以下六十名を算し、戦鬪の激烈なりしに比し輕微なるを得たり。

第六節 山田旅團の激戦

青島攻圍軍中最も難戦に遭遇せるものは、實に中央軍たりし山田旅團なりとす、戦後山田旅團長が『多くの部下を殺したり、哀涙何を禁ぜん、然れども戦ひは勝てり、之れ實に四十八、五十五兩聯隊の努力に依る、余は忠勇なる戦死者の遺骸の其の堡壘外に有りたるものも、凡て之を壘内に運ばしめき、敵の堡壘に突進する心は、堡壘内に攀ち登りて始めて忠魂も浮かぶを得ん、戦鬪の經過は、請ふ去つて副官に問へ、余自ら語るに忍びず』と云ひて、滂沱たる涙を禁じ敢へざりしと。將軍が部下を思ふの情は、やがて部下が將軍の爲に死せんことを思へるもの、此の好個の將軍と、此の忠勇なる兵士と、之れ我が大日本國の寶なり、之ありて青島何かあらん、旅順何かあらん、吾人は、海上に敵なしとせらるゝドレットノートも、我が忠勇なる軍人の前には、大にその威力を減す可きを思ふものなり。

嗚呼、壯烈無比の戦蹟を青島要塞に遺したる山田旅團、旅團は、久米留第四十八聯隊及び同第五十六聯隊の外、機關銃隊、工兵獨立一中隊及び迫撃砲隊より成り、九月第一線に立つの後實に三十有九日間敵彈雨下の間にありて、陰忍一發も酬いるなく、黙々として散兵壕及び交通壕の掘開作業を續けつゝありたるなり、此の間山東の天候は甚だ佳ならずして、數次猛悪なる風雨の來襲を受け、作業の困難、進退の不便云ふ可からざるものあり、常に多大の困苦と戦ひつゝ、忠勇なる將士は、毫も沮喪することなくして、熱心その作業を進め、十一月六日夕刻には、已に突撃陣地を完成し、敵の外壕を距る五米突乃至五十五米突の地點に肉薄し、四十八聯隊は臺東鎮堡壘に、五十六聯隊は中央堡壘下にありて、突撃の機を待てりしなり。

此の日敵は、一般に靜肅にして、各壘多く沈黙を守り、特に中央堡壘は、全く砲撃を絶ち、壘内鬨として聲なかりき。午後十時、五十六聯隊は、將に突撃に移らんとし、先づ一工兵軍曹をして敵情を窺はしむ、軍曹即ち單身敵の外壕に入り、鐵條網を切斷し、更に地雷の有無を踏査し、堡壘の胸牆に攀ちて内部を窺ふに、寂として死せるが如く、又一兵の影なし、即ち鐵條網の斷片を收めて歸來し、山田旅團長の面前に於て具さに敵狀を語る、此に於てか旅團長は、一部隊を派して堡壘を奪取せしめんとす。第十中隊の中村少尉は、決死此の重任に當らんことを乞ひ、歩兵一個小隊、工兵一個分隊、迫撃砲二門を率ゐ、且つ三日分の口糧を携帶して死地に入れり、時正に六日夜半正十二時、夜色沈々として月光

淡く照らし、凄惨の氣全山に滿つ。午前一時、中村少尉は狀況を報告して曰く、「斥候は今敵胸牆前五米突にあり」と。全隊勇躍後報を待てり。

中村少尉の小隊は、敵の胸牆に沿うて堡壘の咽喉部に出て、別に一部隊をして内部を捜査せしむ、時に敵兵四五、我が襲撃に驚き、狼狽して遁れんとし、我が兵と交通壕内に衝突して、此に猛烈なる格闘は開始せられ、敵兵十數名は撃殺する所となりしが、我れ亦死傷數名を出すに至れり、一部は更に進んで地下室に入りしに、電燈の光戸を漏るを見、扉を亂打して高聲を發するや、悠長なる敵は、此の時尚眠を貪りつゝありしが、我が襲撃に狼狽して、「堪忍、堪忍」と叫びつゝ、二百餘名一時に降伏し了れり、即ち直ちに狀を具して聯隊本部に報じ、更に旅團司令部に報ぜらる、時に午前一時を過ぐることに十分なりき。

中央堡壘は斯くの如くにして全く我が手に歸し、攻圍戦中先登第一の名譽は五十六聯隊の占むる所となれり、旅團長即ち第十中隊の殘部に附するに機銃隊を以てし、以て占領を確實にせしめ、更に沖大尉の第九中隊をしてイルチス砲臺に突進せしむ、沖大尉は、日露戦役に際し、雷名を馳せたる志士沖禎介氏の舍弟にして、頗る沈勇、敵の照明彈下、夜尙晝の如き下にありて、悠々兵を進め、イルチス山下に迫れり、時に七日午前三時四十

分、次いで後方豫備隊たりし第一大隊は戦線に進められ、第一中隊はイルチスに、第三中隊はビスマークに向ふ。

旅團の他の聯隊たる第四十八聯隊は、松前大佐の指揮下にありて臺東鎮砲臺に向ひたるが、偵察の結果、拂曉迄に同堡壘を突撃せんことを決し、旨を旅團長に致す、旅團長亦之に同じ、直ちに之を執行す可きを命ぜり、時に午前五時を過ぐる五分、曉天尙暗く、霜氣野に滿つるの間にありて、松前聯隊の第一大隊（一個中隊）は右方に、第三大隊（一個中隊）は左方に位置し、決然として突撃に移れり、此の時や、右翼淨法寺旅團及び英國軍の戦局尙發展せざりしを以て、突撃隊は、海岸堡壘よりする側射を受け、更に小湛山北堡壘の機關銃火亦雨の如く降り、突撃隊の苦戦云ふ可からず、而も勇敢なる我が工兵は敢て屈せず、敵外壕に迫りて之を爆破し、或は鐵條網を破壊して、歩兵の爲に進路を開き、突撃を容易ならしめたるも、兩堡壘よりする側撃と、敵壕よりする手擲爆彈との爲、突撃隊は多大の損害を被り、死屍積んで壕内を埋め、流血霜を染むるの慘況は、轉た凄絶の感ありしめき、就中第四中隊の如きは、中隊長北野大尉先づ斃れ、次いで小隊長小倒れ、將校は僅に安部少尉を残せるのみ、中隊殆んど全滅の悲運に會せんとす、然れども勇敢なる突撃隊は更に屈せず、突撃又突撃、五時十分を以て確實に同堡壘を占領し、敵兵二百を捕虜と

せり、次いで松前隊の一部は、更にモルトケに突撃して六時十分イルチス砲臺上高く日章旗の翻へるや、五十六聯隊旗又朝風に翻へり、十五分ビスマーク、四十分モルトケの各砲臺亦悉く山田旅團の手に落つるに至れり。

此の戦闘間山田旅團の損害は、戦死將校二下士以下九十七、負傷將校八、下士以下百七十九の多きを算し、敵の捕虜六百を獲たり。

第七節 堀内旅團の戦蹟

敵前進陣地の攻略に當り、巫山の戦鬪に殊功を奏して、その驍名を誦はれたる堀内旅團は、依然軍の左翼にありて、總攻撃に従ひ、有名なる小湛山堡壘より海岸に亘る一帯の敵右翼陣地に迫れり、即ち第二十三旅團の第五十五聯隊は、長堀大佐指揮の下に小湛山北堡壘に向ひ、第四十六聯隊は、鶴見大佐の指揮下にありて、小湛山堡壘より海岸に亘れる敵陣地に殺到することとなりぬ。

之より先き兩聯隊は、孤山、巫山の線を占領して以來、敵彈雨下の下にありて、堅く沈黙を守りつゝ、日夜前進作業に従ふこと實に三十有餘日、十一月六日に至りては、その前進作業は大に進捗して、近きは敵前十米突、遠きも五六十米突を出でざるの點に進めり、而も此の作業は、決して容易にあらずして、鶴見聯隊の如きは、右翼淨法寺旅團に於ける

が如く、海岸に接近せるが爲、壕内の出水甚だしくして、泥水中に困難なる作業を續けたること少からざりき、又長堀聯隊の前面にありては、堅硬なる岩石所在に縦横し、爲に坑道の堀鑿を妨ぐることも少からず、時としては全く進捗の道なくして、新なる方面に變更せることありき。而も勇敢不屈なる我が將士は、飽く迄沈着に飽く迄熱心にその作業を進めて、六日に至りては、略豫定の地點に達するを得たり。

即ち堀内旅團は、七日拂曉を以て北堡壘を爆破するの計畫を立て、僚隊に通じありしがその右翼に連繫せる山田旅團の中央堡壘に對する攻撃著るしく進捗せるを以て、旅團亦將校斥候を放つて敵情を窺はしむ、然れども、此の方面に於ける敵の警戒は最も嚴重なるものあり、盛んに光弾を飛ばして我が行動を妨げ、容易に進出するを得ず、此に於てか止むなく再び坑道作業を續行することとなりしが、時に中央堡壘は早くも加藤聯隊に歸しありしを以て、我が砲隊の掩護射撃は小湛山北堡壘に集中せられ、敵の抵抗爲に大に衰ふるに至る、我が工兵即ち機に乗じて、猛然として堡壘の外壕に侵入し、鐵條網を破壊して歩兵の進路を開けり、即ち第一大隊長星野少佐は、挺身部下を麾いて堡壘に突撃し、午前四時五十分遂に占領を全うす、即ち更に一部隊をしてイルチス東砲臺に殺到せしめ、小湛山北側背に進出せる第二大隊(押川少佐)亦敵の猛火を冒して其の北部を占領するや、更にイ

ルチス方面に進み、百五十六高地に迫りて猛烈果敢なる攻撃を加へ、午前六時を以て之を占領せり。

此の間四十六聯隊にありても、我が砲隊の猛烈なる掩護により、早く已に突撃路の開鑿を了りて、戦機十分に熟せるものありしも、灰泉角及び小湛山砲臺よりする猛射に惱まされ、徒らに苦戦を重ねるのみ、容易に進出するを得ず、北堡壘の我が手に落つるに及び、友軍の掩護を受くるを得て、此に始めて突撃に移り、午前七時を以て、最後迄最も猛烈に抵抗せる小湛山北堡壘及び右翼散兵壕を奪取するを得たり。

此の戦闘に於て、堀内旅團の受けたる損害は、戦死下士以下三十三、負傷將校六、下士以下九十五を出だせるも、アツデルス少佐以下約七百の敵兵を捕虜とせり。

第八節 海軍の策動

日獨開戦と同時に、我が海軍は敵灣口に威力封鎖を行ひ、八月二十七日封鎖艦隊司令官加藤定吉中将は之を中外に宣言せり、爾來封鎖艦隊は、敵水雷の危険並に不良なる天候と戦ひつゝ、哨戒任務に従ひつゝあり、一面附近海面に掃海を行ひて、水雷の危険を除きつゝありしが、九月二十三日海軍軍令部は、加藤司令長官の報告に基づき、開戦以來の経過を發表する所あり、左の如し。

常隊は、去月二十七日、敵を膠州灣に壓迫して其の封鎖を宣言して以來、主力を以て黄海を制すると同時に、我が陸軍の海上輸送掩護に任ず、本月二日より十五日に至る間上村艦隊をして、旅順派遣隊と協同し、山東省北岸に於ける陸軍の揚陸作業を掩護せしめたり、而して又、此の期間、柄内、岡田兩司令官をして、膠州灣前部の海戦部隊を督して、嚴に封鎖せしめ、且つ掃海隊をして新上陸地點に對する航路の清掃を爲さしめたるに、何れも相共に其の任務を完了せり、尙航空隊が、本月五日以降、數次敵狀を偵察して、作戦上に多大の利益を與へ、且つ時々爆彈を投じて敵を脅威したる事實は、既に特報せる所の如し。

山東半島の南岸に於ける新上陸地點に對する海面は、上述の如く、掃海隊の努力に由り安全なる一路を開通し得たるを以て、十八日、上村戦隊掩護の下に、先づ海軍陸戦隊を上陸せしめ、附近の敵兵を驅逐して要地を占領し、次いで陸軍部隊の揚陸を開始したるが、爾後、陸續として來着する輸送船隊に對する作業は、極めて敏活に進捗しつゝあり、本職は、此に開戦以來常隊の執りたる行動概況を報告するに當り、麾下艦艇が、諸方面に分在して各種の作業に従事し、天候の阻害、其他諸般困難に會せしも、克く之れに耐へ、豫定の成果と協同動作の實績とを擧げ得たるは、是れ偏に皇威の然らしむる所とし

て、只管感激に堪へざると同時に、戦局の發展に伴ひ、士氣益々旺盛なるを見、將來戦果の愈々大なることを期待して止まず。

斯くの如くにして我が海軍は、陸軍輸送の掩護を始め、最も困難なる任務に従ひつゝありしが、爲に又幾分の犠牲を拂ふの止むを得ざるものあり、開戦劈頭に於て、我が封鎖部隊は、暗夜猛雨を冒して敵を監視しつゝある中、驅逐艦白妙は、灣外の暗礁に觸れ、急を聞きて集まり來れる僚艦等の救援によりて、百方引卸に努力する所ありしも、遂に離礁する能はず、恰も敵彈着距離内にあるを以て、此に久しく止まるを得ざるが故に、艦は適當なる處置を施したる上之を遺棄し、乗員は僚艦に搭して一時退去するの止むなきに至りたりき。

次いで勞山灣附近の掃海中、特務艦若宮丸及び掃海船第三長門丸は、九月三十日敵機械水雷に觸れ、若宮丸は僅に艦部を傷つけたるに止まりしも、第三長門丸は沈没し、戦死三名、負傷十二名を出だすに至り、續いて十月一日、掃海船弘養丸は、又敵機械水雷に觸れて沈没したるが、戦死上等兵曹以下四名、負傷五名を生じぬ。尙此の掃海中最も嘆美すべきは、我が勇敢なる三水兵の行動にして、八月三十日我が驅逐艦陽炎が、膠州灣外通航中、敵機械水雷の浮泛せるものを發見せるも、灰泉角砲臺より有效なる射撃を被りて、艦

の危険を受けんとするや、即ち端艇を卸して之が處理を爲さんとす、然るに當日風浪高くして、端艇の操縦危険なるのみならず、水雷は波に従ひて漂蕩し、爆發の恐れ少からず、時に同艦乗組三等兵曹石丸静夫、一等水兵清家英武、同柴垣定吉の三名は、決然身を躍らして波濤の中に投じ、かの水雷に泳着して完全なる處分をなし、無事艦に歸着したるが如きは、實に勇壯無比、我が軍人にして始めて此事あるを思はしめずんばならず。

爾來我が海軍は、一面封鎖、掃海等の作業に盡瘁すると共に、その主力艦は陸軍に策動して、攻圍作業を助けつゝあり、此の間高千穂は沈没の悲運に會したるも、我が勢力には殆んど影響なく、斯くて陸軍の總攻撃を開始するや、海軍亦大に之を助け、敵をして非常の苦痛を感ぜしむ、海軍省の公表せる所左の如し。

▲十月三十一日發表

十月二十五日以降、連日青島要塞を砲撃せる我が封鎖艦隊は、二十九、三十の兩日に亘り、更に英艦を加へて、敵の諸砲臺に對し猛烈なる射撃を行へり、其の戦況の如し。二十九日、天候靜穩なれども、淡き霧あり、我が艦隊は、董家灣南方海面に進出し、午前九時より日没時に至るまで、イルチス山、小湛山一帶の諸砲臺、及敵陣地を猛撃して多數の命中彈を算し、その効果少からざりしもの、如し、此の日敵は、僅に灰泉角